高崎市文化財調査報告書第 438 集

下里見宮谷戸遺跡4

－幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２０１９

高崎市教育委員会
学校法人 里 東 学 園
有限会社 毛野考古学研究所

高崎市文化財調査報告書第 438 集

下里見宮谷戸遺跡４

－幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２０１９

高 崎 市 教 育 委 員 会
学校法人 里 東 学 園
有限会社 毛野考古学研究所

例　言

1．本書は、幼稚園の新園舎建築に伴う下里見宮谷戸遺跡４の埋蔵文化財調査報告書である。

2．本遺跡は、群馬県高崎市下里見町字宮谷戸 451、452 － 1、453、454、455、457 番に所在している。

3．発掘調査および整理作業は、学校法人里東学園・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。

4．発掘調査から整理作業を経て本書作成・刊行に至る経費は、開発原因者である学校法人里東学園に負担して頂いた。

5．発掘調査は、有山径世（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、遺構測量・空撮は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。整理作業は、有山が行った。

6．発掘調査・整理作業は平成 31 年１月７日～令和元年９月 30 日の期間で実施した。

7．本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「754」である。

8．本書の執筆についてはＩを高崎市教育委員会、それ以外を有山が担当し、編集は有山が行った。

9．本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。

10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】　安積智之　五十嵐光子　荻野俊　鬼形敦子　岸ふじ江　新開昌代　鈴木武　関通世
山口友子　山田久志

【整理作業】　石原理久子　磯洋子　鬼形敦子　合田幸子　小谷貴世美　関小百里　竹中美保子
莅戸玲子　深谷道子　舛田光代　真下弘美

11. 発掘調査から報告書の刊行に至る過程で、下記の機関・諸氏のご教示・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

下里見公民館　伊藤明宏　早田勉　外山政子　三浦京子　吉田秋廣

凡　例

1．挿図中の北方位は座標北を、断面図の水準線数値は海抜標高を示す。座標は世界測地系を使用している。

2．遺構の略号は以下のとおりである。

竪穴建物跡：ＳＩ、溝跡：ＳＤ、配石遺構：ＳＴ、井戸跡：ＳＥ、土坑：ＳＫ、ピット：ＳＰ

3．遺構図および遺物実測図の縮尺については、各挿図中にスケールを付して表示した。

4．本文中および表中等で記す火山降下物の名称は、以下の略号を用いている。

浅間Ａ軽石：As-A（1783年）、浅間Ｂ軽石：As-B（1108 年）、浅間Ｃ軽石：As-C（３世紀末）、
浅間－板鼻黄色軽石：As-YP（13.000-14.000y.B.P）

5．遺構土層および遺物の色調観察は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006）に拠った。

6．本書掲載の第１図は高崎市発行１/2,500「高崎市都市計画基本図」、第２図は国土地理院発行１/200,000地形図「長野」・「宇都宮」、第３・４図は国土地理院発行 1/25,000 地形図「下室田」を引用し、一部改変している。

目　次

例言・凡例
目次・図版目次・表目次・写真図版目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　地理的・歴史的環境……2
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　調査の方法と経過……6
　1　調査の方法……6
　2　調査の経過……6
Ⅳ　基本層序……7
Ⅴ　検出された遺構と遺物……7
　1　竪穴建物跡……10
　2　溝跡……22
　3　配石遺構……27
　4　井戸跡……28
　5　土坑……28
　6　ピット……35
　7　遺構外出土遺物……37
Ⅵ　まとめ……39
写真図版
報告書抄録・奥付

図版目次

第 1 図　調査区位置図……1
第 2 図　遺跡の位置……2
第 3 図　周辺の遺跡……3
第 4 図　周辺の古墳墳……4
第 5 図　基本層序……7
第 6 図　第１面全体図……8
第 7 図　第２面全体図……9
第 8 図　１号竪穴建物跡出土遺物……10
第 9 図　１号竪穴建物跡……10
第 10 図　２号竪穴建物跡出土遺物……11
第 11 図　２号竪穴建物跡……11
第 12 図　３号竪穴建物跡出土遺物……12
第 13 図　３号竪穴建物跡……13
第 14 図　４号竪穴建物跡……14
第 15 図　４号竪穴建物跡出土遺物……15
第 16 図　５号竪穴建物跡（１）……17
第 17 図　５号竪穴建物跡（２）……18
第 18 図　５号竪穴建物跡出土遺物（１）……18
第 19 図　５号竪穴建物跡出土遺物（２）……19
第 20 図　６号竪穴建物跡……20
第 21 図　６号竪穴建物跡出土遺物……21
第 22 図　１～６号溝跡……23
第 23 図　７号溝跡……24
第 24 図　７号溝跡出土遺物……25
第 25 図　８号溝跡……26
第 26 図　８号溝跡出土遺物……27
第 27 図　１号配石遺構……27
第 28 図　１号井戸跡および出土遺物……28
第 29 図　１～６号土坑……29
第 30 図　５号土坑出土遺物……30
第 31 図　７号土坑……31
第 32 図　７号土坑出土遺物……32
第 33 図　９号土坑出土遺物……32
第 34 図　８～ 17 号土坑……33
第 35 図　12 号土坑出土遺物……34
第 36 図　１～ 20 号ピット……36
第 37 図　遺構外出土遺物……37
第 38 図　周辺の弥生時代の遺跡……39

表目次

第 1 表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表……11
第 2 表　２号竪穴建物跡出土遺物観察表……12
第 3 表　３号竪穴建物跡出土遺物観察表……13
第 4 表　４号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）……15
第 5 表　４号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）……16
第 6 表　５号竪穴建物跡出土遺物観察表……19
第 7 表　６号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）……21
第 8 表　６号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）……22
第 9 表　７号溝跡出土遺物観察表……26
第 10 表　８号溝跡出土遺物観察表……27
第 11 表　１号井戸跡出土遺物観察表……28
第 12 表　５号土坑出土遺物観察表……30
第 13 表　７号土坑出土遺物観察表……32
第 14 表　９号土坑出土遺物観察表……32
第 15 表　12 号土坑出土遺物観察表……34
第 16 表　ピット一覧表……35
第 17 表　遺構外出土遺物観察表……38

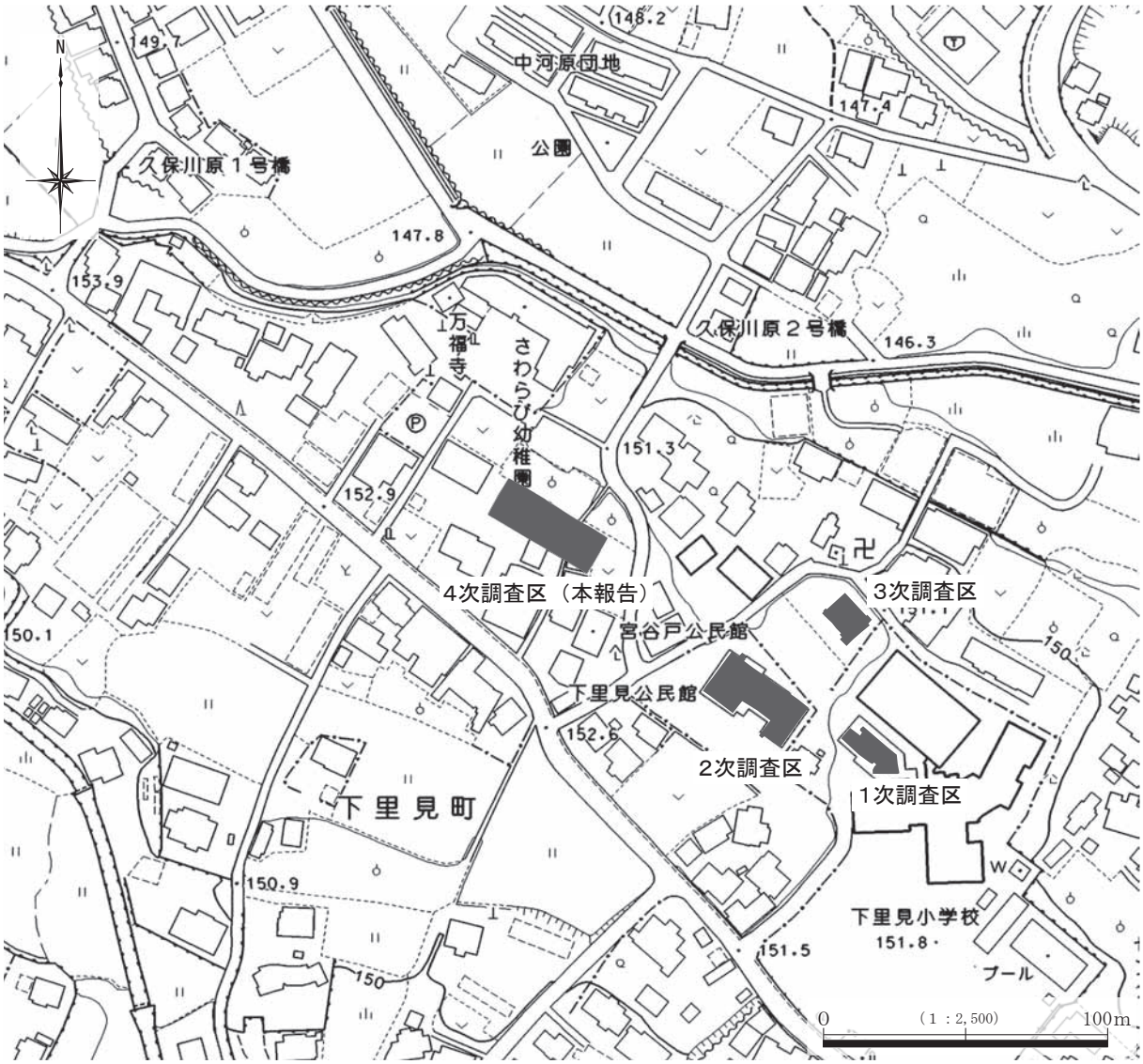
写真図版目次

ＰＬ．１　調査区遠景、調査区全景 第１面
ＰＬ．２　調査区全景 第２面、１号竪穴建物跡全景、１号竪穴建物跡カマド全景、２号竪穴建物跡全景、２号竪穴建物跡炭化材出土状態
ＰＬ．３　３号竪穴建物跡全景、４号竪穴建物跡全景、４号竪穴建物跡Ｐ２遺物出土状態、４号竪穴建物跡Ｐ２遺物近景、４号竪穴建物跡Ｐ２石出土状態、４号竪穴建物跡Ｐ２石近景、５号竪穴建物跡全景、５号竪穴建物跡全景
ＰＬ．４　５号竪穴建物跡炉全景、５号竪穴建物跡炉近景、５号竪穴建物跡貯蔵穴全景、６号竪穴建物跡全景、６号竪穴建物跡貯蔵穴全景、６号竪穴建物跡貯蔵穴近景、１号溝跡全景
ＰＬ．５　２号溝跡全景、３号溝跡全景、４号溝跡全景、５号溝跡全景、６号溝跡全景、７号溝跡土層断面
ＰＬ．６　７号溝跡全景、７号溝跡遺物出土状態、８号溝跡全景、７・８号溝跡全景
ＰＬ．７　１号配石遺構上面全景、１号配石遺構下面全景、１号井戸跡全景、１号井戸跡石出土状態、１号土坑全景、２号土坑全景、３号土坑全景、４号土坑全景
ＰＬ．８　５号土坑全景、６号土坑全景、７号土坑上面石出土状態、７号土坑下面石出土状態、７号土坑最下面石出土状態、８号土坑全景、10 号土坑全景
ＰＬ．９　９号土坑全景、９号土坑遺物近景、11 号土坑全景、12 号土坑全景、13 号土坑全景、14 号土坑全景、15 号土坑全景、16 号土坑全景
ＰＬ．10　17 号土坑全景、基本層序Ａ北西壁、基本層序Ａ南西壁、出土遺物（１）
ＰＬ．11　出土遺物（２）
ＰＬ．12　出土遺物（３）

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 28 年 12 月、事業者および施工責任者である学校法人里東学園から、高崎市下里見町において計画しているさわらび幼稚園新園舎建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課 (以下、市教委と略) にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である下里見宮谷戸遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年 12 月 20 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘 (確認) 調査依頼書が提出され、翌年 2 月 6 日と 7 日に試掘 (確認) 調査を実施した。その結果、古墳時代の土坑とピット群を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「下里見宮谷戸遺跡 4」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成 30 年 12 月 3 日に学校法人里東学園と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日に学校法人里東学園・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



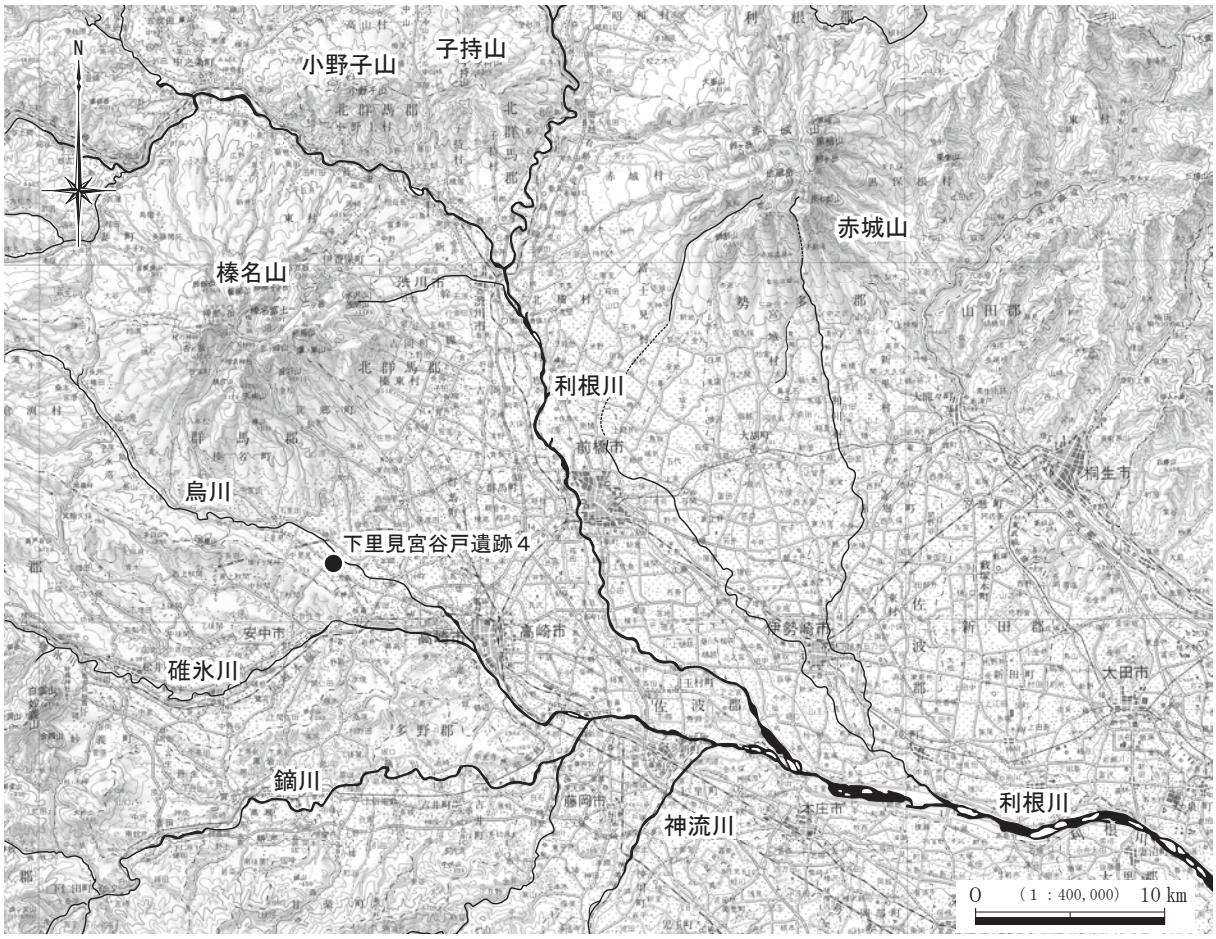
第 1 図　調査区位置図

Ⅱ　地理的・歴史的環境

1　地理的環境

下里見宮谷戸遺跡は、高崎市西部榛名地域（旧群馬郡榛名町）の下里見町に位置する（第２図）。榛名地域は榛名山の山頂部から南半域を占め、烏川を挟んだ南側の里見丘陵（秋間丘陵）尾根筋までを範囲としている。当該地域は南東流する烏川よって南北に分断されており、地形は烏川の浸食によって形成された河岸段丘、約５万年前に榛名山の火山活動で発生した室田火砕流によって形成された台地（里見台地･室田台地･十文字台地・本郷台地）と、これらを侵食する小河川、そして烏川沿いの谷底平野からなる。

遺跡地は烏川南岸の里見地区に所在する（第３図）。里見地区は烏川を北の境とし、南は安中市に接する里見丘陵の稜線によって区切られた、北西から南東にのびる範囲である。地形は南から里見丘陵の稜線、丘陵北斜面、烏川による上位河岸段丘、室田火砕流台地の南端である里見台地、これを浸食して形成された下位河岸段丘、低地となる。また、里見丘陵東北側の山腹から流出する小流が、各所で上位河岸段丘を分断流下して集まって里見川となり、里見台地との間に小規模の谷地形を形成している。里見川は台地を分断して下位河岸段丘面に流出し、向井川と合流し蛇行しながら南東流する。これらは下位河岸段丘を貫流して開析し、複雑な低地を形成している。本遺跡は下位河岸段丘面の周縁に立地し、遺跡の北東側は低地へと急傾斜している。標高は現地表面で約 153ｍである。



第２図　遺跡の位置

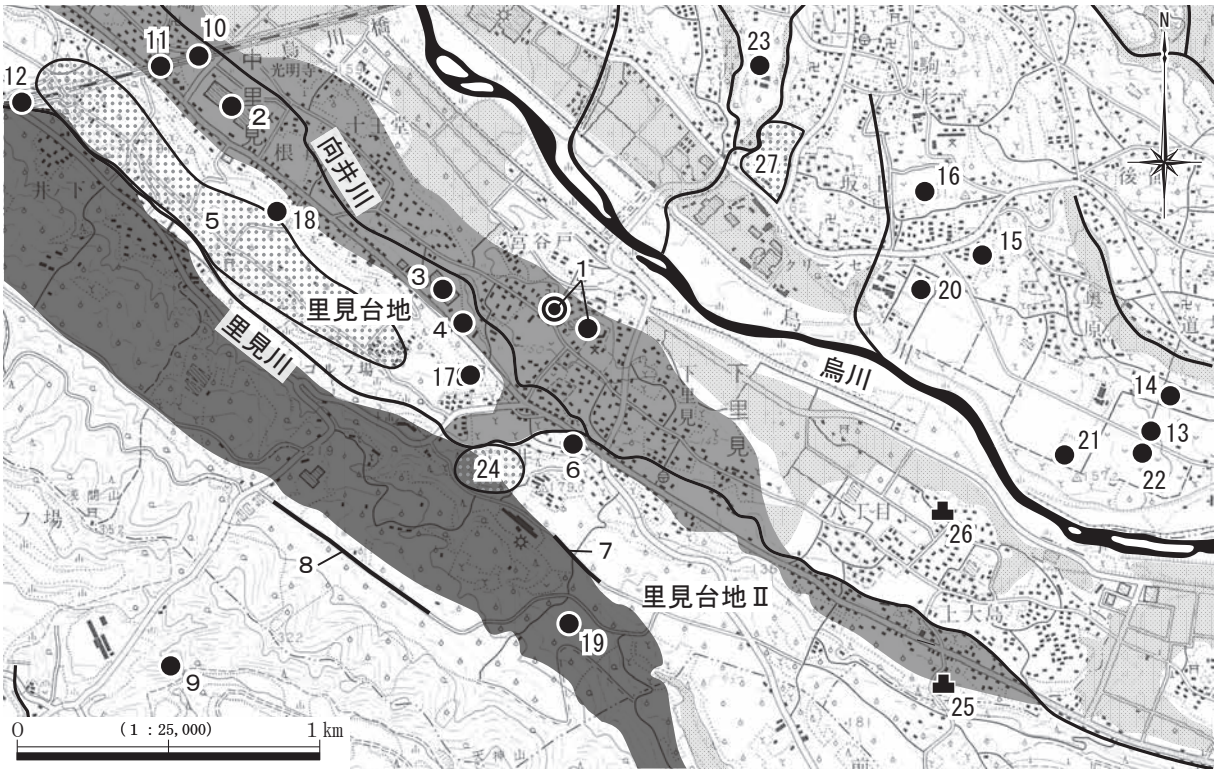
2　歴史的環境

ここでは本遺跡が立地する烏川右岸に主眼をおいて、周辺遺跡の概略を記載する（第３・４図）。

旧石器時代　本遺跡周辺で当該期の遺跡は発見されていない。榛名地域全域に目を向けても、烏川左岸の十文字台地上にある三ツ子沢中遺跡と白岩民部遺跡の２遺跡が知られるのみである。ともに後期旧石器時代のナイフ型石器を主体とする遺跡である。

縄文時代　前期の遺跡は丘陵傾斜地と上位河岸段丘の境や、里見台地、下位河岸段丘面に点在する。下里見上ノ原・中原遺跡（７）で住居跡が、上里見井ノ下遺跡（12）で土坑や埋甕が検出されている。堂尾根遺跡（８）や本遺跡（１）第１次調査でも土器片や石器が出土している。また、烏川対岸では十文字台地に位置する日輪遺跡（16）で住居跡が検出されている。中期から晩期にかけての遺跡は下位河岸段丘面に分布がみられる。中期は本遺跡第２次調査で住居跡が検出されている。後期は本遺跡第４次調査で土器片が、晩期は中通遺跡（６）、中里見中川遺跡（10）、中里見根岸遺跡（11）で土器片や石器が出土している。

弥生時代　前期の遺跡はみられず、存在が確認できるようになるのは中期中葉の段階からである。中里見原遺跡（５）で再葬墓が１基、下里見上ノ原・中原遺跡で住居跡が１棟検出されるなど、里見台地上に遺跡が点在している。中期後半には本遺跡第４次調査で住居跡（報文中は竪穴建物跡と呼称、以下同様）２棟、



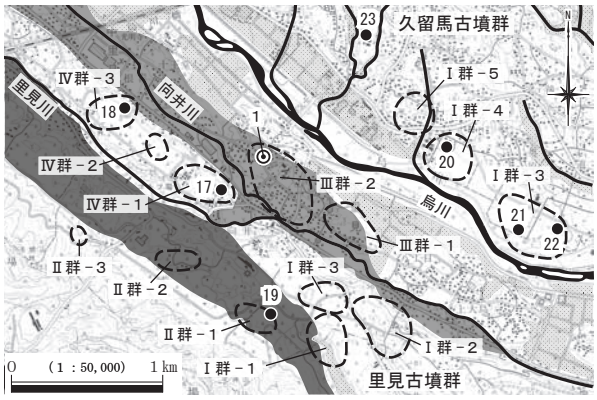
※里見台地および里見台地Ⅱの区分は『榛名町誌 資料編１ 原始古代』から引用している。

低地　下位河岸段丘　上位河岸段丘

１．下里見宮谷戸遺跡１～４　２．根岸遺跡　３．根岸Ⅱ遺跡　４．根岸Ⅲ遺跡　５．中里見原遺跡　６．中通遺跡
７．下里見上ノ原・中原遺跡　８．堂尾根遺跡　９．二反田遺跡　10．中里見中川遺跡　11．中里見根岸遺跡
12．上里見井ノ下遺跡　13．道場遺跡　14．道場Ⅲ遺跡　15．本郷奥原遺跡　16．日輪遺跡　17．下里見諏訪山古墳
18．赤城山古墳　19．堂尾根２号墳　20．奥原 53 号墳　21．的場Ｅ号墳　22．本郷大塚古墳　23．伊勢殿山古墳
24．里見城　25．小五郎砦　26．上大島館　27．高浜の砦

第３図　周辺の遺跡

第３次調査で再葬墓の可能性がある土坑１基が確認され、下位河岸段丘面でも遺跡が認められるようになる。後期になると、烏川左岸の本郷台地上に遺跡が集中し展開する様子がみられる。これに対し、右岸で確認されるのは本遺跡（１）のみである。第３次調査で礫床墓４基、第４次調査で住居跡２棟が検出されている。



※古墳群の区分は『榛名町誌 資料編１ 原始古代』から引用している。
第４図　周辺の古墳群

古墳時代　当該期の墓制をみると、弥生時代終末期～古墳時代初頭には方形周溝墓が確認されている。方形周溝墓は在地系の墓制ではなく、西からの影響を受けて出現した外来系の墳墓である。里見台地上の中里見原遺跡（５）で方形周溝墓が１基検出されており、その規模が大形であることから、外来系首長の墳墓の可能性が指摘されている。４世紀前半代には烏川左岸の本郷台地上に本郷大塚古墳（22：綜覧久留馬村第 13 号墳）が築かれ、榛名地域の古墳の築造はこの全長 73 ｍの前方後円墳をもって幕開けとなる。その後、烏川を挟んだ右岸の里見地区（里見古墳群）と左岸の本郷地区（久留馬古墳群）で、対峙するかのように古墳群が形成されていく。この嚆矢となったのが、６世紀前半代に築造された下里見諏訪山古墳（17:綜覧里見村第 41 号墳）や的場Ｅ号墳（21）である。里見古墳群は上位河岸段丘（里見Ⅱ群）、里見台地（里見Ⅰ・Ⅳ群）、下位河岸段丘（里見Ⅲ・Ⅴ群）に分布し、本遺跡周辺ではⅠ～Ⅳ群が確認される。里見Ⅰ群は平夷されてほとんど残っていない。里見Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ群は７世紀代の群集墳である。里見Ⅱ群の堂尾根２号墳（19）は７世紀末の山寄せ円墳である。里見Ⅳ群は６世紀代に下里見諏訪山古墳や赤城山古墳（18：綜覧里見村第 47 号墳）が築造され、７世紀代に最も盛行する。なお、里見古墳群は現在のところ烏川右岸地域における古墳分布の上限域となる。

他方で、烏川左岸には７世紀後半の寺院跡と想定される本郷奥原遺跡（15）が立地する。７世紀後半でも早い時期に位置づけられる素弁四弁蓮華文軒丸瓦や、白鳳期の寺院である前橋市山王廃寺跡出土のものと同じ軒丸瓦の存在から、県内で最も早く造られた寺院の一つと考えられている。遺跡の西側には６～７世紀に形成された本郷奥原古墳群（久留馬古墳群Ⅰ－４群）が隣接する。古墳群の中央には、群内最大規模の円墳である奥原 53 号墳（20）が位置する。本郷奥原遺跡の広がりと古墳群の分布をみると、寺院跡と古墳群は一線を画しており、計画的に造営された様子が看取される。

集落遺跡は、４世紀前半～５世紀前半代については、本遺跡第２・３次調査で４世紀後半および５世紀前半の住居跡が数棟が検出されているが、全体的に不明瞭である。５世紀後半代になると集落や住居軒数が増加する。右岸では下位河岸段丘面に集落が造営され、本遺跡第１～３次調査では多数の住居跡が検出された。このうち第１次調査の５号竪穴建物跡は一辺７ｍを超える大形で、初期須恵器を有するなど、他に対する優位性が窺われる。後期は里見台地上へと移り、６世紀代は下里見上ノ原・中原遺跡（７）で、７世紀代は中里見原遺跡で住居跡が検出されている。左岸では本郷台地上の道場Ⅲ遺跡（14）で中期後半～後期後半の住居跡が検出されている。日輪遺跡（16）は６世紀代に形成され、７世紀代に住居軒数が増加する集落で、前述した本郷奥原古墳群の背景にある集落と想定されている。

生産遺跡については、中里見中川遺跡（10）で As-C 下水田跡が検出されており、下位河岸段丘上の小河川周辺の低地で水田耕作が営まれていたと推測される。水田以外では、５世紀後半～６世紀にかけて鉄器生産関連の遺物が少量ながら確認されている。本遺跡第３次調査では、埋没の進行した５世紀前半代の住居跡

から金床が出土している。古墳からの出土例が多いなか、集落における初めての出土事例として注目される。

奈良・平安時代　奈良時代以降、律令地方制度において郡・郷制が整備されていく。榛名地域は前代の古墳群のまとまりが郡域の形成に繋がり、烏川右岸が碓氷郡（通説は片岡郡）、左岸が群馬郡に属していたと考えられる。集落遺跡は、右岸の中里見原遺跡（５）において８世紀末～ 10 世紀後半にかけて継続する大規模集落が形成される。さらに、里見廃寺と想定される９世紀前半の基壇状建物跡も検出されており、採集遺物からは 10 世紀に比定される「佛」の墨書土器や瓦等なども確認されている。そのほか、上里見井ノ下遺跡（12）では９世紀前半および 10 世紀前半の住居跡が、中里見中川遺跡（10）および中里見根岸遺跡（11）で 10 世紀代の住居跡が、本遺跡（１）第１～４次調査で 10 世紀代～ 12 世紀初頭の住居跡が検出されている。左岸の集落は、８世紀代の日輪遺跡（16）、９世紀前半の道場遺跡（13）、10 世紀代の道場Ⅲ遺跡（14）など、本郷台地上に展開している。

生産遺跡については、As-B 下の水田跡が下位河岸段丘を貫流する向井川や里見川のつくる低地部で検出されており、根岸遺跡（２）、根岸Ⅱ遺跡（３）、根岸Ⅲ遺跡（４）、中里見中川遺跡、中里見根岸遺跡で検出されている。As-B 下の畠跡は本遺跡第１～３次調査や中通遺跡（６）で認められている。古墳時代から存在が知られる鉄生産関連遺跡は、平安時代になって数が増加する。中里見中川遺跡で製鉄炉２基、中里見根岸遺跡で 10 世紀後半頃の鍛冶炉１基が検出されている。中里見原遺跡の竪穴状遺構からは鉄滓・羽口が多量に出土し、鉄生産に関わる遺構ないし残滓廃棄坑の可能性が指摘されている。鉄生産には燃料の炭が必要であるが、上里見井ノ下遺跡の台地西斜面で大型の炭窯５基が検出されている。また、里見丘陵南側の安中市秋間地区には県下最大規模を誇る秋間古窯跡群が存在する。７世紀初頭の操業と推定され、須恵器や瓦生産が行われていた。８～９世紀代には多くの支群が操業されており、二反田遺跡（９）はこの時期の支群のひとつである。

中近世　平安時代末期の院政時代になると、上野に数々の荘園が成立する。里見地区は「八幡荘」の一部であった可能性が高く、新田義重（上野国新田荘を本貫とする新田氏の祖）の子義俊が入部し、里見氏を称したという。里見氏の居館については明確でないが、方形館址として中里見字堀之内の里見館址、下里見字古城の里見城（24）という説がある。しかし、これについては否定的な見方が強く、前者は南北朝、後者は戦国期のものとみられている。上大島館（26）は短形の方形館と考えられ、義俊の孫義基の子大島二郎為義がいたという説あるが確証はない。小五郎砦（25）は、鎌倉幕府を倒した立役者の一人である新田義貞の館址とされる。義貞は義俊六代の孫大炊介忠義の五男で、幼名を里見小五郎といったが、宗家新田朝氏の養子となって新田小太郎義貞を称したという説がある。

室町時代、関東管領を務める上杉氏は山内上杉氏と扇谷上杉氏に分裂して対立し、上野国は山内上杉氏の支配下となる。戦国期には、山内上杉家十五代当主の上杉憲政の配下として、長野業政が榛名山東南麓の箕輪城に居城し、箕輪衆と呼ばれる在郷武士団をまとめ勢力を保っていた。永禄３年（1560）、上杉景虎（謙信）が上野に進出すると、これに呼応して本地域には西から武田信玄が侵攻し、永禄９年（1566）に箕輪城は落城する。高浜の砦（27）は箕輪城の支城で、信玄の箕輪城攻撃はこの砦の急襲から開始されたという。以後、箕輪城は武田氏の要城のひとつとなり、上杉氏との抗争の拠点となる。天正 10 年（1582）に武田氏が織田信長に滅ぼされると、信長腹心の滝川一益が上野に入る。しかし、同年の信長殺害後に一益は後北条氏との合戦に敗れ、上野はほぼ後北条氏に制圧された。天正 18 年（1590）、豊臣秀吉によって後北条氏が滅ぼされると、その領域は徳川家康に与えられた。同年の家康の関東入国に伴い、箕輪城には重臣の井伊直政が封じられ、榛名地域の村々はその支配下に組み入れられた。

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

発掘調査では、試掘調査の結果に基づいて 0.25㎥バックホーにより表土掘削を実施した。その後、ジョレンを使用して、人力による遺構確認作業を行った。遺構は適宜土層観察用のベルトを設定し、移植ゴテ等を用いて掘削を行った。遺構測量は、平面図はトータルステーションを用い、断面図は手実測で測量した。測量に用いた基準点は GNSS による観測で設置し、座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて撮影し、35㎜判のフィルムカメラ（FM2：モノクロ・カラーリバーサル）とデジタル一眼レフカメラ NikonD5500（2416 万画素）を使用した。空中写真はドローン（Dji Phantom3）にて撮影した。

整理作業では、遺構図面の修正を行い、第二次原図を作成した。出土遺物は、洗浄・注記後に溶剤系接着剤（セメダイン C）を用いて接合し、必要に応じてエポキシ系樹脂で補強を行った。遺物写真はデジタル一眼レフカメラ Nikon D750 で撮影した。遺構図・遺物実測図のトレース、写真の縮尺変更・トリミング、原稿執筆・編集にはそれぞれ Adobe IllustratorCS2、Adobe PhotoshopCS2、Adobe InDesignCS2 を使用した。

2　調査の経過

現地での発掘調査は 2019 年 1 月 7 日～ 2019 年 2 月 22 日で実施した。

1 月期　7 日：近隣住民への挨拶および発掘器材の搬入を行う。 8 日：重機を搬入し、第 1 面の表土掘削を開始する。10 日：発掘補助員を動員し、遺構確認作業を開始する。安全対策を講じる。12 日：表土掘削および残土整形を終了し、重機を搬出する。15 日：遺構確認作業を終了し、各遺構の調査に着手する。16 日：基準点測量を実施し、BM 杭を設置する。遺構掘削と並行して、随時、セクション・遺物出土状態・完掘状態の写真撮影および測量を行う。22 日：第 1 面下の遺構の有無を確認するため、調査区中央の北・南壁際にトレンチを設定して 50 ～ 60㎝ほど掘り下げを行う。その結果、竪穴建物跡の床面と思われる硬化面および弥生時代の土器片が検出され、第 1 面の下に遺構が存在することが判明した。24 日：基本層序の掘削を行う。25 日：各遺構の平面図および調査区のコンタ測量を行う。28 日：調査区の全体清掃を行い、ドローンによる空撮を行う。空撮後、竪穴建物跡の掘り方調査を行い、第 1 面の調査を終了する。29 日：重機を搬入し、第 2 面までの掘削を開始する。31 日：重機掘削および残土整形を終了し、重機を搬出する。

2 月期　1 日：第 2 面の遺構確認作業を行う。 4 日：BM 杭の再設置を行う。各遺構の調査に着手し、並行して測量や写真撮影等の記録作業を行う。15 日：各遺構の掘削を終了する。18 日：第 2 面の全体清掃を行う。19 日：第 2 面の空撮を行う。空撮後、各遺構の完掘写真撮影および調査区のコンタ測量を行う。20 日：竪穴建物跡および井戸跡の掘り方調査を行う。21 日：高崎市教育員会による完了検査を実施する。22 日：発掘器材の搬出を行い、現場作業を全て完了する。

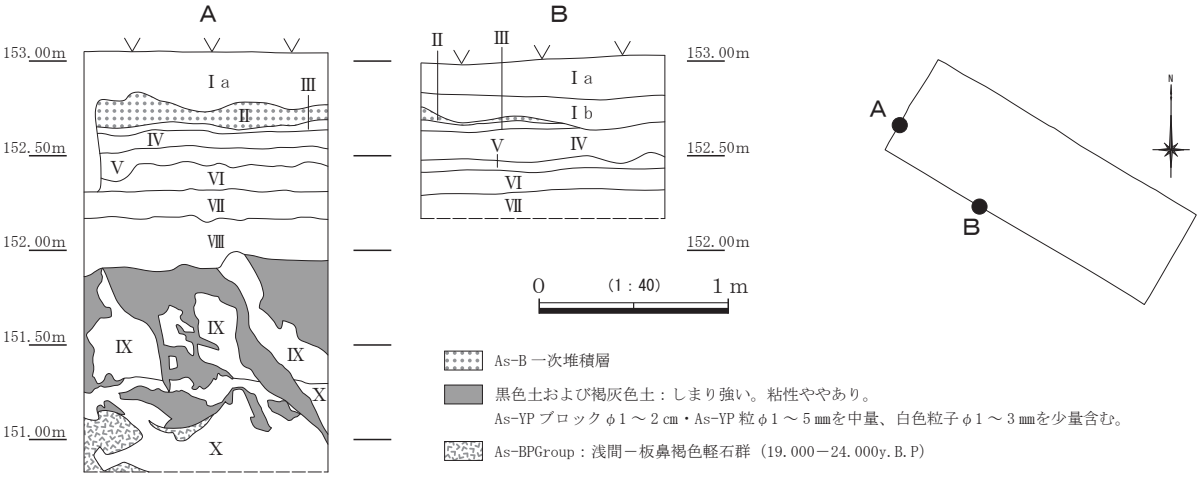
整理作業は、発掘調査終了後から 2019 年 9 月 30 日まで実施した。

3 月期：遺物の洗浄・注記。遺構図面・写真の基礎整理。 4 月期：遺物の接合・復元・選別。 5 月期：遺物の写真撮影。遺物写真の縮尺変更・トリミング。 6 月期：遺物実測。遺構第二次原図の作成。 7 月期：遺物実測図トレース。 8 月期：図版作成、原稿執筆、編集作業。入稿。 9 月期：報告書の校正、印刷・製本。

Ⅳ　基本層序

基本層序は調査区北西壁（A）および南西壁（B）で確認した（第５図／ＰＬ．10）。Ⅰａ・Ⅰｂ層は現代の整地土層で As-A を含む。Ⅱ層は As-B 一次堆積層で、最下位に灰色火山灰が薄く堆積している。Ⅲ層は黒褐色土層で As-B 下の旧地表面である。Ⅱ・Ⅲ層は調査区の大半でⅠ層に削平されており、北西と南東の壁際で部分的に確認されるのみである。そのため、今回の調査区では As-B 下の遺構は残存していない。Ⅳ層は As-C 混入黒褐色土層、Ⅴ層は As-C 混入灰黄褐色土層、Ⅵ層は As-C 混入黒色土層である。Ⅶ層は As-C 混入灰黄褐色土層で、弥生時代の遺物を包含する。Ⅷ層はにぶい黄褐色ローム土層である。Ⅸ層は明黄褐色 As-YP 層、Ⅹ層は灰褐色粘質土層である。遺構確認面は第１面をⅥ層上面、第２面をⅧ層上面とした。

Ⅸ・Ⅹ層は堆積が乱れており、黒色土や褐灰色土が斜めの筋状やブロックとして入り込んでいた。Ⅹ層中には As-BPGroup のブロックも確認された。このような様相は調査区全体に及んでいる。株式会社火山灰考古学研究所の早田勉氏に実見していただく機会を得、地層の乱れは地震による地滑りの可能性があり、間に入る黒色土は縄文時代後晩期に比定されるのではないかとの所見をいただいた。



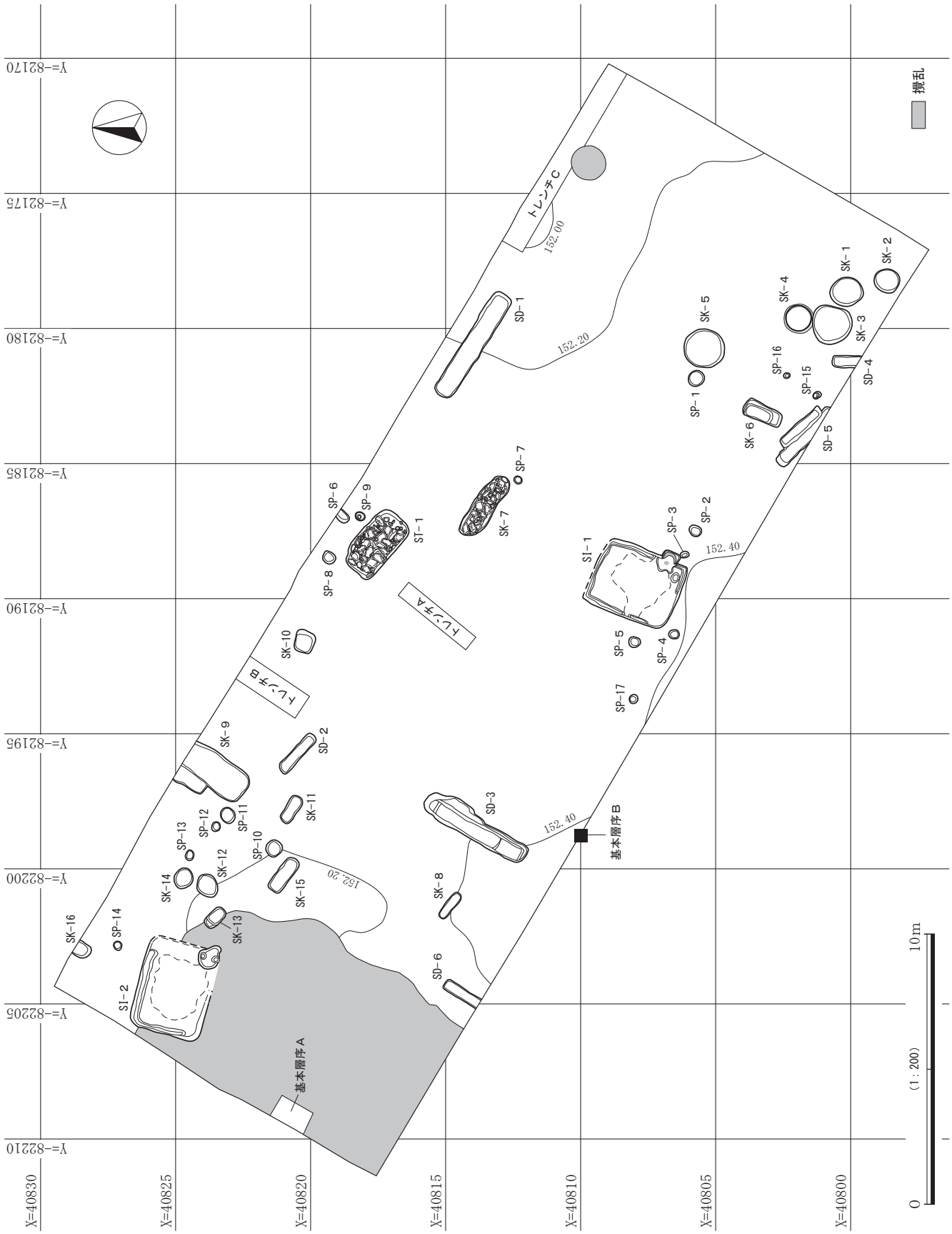
基本層序

Ⅰa. 灰褐色土 7.5YR4/2：しまり硬い。粘性やや弱い。As-A φ1～5㎜を多量含む。石・木くず・ゴミなどが入る。現代の整地土層。
Ⅰb. 褐灰色土 7.5YR4/1：しまり硬い。粘性やや弱い。As-A φ1～3㎜を多量含む。現代の整地土層。
Ⅱ. As-B 一次堆積層：しまり・粘性弱い。下位に薄く灰色火山灰が確認される。
Ⅲ. 黒褐色土 7.5YR3/2：しまりあり。粘性ややあり。As-B 下の旧地表面。上位に鉄分が沈着。
Ⅳ. 黒褐色土 7.5YR3/1：しまり・粘性ややあり。As-C φ1～3㎜を中量含む。
Ⅴ. 灰黄褐色土 10YR4/2：しまり・粘性ややあり。As-C φ1～3㎜を少量含む。
Ⅵ. 黒色土 10YR2/1：しまり・粘性ややあり。As-C φ1～5㎜を多量、As-YP 粒 φ1～2㎜を少量含む。
Ⅶ. 灰黄褐色土 10YR4/2：しまり・粘性ややあり。As-C φ1～2㎜・ローム粒 φ1～3㎜を多量、炭化物粒 φ1～2㎜を微量含む。遺物包含層。
Ⅷ. にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまり硬い。粘性あり。ロームブロック φ1～10㎝・ローム粒 φ1～5㎜を多量、白色粒子 φ1～5㎜を中量含む。ローム層。
Ⅸ. 明黄褐色土 10YR6/6：しまり硬い。粘性ややあり。白色粒子 φ1～2㎜を多量含む。As-YP 層。
Ⅹ. 灰褐色粘質土 5YR6/2：しまり強い。粘性あり。白色粒子 φ1～2㎜を少量含む。

第５図　基本層序

Ⅴ　検出された遺構と遺物

今回の調査では２面にわたり遺構を確認した。第１面では、平安時代の竪穴建物跡２棟、古墳時代～平安時代の配石遺構１基、近世の溝跡６条、中近世の土坑 16 基、古墳時代および中近世のピット 17 基を検出した（第６図）。第２面では、弥生時代の竪穴建物跡４棟、古墳時代の溝跡２条、近世の井戸跡１基、古墳時代～平安時代の土坑１基、古墳時代のピット３基を検出した（第７図）。以下、遺構ごとに記載する。


撹乱
トレンチC
トレンチB
トレンチA
152.00
152.20
152.40
152.40
152.20
SD-1
SD-2
SD-3
SD-4
SD-5
SD-6
SK-1
SK-2
SK-3
SK-4
SK-5
SK-6
SK-7
SK-8
SK-9
SK-10
SK-11
SK-12
SK-13
SK-14
SK-15
SK-16
SP-1
SP-2
SP-3
SP-4
SP-5
SP-6
SP-7
SP-8
SP-9
SP-10
SP-11
SP-12
SP-13
SP-14
SP-15
SP-16
SP-17
ST-1
SI-1
SI-2
基本層序A
基本層序B
X=40830
X=40825
X=40820
X=40815
X=40810
X=40805
X=40800
Y=-82210
Y=-82205
Y=-82200
Y=-82195
Y=-82190
Y=-82185
Y=-82180
Y=-82175
Y=-82170
0
(1:200)
10m

第６図　第１面全体図

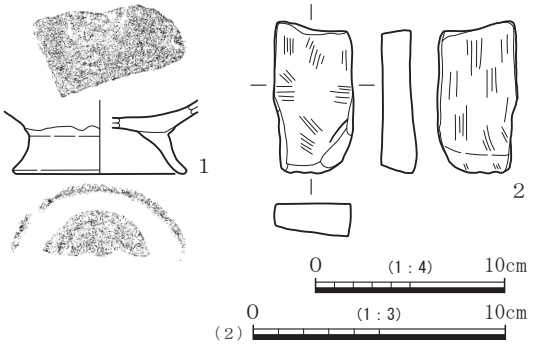
撹乱
SI-6
151.80
SE-1
152.00
SP-18
SD-8
SI-5
SI-4
152.00
SP-20
SK-17
152.20
SD-7
SP-19
152.00
SI-3
基本層序B
152.00
基本層序A
Y=-82170
Y=-82175
Y=-82180
Y=-82185
Y=-82190
Y=-82195
Y=-82200
Y=-82205
Y=-82210
X=40830
X=40825
X=40820
X=40815
X=40810
X=40805
X=40800
0
(1:200)
10m

第７図　第２面全体図

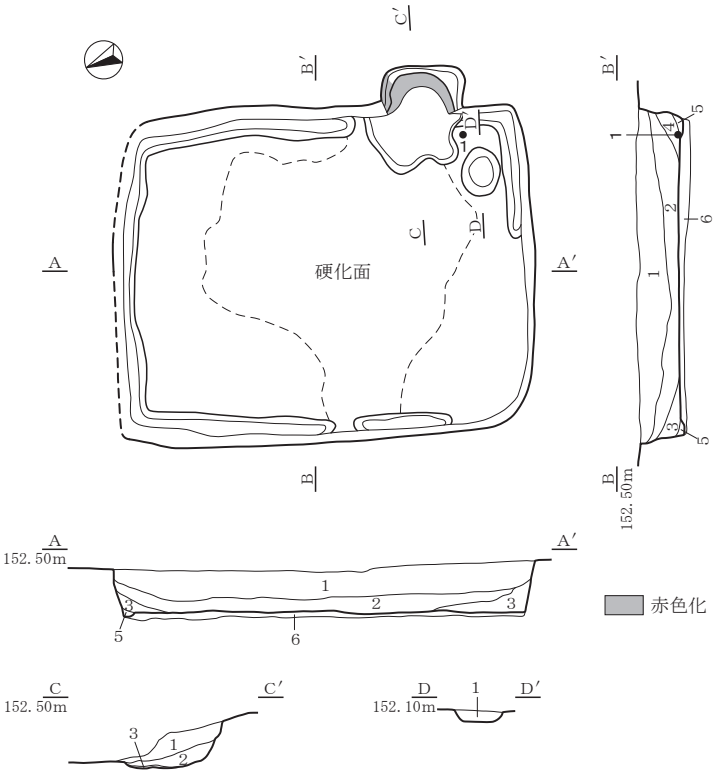
1　竪穴建物跡

1号竪穴建物跡（第８・９図、第１表／ＰＬ．２・10）

位置：X=40810～40807、Y=-82192～-82188。重複関係：５号竪穴建物跡、７号溝跡、17号土坑、20号ピットと重複し、本遺構が新しい。平面形態：南北方向に長い隅丸長方形を呈する。規模：長軸3.33ｍ、短軸2.67ｍ、確認面からの深さ37㎝。主軸方位：Ｎ－115°－Ｅ。埋没状況：覆土はAs-C・炭化物粒を含むにぶい黄褐色～褐灰色土を主体とし、自然埋没と想定される。床面の状態：平坦である。床面は全体的に締まっており、カマド前から竪穴中央にかけて顕著な硬化面が認められた。カマド：東壁の南寄りに付設される。カマドは壊されており、形態や構築材などは不明である。主軸は竪穴と同方位を指す。全長は84㎝を測る。煙道部側の壁面は被熱により赤色化している。柱穴：認められない。貯蔵穴：カマドの右脇、竪穴の南東コーナー部に位置する。楕円形を呈し、断面形態は浅い逆台形を呈する。規模39㎝×31㎝、深さ９㎝を測る。壁周溝：カマド部分および南壁の西半分を除いて検出された。西壁下では一ヵ所途切れる部分がある。幅８～16㎝、深さ３～５㎝を測る。掘り方：全面に貼床が認められる。貼床は灰褐色土を主体とし、厚さは４～９㎝である。掘り方の底面には凹凸がみられる。遺物出土状況：覆土中から土師器甕、須恵器碗の破片が少量出土している。床面直上から出土した遺物は、カマド右脇の須恵器碗（１）のみである。土器以外では、竪穴北東部の覆土中から砥石（２）が出土している。時期：10世紀後半。



第８図　１号竪穴建物跡出土遺物



ＳＩ－１Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′土層説明

1．にぶい黄褐色土10YR5/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-Cを多量、ローム粒を少量、炭化物粒φ0.5～１㎝を微量含む。
2．褐灰色土10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-Cを多量、ローム粒を中量、炭化物粒φ２～３㎜を少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C・ローム粒・ロームブロックφ２～３㎝を中量含む。
4．にぶい褐色土7.5YR5/4：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C・ローム粒・炭化物粒φ１～５㎜・焼土粒φ１～５㎜を少量含む。
5．黒褐色土10YR3/1：しまり・粘性やや弱い。As-Cを多量、ローム粒を中量含む。壁周溝。
6．灰褐色土7.5YR4/2：しまりあり。粘性やや弱い。As-Cを多量、ローム粒・黒褐色土を少量含む。掘り方。

ＳＩ－１Ｃ－Ｃ′土層説明

1．灰褐色土10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-Cを多量、ローム粒・焼土粒φ１～３㎜を中量、炭化物粒φ１～２㎜を少量含む。
2．褐灰色土10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。焼土粒φ１～３㎜を多量、As-C・炭化物粒φ１～２㎜を少量含む。
3．褐灰色土10YR4/1：しまり・粘性やや弱い。灰・焼土粒φ１～３㎜を多量、炭化物粒φ１～２㎜を少量含む。

ＳＩ－１Ｄ－Ｄ′土層説明

1．褐灰色土10YR4/1：しまり・粘性やや弱い。As-Cを多量、ローム粒・炭化物粒φ１～５㎜を少量含む。

0　(1：60)　2ｍ

第９図　１号竪穴建物跡

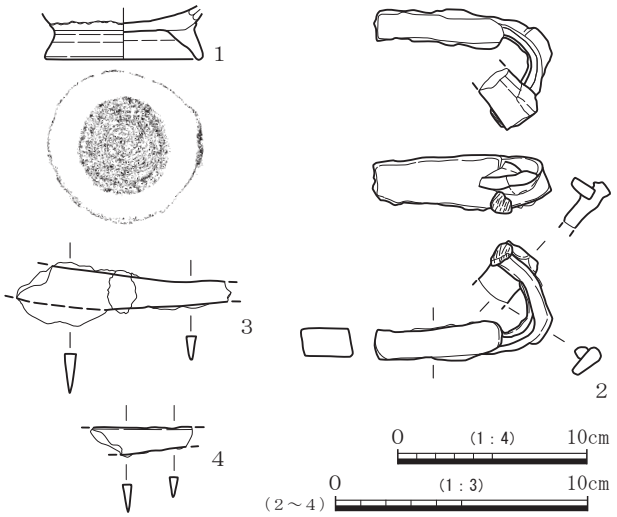
第１表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

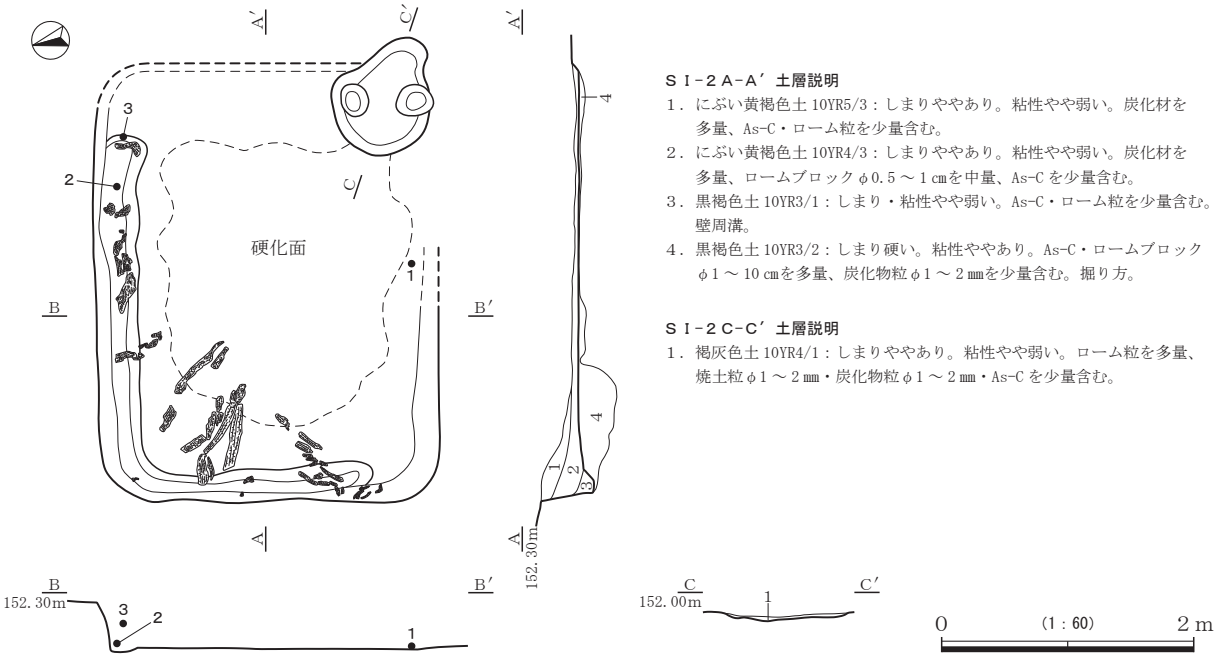
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	須恵器 碗	口径：－ 底径：9.2 器高：[3.9]	①還元焔(焼成不良)　②内外：にぶい黄橙　③角閃石、白色粒 ④底部～高台部 1/3	外面：ロクロナデ。底面回転糸切り、高台貼付時に周縁回転ナデ。 内面：ロクロナデ。	南東部床面直上
番号	器種		①法量 (cm . g)　②材質　③残存　④成・整形技法の特徴		出土位置／備考
2	砥石	①長さ:6.0、最大幅:3.2、最大厚:1.4、重さ:42.01　②流紋岩　③完形　④４面使用。表裏面は非常に平滑。			北東部覆土中

２号竪穴建物跡（第 10・11 図、第２表／ＰＬ．２・10）

位置：X=40827 ～ 40824、Y=-82207 ～ -82203。重複関係：なし。南東側は現代の攪乱に壊される。平面形態：東西方向に長い隅丸長方形を呈する。竪穴の南東側が攪乱で壊されていたため推定プランとなる。規模：長軸推定 3.48 m、短軸 2.72 m、確認面からの深さ 36㎝。主軸方位：Ｎ－ 105°－Ｅ。埋没状況：覆土は As-C・炭化材を多量に含むにぶい黄褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。北・西壁際から竪穴中央へ向かって、斜めに落ち込むように炭化材が出土しており、屋根材の垂木と推測される。床面の状態：平坦である。床面は全体的に締まっており、カマド前から竪穴中央にかけて顕著な硬化面が認められた。カマド：東壁の南コーナー部に付設される。カマドは壊されており、形態や構築材は不明である。小穴が２ヵ所確認されており、袖石等などの構築材を抜き取った痕跡と推測される。主軸方位はＮ－ 133°－Ｅを指す。全長は 98 ㎝を測る。柱穴：認められない。貯蔵穴：認められない。壁周溝：北壁および西壁下で検出された。幅 12 ～ 31㎝、深さ５～９㎝を測る。掘り方：



第 10 図　２号竪穴建物跡出土遺物



ＳＩ-２Ａ-Ａ′土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまりややあり。粘性やや弱い。炭化材を多量、As-C・ローム粒を少量含む。
2．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。炭化材を多量、ロームブロックφ0.5 ～ 1 ㎝を中量、As-C を少量含む。
3．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性やや弱い。As-C・ローム粒を少量含む。壁周溝。
4．黒褐色土 10YR3/2：しまり硬い。粘性ややあり。As-C・ロームブロックφ1 ～ 10 ㎝を多量、炭化物粒φ1 ～ 2 ㎜を少量含む。掘り方。

ＳＩ-２Ｃ-Ｃ′土層説明

1．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量、焼土粒φ1 ～ 2 ㎜・炭化物粒φ1 ～ 2 ㎜・As-C を少量含む。

第 11 図　２号竪穴建物跡

全面に貼床が認められる。貼床は黒褐色土を主体とし、厚さは２～７㎝である。掘り方の底面は凹凸がみられる。西壁下は土坑状に 30㎝ほど深く掘り込まれている。**遺物出土状況**：覆土中から土師器甕、須恵器坏・碗の破片、鉄製品が少量出土している。床面直上の遺物として、南壁際から出土した須恵器碗（１）がある。鉄製品（２～４）は北・西壁際から炭化材とともに出土している。**時期**：10 世紀後半。**備考**：焼失住居。

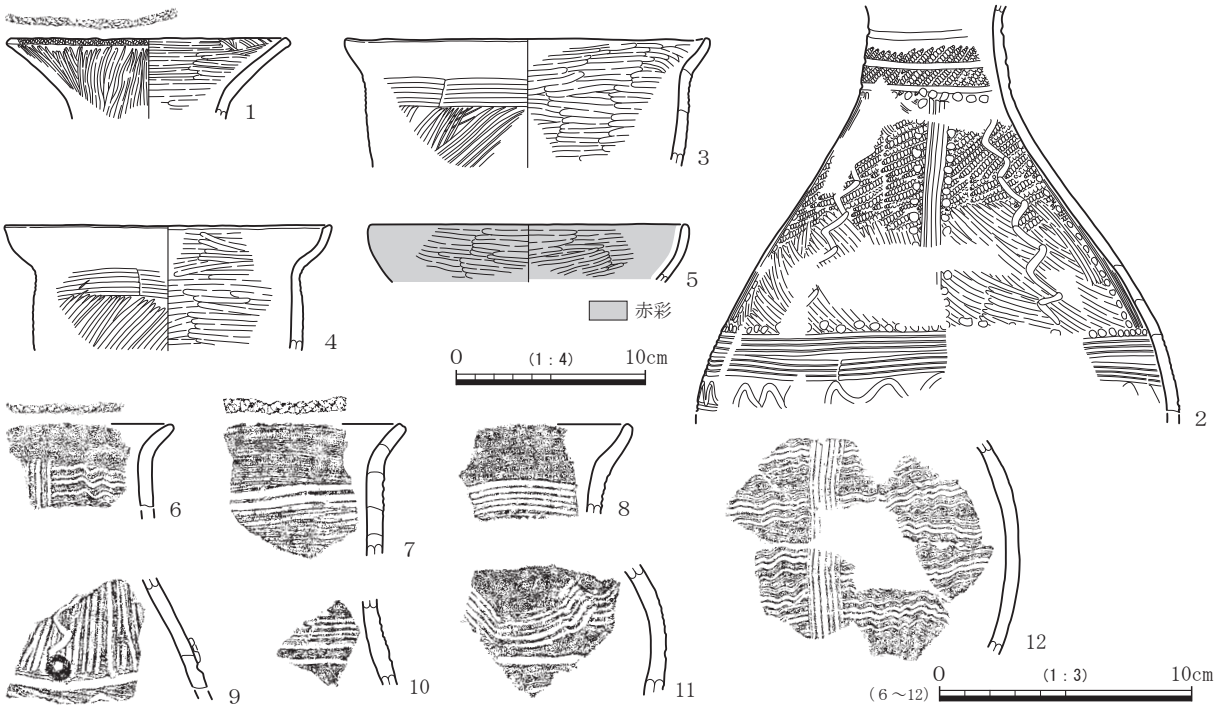
第２表　２号竪穴建物跡出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

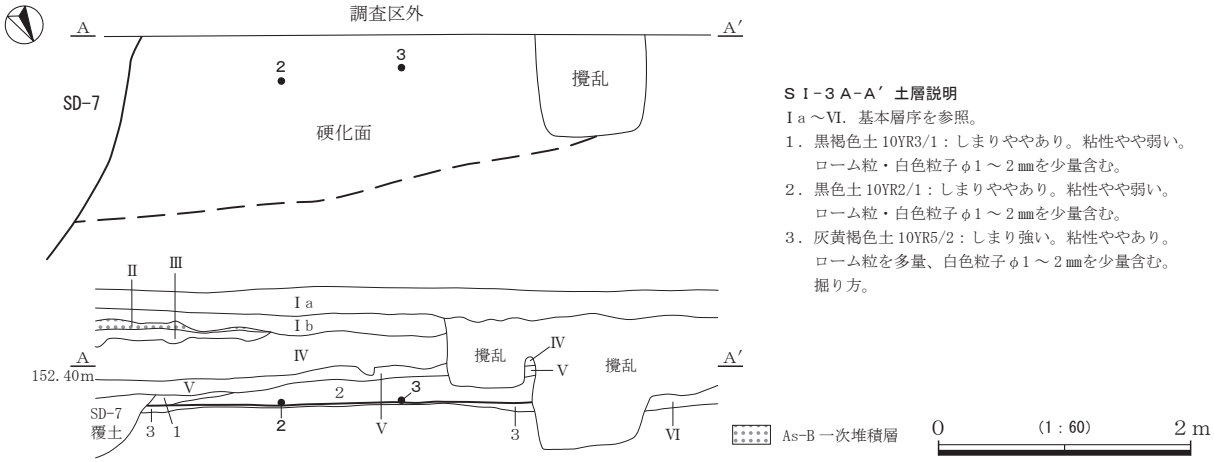
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	須恵器 碗	口径：－ 底径：(8.3) 器高：[2.7]	①酸化焔　②外：にぶい褐、内：灰黄褐　③石英、チャート、白色粒 ④高台部 3/4	外面：ロクロナデ。底面回転糸切り、高台貼付時に周縁回転ナデ。 内面：ロクロナデ。	南東部床面直上
番号	器種		①法量 (cm . g) ②材質 ③残存 ④成・整形技法の特徴		出土位置／備考
2	不明品	①長さ:7.1、最大幅:2.3、最大厚:1.1、重さ:62.47　②鉄製、木質　③ほぼ完形　④端部に木質(長さ 1.0、幅 0.9，厚さ 0.3）が残る。端部の欠損する鉄(長さ 2.2、幅 1.6、厚さ 0.6）が付着。断面円形の細い棒状の鉄(幅 0.5）が付着する。			北東部壁際下層
3	刀子	①長さ：[8.5]、最大幅：2.5、最大厚：0.4、重さ：15.41　②鉄製　③両端部欠損			北東部壁際中層
4	刀子	①長さ：[4.0]、最大幅：1.2、最大厚：0.3、重さ：3.02　②鉄製　③両端部欠損			北東部下層

３号竪穴建物跡（第 12・13 図、第３表／ＰＬ．３・10）

位置：X=40812 ～ 40810、Y=-82201 ～ -82197。**重複関係**：７号溝跡と重複し、本遺構が古い。西側は現代の攪乱に壊される。南側は調査区外となる。**平面形態**：床面の硬化範囲を検出したのみで、平面形態は不明である。**規模**：調査区内で検出された硬化面の範囲は長軸 4.20 m、短軸 1.44 m。**主軸方位**：不明。**埋没状況**:覆土は黒色土を主体とし、自然埋没と想定される。**床面の状態**:平坦で、顕著な硬化面が認められた。**炉・柱穴・貯蔵穴**：調査区内では認められない。**壁周溝**：認められない。**掘り方**：貼床が認められる。貼床は灰黄褐色土を主体とし、厚さは２～６㎝である。掘り方の底面はやや凹凸がみられる。**遺物出土状況**：覆土中から弥生土器の壺・甕・鉢の破片が少量出土している。床面直上の遺物として、２の壺と３の甕がある。**時期**：弥生時代中期後半。



第 12 図　３号竪穴建物跡出土遺物



第 13 図　３号竪穴建物跡

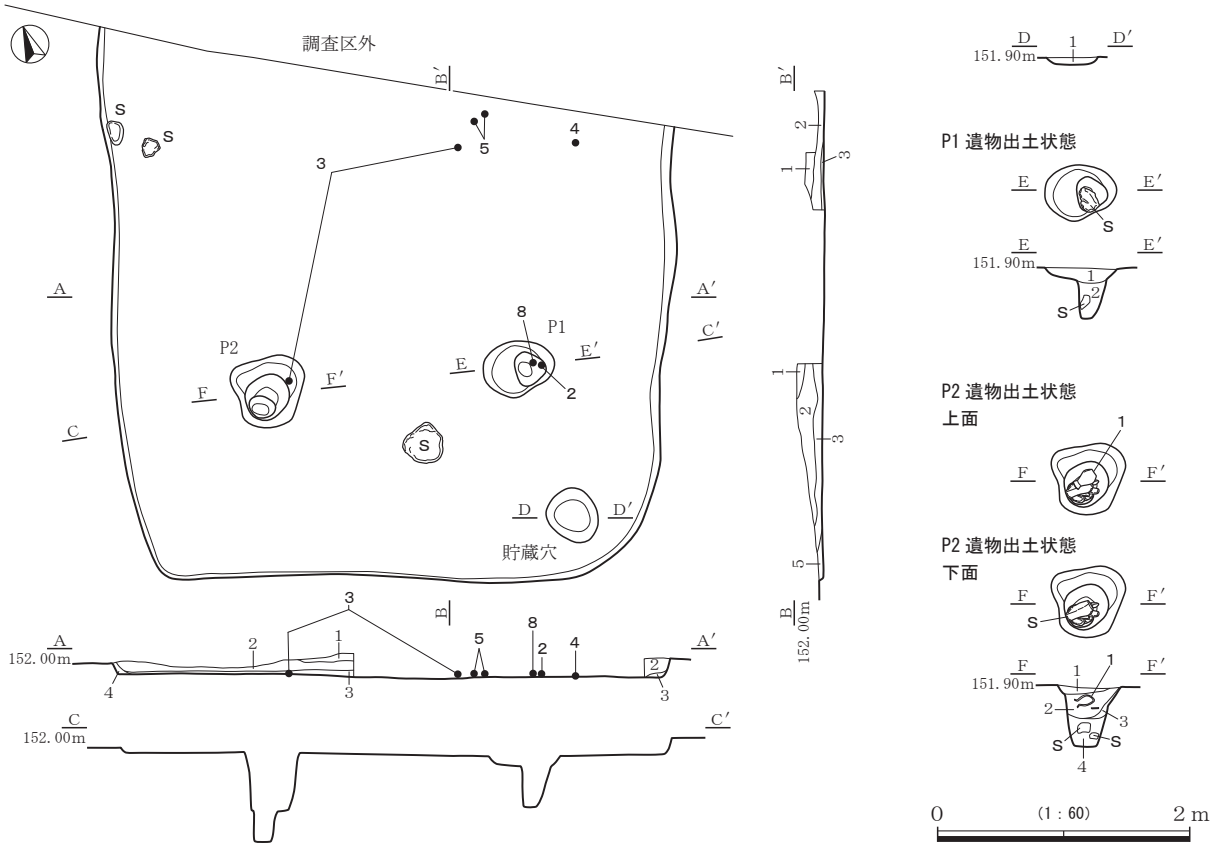
第３表　３号竪穴建物跡出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	弥生土器 壺	口径：(15.0) 底径：－ 器高：[4.2]	①良好　②外：にぶい褐、内：にぶい橙　③黒色粒、赤褐色粒 ④口縁部 1/6	外面：口唇部に単節ＲＬ縄文。口縁部横ナデ後、縦方向のミガキ。 内面：口縁部横ナデ後、横方向のミガキ。	東部覆土中
2	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：[21.4]	①良好　②外：にぶい橙、内：オリーブ黒　③チャート、白色粒 ④頸部～胴部上半 3/4	外面：頸部ナデ→単節ＬＲ縄文を横位施文→横位沈線文３条以上。胴部上位は斜方向のハケメ→単節ＬＲ縄文を横位施文→斜方向のミガキ→４条１単位の櫛描垂下文を５条→縦波状沈線文を５条。胴部中位はナデ→４条１単位の櫛描直線文→櫛描直線文の間に波状沈線文。頸部の沈線文・櫛描垂下文・櫛描直線文の脇を並行する竹管状工具による刺突文。 内面：頸部横方向のナデ。胴部上～中位は横・斜方向のハケメ。	東部床面直上＋東部覆土中／内面は所々に小円形状の剥離痕あり。
3	弥生土器 甕	口径：(19.3) 底径：－ 器高：[6.8]	①普通　②内外：にぶい褐　③白色粒、黒色粒　④口縁部～胴部上位 1/5	外面：口縁部横ナデ。頸部６条１単位の櫛描直線文。胴部上位３～４条１単位の櫛描斜状文。 内面：口縁部～胴部上位横方向のミガキ。	西部床面直上／外面・内面口縁上端部にスス付着。
4	弥生土器 甕	口径：(17.2) 底径：－ 器高：[6.6]	①良好　②外：橙、内：にぶい黄橙　③白色粒、黒色粒　④口縁部～胴部上位破片	外面：受け口状口縁。口縁部横ナデ。頸部６条１単位の櫛描直線文。胴部上位５～６条１単位の櫛描斜格子目文。 内面：口縁部～胴部上位横方向のミガキ。	東部覆土／外面スス、内面コゲ付着。
5	弥生土器 鉢	口径：(16.8) 底径：－ 器高：[3.0]	①良好　②内外：赤褐　③チャート、白色粒　④口縁部 1/8	外面：口縁部横方向のミガキ。赤彩。 内面：口縁部横方向のミガキ。赤彩。	覆土一括
6	弥生土器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②内外：にぶい黄橙　③石英、角閃石、チャート、褐色粒　④口縁部～頸部破片	外面：口唇部に単節ＬＲ状文。口縁部横ナデ。頸部１単位４条以上の櫛描垂下文→１単位６条以上の櫛描波状文。 内面：口縁部横ナデ。頸部横方向の粗いハケメ。	東部覆土中
7	弥生土器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②外：にぶい褐、内：灰褐　③石英、チャート、白色粒、黒色粒　④口縁部～頸部破片	外面：口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部横ナデ。頸部横方向のハケメ→４条１単位の櫛描直線文。 内面：口縁部～頸部横方向のハケメ→横・斜方向のミガキ。	東部覆土中
8	弥生土器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②内外：にぶい黄橙　③石英、チャート、白色粒、小礫　④口縁部～頸部破片	外面：口縁部横ナデ。頸部５条１単位の櫛描直線文。 内面：口縁部横方向のハケメ→横方向の粗いミガキ。頸部ハケメ→横方向の密で丁寧なミガキ。	東部覆土中
9	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②外：橙、内：にぶい橙　③石英、角閃石、チャート、白色粒　④胴部破片	外面：横位沈線文の上は６条１単位の櫛描垂下文→縦波状沈線文→円形貼付文→貼付文の中央を竹管状工具により刺突。下は斜方向のハケメ→波状沈線文。 内面：斜方向のハケメ。	西部上層
10	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②外：にぶい黄橙、内：灰黄褐　③石英、チャート、白色粒、黒色粒　④頸部破片	外面：ハケメ→横位沈線文の上は６条１単位の櫛描直線文→細い竹管状工具による円形刺突文。下はミガキ。 内面：横・斜方向のハケメ。	覆土上層
11	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②外：にぶい黄橙、内：黒褐　③石英、角閃石、チャート ④胴部破片	外面：横位沈線文の上に５条１単位の櫛描連弧文。 内面：横・斜方向の粗いハケメ。	覆土上層
12	弥生土器 壺・甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②内外：にぶい黄橙　③石英、チャート、白色粒 ④胴部破片	外面：横・斜方向のハケメ→５条１単位の櫛描波状文→５条１単位の櫛描垂下文。 内面：斜方向のハケメ→縦・斜方向のミガキ。	東部覆土中／外面スス・内面コゲ付着。

４号竪穴建物跡（第 14・15 図、第４・５表／ＰＬ．３・11）

位置：X=40819 ～ 40814、Y=-82188 ～ -82184。重複関係：１号配石遺構、７号土坑、６・９号ピットと重複し、本遺構が古い。平面形態：南北方向に長い隅丸長方形を呈すと推定される。北側は調査区外となる。規模：調査区内での長軸 4.27 m、短軸 4.54 m、確認面からの深さ 16㎝。主軸方位：N － 21°－ E。埋没状況：覆土は炭化物粒を含む黒褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。床面の状態：平坦である。床面は全体的に締まっているが、顕著な硬化面は確認されない。炉：調査区内では認められない。柱穴：調査区内で２本検出された。Ｐ１・２は主柱穴で、４本主柱構造と想定される。Ｐ１は楕円形を呈し、規模 57㎝× 44㎝、深さ 40㎝を測る。下層から安山岩が１点出土している。Ｐ２は不整な隅丸方形を呈し、規模 59㎝× 56㎝、深さ 70㎝を測る。下層から安山岩が６点まとまって出土している。貯蔵穴：竪穴の南東コーナー部に位置する。平面形は楕円形で、断面形態は浅い逆台形を呈する。規模 44㎝× 37㎝、深さ５㎝を測る。壁周溝：



ＳＩ－４Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′土層説明

１．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒を中量含む。
２．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒を中量、炭化物粒φ１～５㎜・ロームブロックφ３～５㎝を少量含む。
３．暗褐色土 10YR3/3：しまり・粘性ややあり。ローム粒を中量、炭化物粒φ１～５㎜を少量含む。
４．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・炭化物粒φ１～５㎜を少量含む。
５．にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまり・粘性ややあり。黒褐色土を多量含む。

ＳＩ－４Ｄ－Ｄ′土層説明

１．黒褐色土 10YR3/2：しまりやや弱い。粘性ややあり。ロームブロックφ３～５㎝・褐色土ブロックφ３～５㎝を中量含む。

ＳＩ－４Ｅ－Ｅ′土層説明

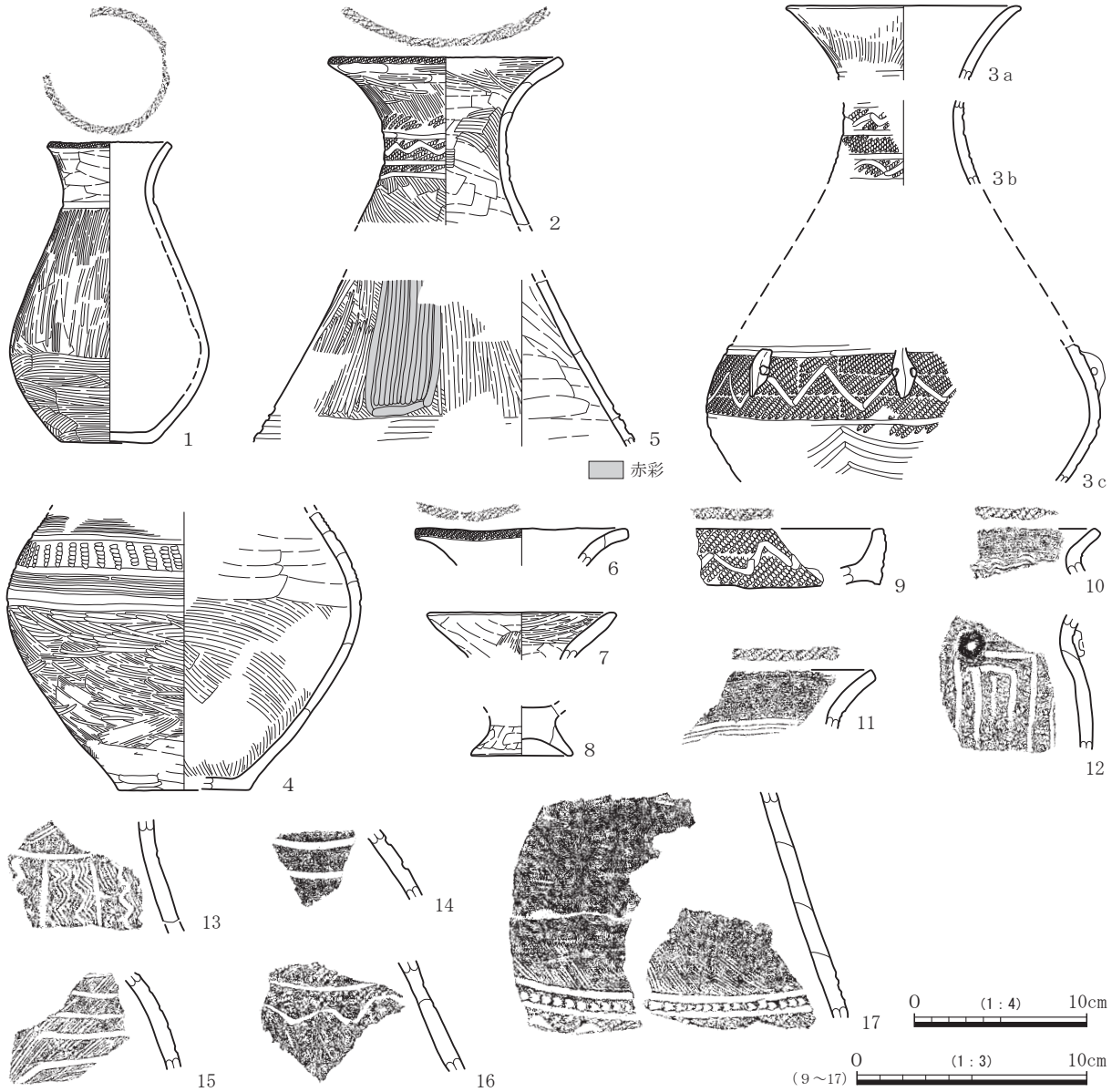
１．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ロームブロックφ１～３㎝を中量、ローム粒・白色粒子を少量含む。
２．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒を多量含む。

ＳＩ－４Ｆ－Ｆ′土層説明

１．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・炭化物粒φ１～５㎜・白色粒子を少量含む。
２．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子を少量含む。
３．黒色土 10YR2/1：しまり・粘性ややあり。ロームブロックφ１～２㎝を少量、ローム粒・白色粒子を微量含む。
４．黒色土 10YR1.7/1：しまり・粘性ややあり。

第 14 図　４号竪穴建物跡

認められない。**掘り方**：明確な貼床は認められない。**遺物出土状況**：覆土中から弥生土器の壺・甕・台付甕・高坏が少量出土している。床面直上の遺物として、２～５の壺、８の台付甕がある。１の小形壺はＰ２の上層から横位で出土している。**時期**：弥生時代中期後半。



第 15 図　４号竪穴建物跡出土遺物

第４表　４号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	弥生土器 小形壺	口径: 7.2 底径: 5.2 器高: 17.4	①良好　②外: 橙、内: にぶい黄橙　③石英、チャート、白色粒、黒色粒　④口縁部一部欠損	外面: 口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部斜方向のハケメ→横方向のナデ。頸部横位沈線文。胴部上～中位縦・斜方向のハケメ→縦方向のミガキ。胴部下位横方向のハケメ。底部ケズリ→ナデ。 内面: 口縁部横ナデ。胴部ハケメ。底部ナデ。	Ｐ２上層
2	弥生土器 壺	口径: (13.6) 底径: ― 器高: [9.7]	①普通　②内外: 橙　③石英、チャート、金雲母、黒色粒、褐色粒　④口縁部 1/3、頸部 4/5	外面: 口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部斜方向のハケメ→上位は横方向のナデ後ミガキ、下位は単節ＬＲ縄文を横位施文。頸部２条の横位沈線文による区画内に単節ＬＲ縄文を横位施文→波状沈線文と横位沈線文。区画の下は斜方向のハケメ。 内面: 口縁部横方向のナデ→横方向のミガキ。頸部横・斜方向のハケメ・ナデ。	南東部床面直上＋南東部覆土中

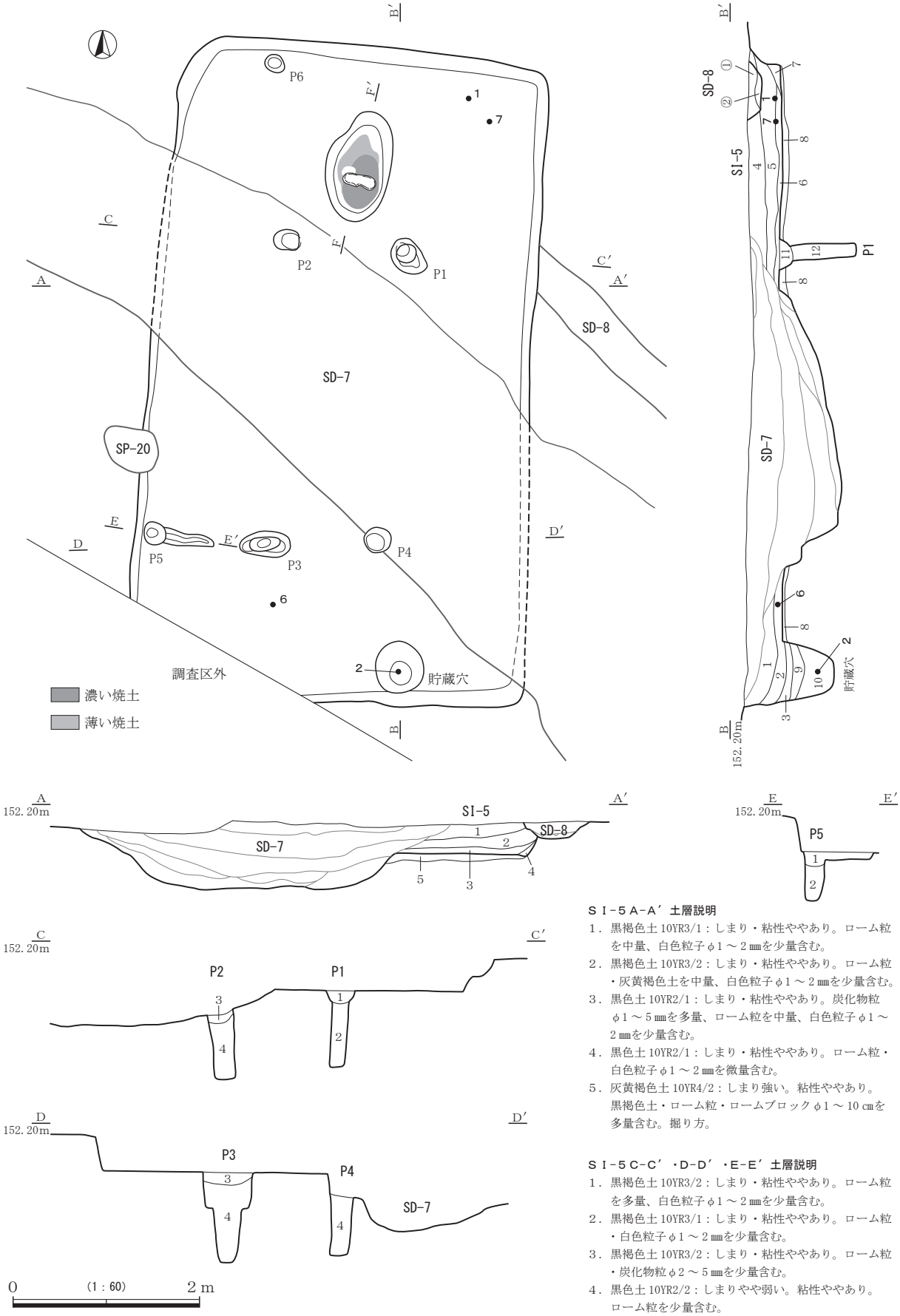
第５表　４号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
3	弥生土器 壺	口径: (13.6) 底径: － 器高: －	①良好　②外:にぶい橙、内:オリーブ黒　③海面滑針、金雲母、チャート、白色粒、黒色粒　④口縁部4/5、頸部破片、胴部中位 1/3	外面: 口縁部横ナデ→縦方向のハケメ。頸部は横位沈線文４条で３段の帯状区画→区画内に単節ＬＲ縄文を充填→上段と下段に波状沈線文。胴部中位は横位沈線文による帯状区画内に単節ＬＲ縄文を横位施文→山形沈線文→縦長粘土を貼付、小孔が貫通。区画の下はハケメ→ナデ→連弧沈線文。 内面: 器表面剥離により調整不明。	南東部床面直上＋北東部床面直上＋上層／図上復元。
4	弥生土器 壺	口径: － 底径: 7.6 器高: [16.1]	①良好　②外: にぶい褐、内: 黒褐　③石英、チャート、白色粒、黒色粒　④胴部 1/4、底部 1/2	外面: 胴部中位は５条１単位以上の櫛描直線文→２条の横位沈線文による帯状区画内に６条１単位の櫛歯条工具による列点文→４条１単位の櫛描直線文→横位沈線文。胴部下位は斜方向のハケメ→横・斜方向のミガキ→下端部横方向のケズリ。底部ナデ。 内面: 胴部中位は横方向のナデ。胴部下位は斜方向のハケメ。底部ナデ。	北東部床面直上＋北東部覆土中／図上復元。内面は小円形状の剥離痕あり。
5	弥生土器 壺	口径: － 底径: － 器高: [9.6]	①良好　②外: にぶい黄橙、内: 灰　③白色粒、黒色粒　④胴部破片	外面: 斜方向のハケメ→縦方向のミガキ。太描沈線文で区画した内部に、５～６条１単位の櫛描垂下文を左から右の順で施文。区画の一部には赤彩を施す。下に横位沈線文３条以上。 内面: 斜方向のナデ→横方向のナデ。	北東部床面直上＋北東部上層＋覆土一括
6	弥生土器 壺	口径: (12.4) 底径: － 器高: [2.2]	①普通　②外: 灰黄褐、内: 橙　③白色粒　④口縁部 1/3	外面: 口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部摩耗のため調整不明。 内面: 口縁部摩耗のため調整不明。	北西部覆土中
7	弥生土器 壺	口径: (11.0) 底径: － 器高: [2.7}	①普通　②外: にぶい黄褐、内: にぶい橙　③石英、白色粒、黒色粒、赤褐色粒　④口縁部 1/4	外面: 口縁部横・斜方向のハケメ・ナデ。 内面: 口縁部横・斜方向のハケメ・ナデ→横方向のミガキ。	覆土一括
8	弥生土器 台付甕	口径: － 底径: 5.9 器高: [3.0]	①普通　②外: 明赤褐、内: 明褐　③チャート、白色粒、黒色粒　④台部 3/4	外面: 台部横ナデ→縦・横方向のナデ。 内面: 台部ナデ。	南東部床面直上＋覆土一括
9	弥生土器 壺	口径: － 底径: － 器高: －	①普通　②内外: にぶい黄橙　③石英、白色粒、黒色粒　④口縁部破片	外面: 受け口状口縁。口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部単節ＬＲ縄文を横位施文→波状沈線文。頸部横方向のナデ。 内面: 口縁部横方向のハケメ・ナデ。	南東部覆土中
10	弥生土器 甕	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②内外: 灰褐　③チャート、白色粒、黒色粒、小礫　④口縁部破片	外面: 口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部横ナデ。頸部櫛描波状文。 内面: 横ナデ→横方向のミガキ。	北西部覆土中
11	弥生土器 甕	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②外: 黒褐、内: にぶい赤褐　③チャート、白色粒　④口縁部破片	外面: 口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部横ナデ。頸部１単位４条以上の櫛描直線文。 内面: 口縁部横ナデ→横方向のミガキ。	北西部覆土中
12	弥生土器 甕	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②内外: にぶい橙　③石英、角閃石、白色粒　④胴部破片	外面: 頸部横位沈線文。胴部は単節＠＠縄文を＠位施文→沈線によるコの字重ね文→円形貼付文→貼付文に竹管状工具による刺突。 内面: 胴部斜方向のハケメ→横方向のミガキ。	上層
13	弥生土器 壺	口径: － 底径: － 器高: －	①普通　②外: 浅黄橙、内: にぶい黄橙　③石英、チャート、黒色粒　④胴部破片	外面: 斜方向のハケメ→横位沈線文の上に１単位３条以上の櫛描波状文、下は縦位沈線文による縦方向の区画内に、縦波状沈線文と４条１単位の櫛描縦波状文を交互に施文。 内面: 斜方向のハケメ・ナデ。	上層
14	弥生土器 壺	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②内外: 褐灰　③白色粒　④胴部破片	外面: ナデ→ミガキ→弧状沈線文２条。 内面: ナデ→ミガキ。	覆土一括
15	弥生土器 壺	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②外: にぶい橙、内: にぶい黄橙　③チャート、黒色粒、褐色粒　④胴部破片	外面: 斜方向のハケメ→横位沈線文４条と沈線による連弧文か。 内面: 器面剥離により調整不明。	覆土一括
16	弥生土器 壺	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②外: にぶい橙、内: 褐灰　③石英、角閃石、白色粒　④胴部破片	外面: ハケメ→上位は単節ＬＲ縄文を横位施文後に、横位沈線文と波状沈線文。下位はミガキ。 内面: 横方向のナデ。	覆土一括
17	弥生土器 壺	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②外: にぶい橙、内: にぶい黄橙　③チャート、黒色粒、褐色粒　④胴部破片	外面: 斜方向のハケメ→ミガキ。２条の横位沈線文の間を竹管状工具による連続刺突文。下は単節ＬＲ縄文を横位施文→波状沈線文か。 内面: 横方向のハケメ・ナデ。	覆土一括

５号竪穴建物跡（第 16 ～ 19 図、第６表／ＰＬ．３・４・11）

位置：X=40811 ～ 40804、Y=-82189 ～ -82185。重複関係：１号竪穴建物跡、７・８号溝跡、２・３・20 号ピットと重複し、本遺構が古い。南西コーナー部は調査区外となる。平面形態：南北方向に長い隅丸長方形を呈する。規模：長軸 7.02 m、短軸 4.10 m、確認面からの深さ 38㎝。主軸方位：Ｎ－４°－Ｅ。埋没状況：覆土は黒褐色土を主体とし、下層には炭化物粒が多量に含まれる。自然埋没と想定される。床面の



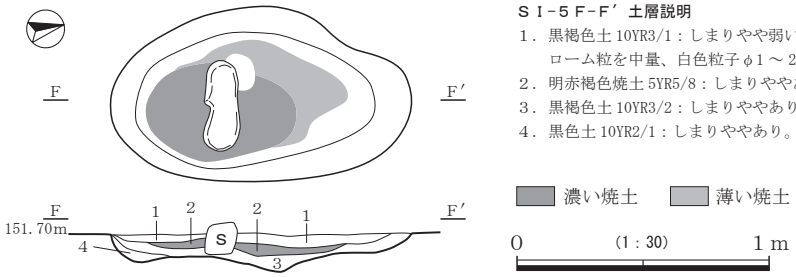
ＳＩ－５Ａ－Ａ′ 土層説明

1．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒を中量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒・灰黄褐色土を中量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
3．黒色土 10YR2/1：しまり・粘性ややあり。炭化物粒φ1～5㎜を多量、ローム粒を中量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
4．黒色土 10YR2/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子φ1～2㎜を微量含む。
5．灰黄褐色土 10YR4/2：しまり強い。粘性ややあり。黒褐色土・ローム粒・ロームブロックφ1～10㎝を多量含む。掘り方。

ＳＩ－５Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′ 土層説明

1．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒を多量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
3．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒・炭化物粒φ2～5㎜を少量含む。
4．黒色土 10YR2/2：しまりやや弱い。粘性ややあり。ローム粒を少量含む。

第 16 図　５号竪穴建物跡（１）



ＳＩ－５Ｆ－Ｆ′土層説明

1．黒褐色土 10YR3/1：しまりやや弱い。粘性ややあり。炭化物粒φ2～5㎜をを多量、焼土粒・ローム粒を中量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
2．明赤褐色焼土 5YR5/8：しまりややあり。粘性やや弱い。黒褐色土を少量含む。
3．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を中量、焼土粒を少量含む。
4．黒色土 10YR2/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を少量含む。

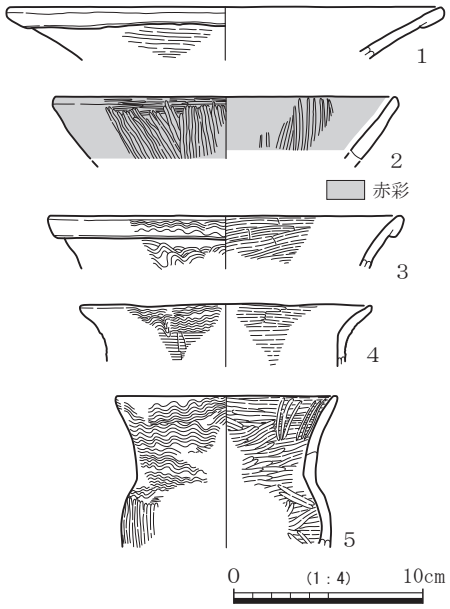
ＳＩ－５Ｂ－Ｂ′土層説明

1．黒褐色土 110YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
2．黒色土 10YR2/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子φ1～2㎜・炭化物粒φ1～5㎜を少量含む。
3．黒色土 10YR1.7/1：しまりやや弱い。粘性ややあり。ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒を中量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
5．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒・灰黄褐色土を中量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
6．黒色土 10YR2/1：しまり・粘性ややあり。炭化物粒φ1～5㎜を多量、ローム粒を中量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。
7．黒色土 10YR2/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子φ1～2㎜を微量含む。
8．灰黄褐色土 10YR4/2：しまり強い。粘性ややあり。ローム粒・ロームブロックφ1～10㎝を多量含む。掘り方。
9．黒色土 10YR2/1：しまりやや弱い。粘性ややあり。ローム粒を少量含む。貯蔵穴。
10．黒色土 10YR1.7/1：しまりやや弱い。粘性ややあり。ローム粒を微量含む。貯蔵穴。
11．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ローム粒を多量、白色粒子φ1～2㎜を少量含む。Ｐ1。
12．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子φ1～2㎜を少量含む。Ｐ1。

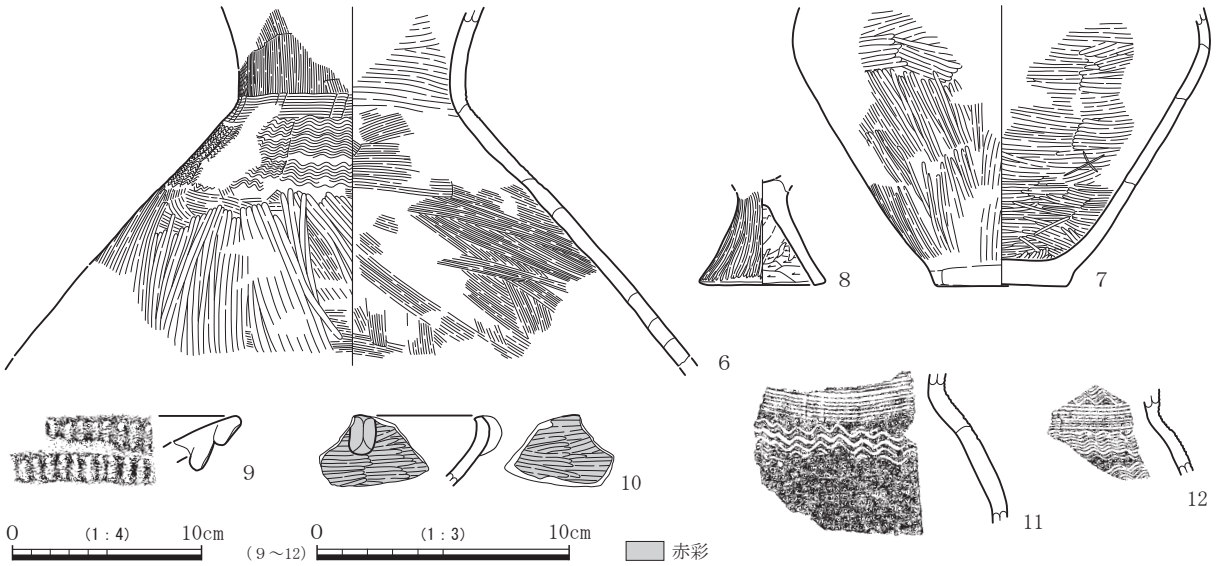
①．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量、As-C を少量含む。SD-8。
②．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性ややあり。ロームブロックφ5～8㎝を多量、As-C・灰白色砂質土を少量含む。SD-8。

第 17 図　５号竪穴建物跡（２）

状態：平坦である。床面は全面的に非常に良く硬化している。**炉**：竪穴の北壁寄りに位置する。南北方向に長い楕円形を呈し、長径 120㎝、短径 70㎝、深さ 14㎝を測る。炉の中央は非常に良く焼けて焼土化しており、使用面はこの上面と考えられる。床面から使用面までの深さは約５㎝である。炉の長軸ラインの中央やや南側には枕石が設置されている。枕石は長さ 36.9㎝、幅 15.6㎝、厚さ 12.1㎝の安山岩である。石の長軸を炉の長軸と直交させ、上面がほぼ水平になるように設置されている。石は使用面より６㎝ほど上に出ており、その部分は被熱により赤く変色している。被熱の度合いは、上面と側面北側が強く赤色化している。側面南側も赤色化しているが、北側に比べると色調変化が弱い。短辺である東西の側面はあまり変色していない。**柱穴**：６本検出された。このうちＰ１～４が主柱穴で、４本主柱構造である。Ｐ１は楕円形で規模 44㎝× 32㎝、深さ 82㎝。Ｐ２は楕円形で規模 28㎝× 22㎝、深さ 94㎝。Ｐ３は楕円形で規模 55㎝× 28㎝、深さ 97㎝。Ｐ４は円形で規模 29㎝× 28㎝、深さ 89㎝。Ｐ５は西壁下、Ｐ３・４と同ライン上に位置する。円形で規模 24㎝× 24㎝、深さ５㎝である。ピットと連結して深さ４～５㎝の溝が検出され、間仕切りと考えられる。Ｐ６は円形で規模 23㎝× 19㎝、深さ 11㎝である。**貯蔵穴**：南壁際の中央より東寄りに位置する。平面形は円形で、断面形態は深い筒形を呈する。規模 56㎝× 52㎝、深さ 57㎝を測る。**壁周溝**：認められない。**掘り方**：貼床が認められる。貼床はローム粒・ロームブロックを多量に含む灰黄褐色土を主体とし、厚さは３～９㎝である。掘り方の底面はやや凹凸がみられる。**遺物出土状況**：覆土中から弥生土器の壺・甕・高坏・鉢・台付鉢の破片が多量に出土している。床面付近での出土量は少なく、１・６・７の壺の破片がみられる程度である。また、貯蔵穴の下層からは２の赤彩鉢などの破片が数点出土している。**時期**：弥生時代後期後半。



第 18 図　５号竪穴建物跡出土遺物（１）



第 19 図　５号竪穴建物跡出土遺物（２）

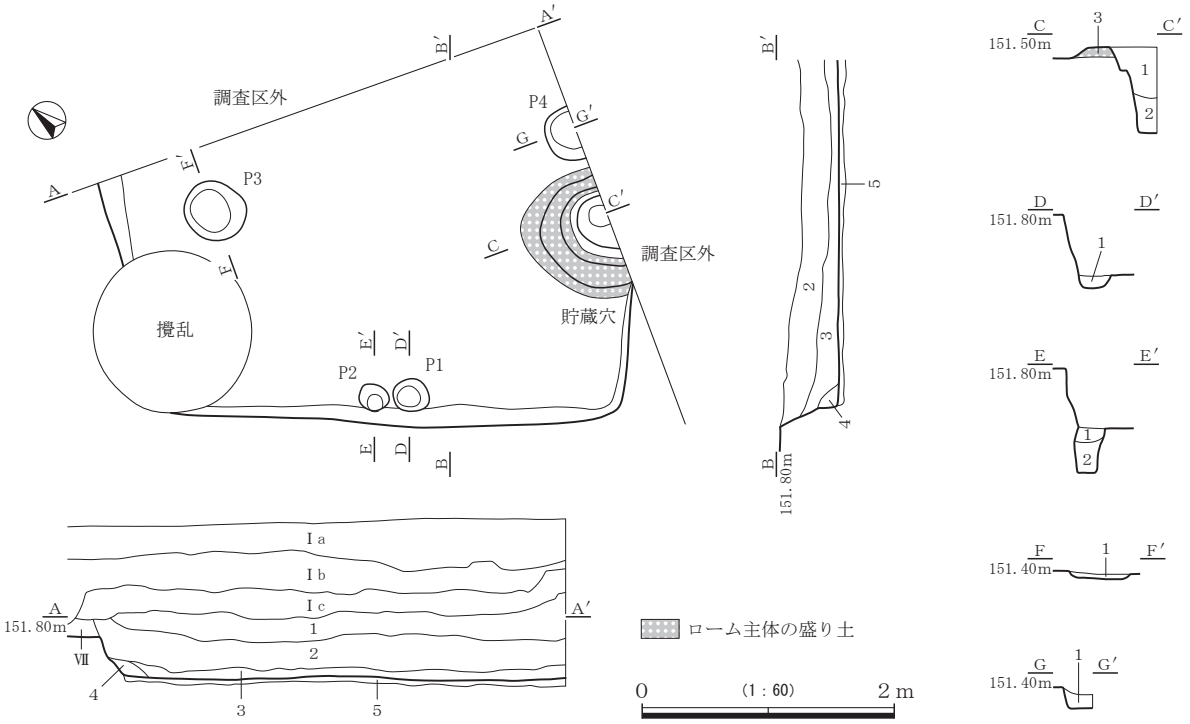
第６表　５号竪穴建物跡出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	弥生土器 壺	口径: (23.1) 底径: ― 器高: [2.8]	①普通　②内外: 橙　③海面滑針、チャート、白色粒、黒色粒 ④口縁部 1/8	外面: 折り返し口縁。折り返し部横ナデ。口縁部横方向のミガキ。 内面: 摩耗のため調整文不明。	北東部下層
2	弥生土器 鉢	口径: (18.2) 底径: ― 器高: [3.3]	①良好　②内外: 明赤褐　③チャート、白色粒、黒色粒、褐色粒 ④口縁部 1/8	外面: 口縁部横方向のミガキ→縦方向のミガキ。赤彩。 内面: 口縁部横方向のハケメ→横方向のミガキ。赤彩。	貯蔵穴下層／内面のミガキは大部分が剥落。
3	弥生土器 甕	口径: (18.9) 底径: ― 器高: [2.8]	①良好　②外: 褐、内: にぶい黄橙 ③チャート、白色粒、黒色粒 ④口縁部 1/10	外面: 折り返し口縁。口縁部「横ナデ→３条１単位の櫛描波状文。 内面: 口縁部横方向のハケメ。	南東部覆土中／外面スス付着。
4	弥生土器 甕	口径: (15.5) 底径: ― 器高: [3.3]	①良好　②外: にぶい黄褐、内: にぶい黄橙　③チャート、白色粒 ④口縁部 1/8	外面: 口縁部６条１単位の櫛描波状文。頸部同単位の２連止め櫛描簾状文。 内面: 口縁部～頸部横方向のミガキ。	南西部覆土中／外面スス付着。
5	弥生土器 小形甕	口径: (11.7) 底径: ― 器高: [8.1]	①良好　②内外: にぶい黄橙　③石英、チャート、白色粒　④口縁部～胴部上位 1/5	外面: 口縁部～頸部７条１単位の櫛描波状文を下から上へ４段施文。胴部上位ハケメ→縦方向のミガキ。 内面: 口縁部横・縦方向のミガキ。頸部～胴部上位横・斜方向のミガキ。	北東部覆土中／外面スス、内面コゲ付着。
6	弥生土器 壺	口径: ― 底径: ― 器高: [18.9]	①普通　②外: 橙、内: 灰黄褐 ③角閃石、チャート、褐色粒 ④頸部～胴部上半 1/3	外面: 頸部縦方向のハケメ→８条１単位の２連止め櫛描簾状文。胴部７～８条１単位の櫛描波状文を４段、横・斜方向のハケメ→縦方向のミガキ。 内面: 頸部横方向のミガキ。胴部横・斜方向のハケメ。	南西部下層／内面胴部は小円形状の剥離痕多い。
7	弥生土器 壺	口径: ― 底径: (7.0) 器高: [14.7]	①良好　②外: にぶい赤褐、内: 橙 ③チャート、白色粒、黒色粒 ④胴部 1/3、底部 4/5	外面: 胴部中位横方向のミガキ。胴部下位縦方向のミガキ。胴部下端横方向のナデ。底部ナデ。 内面:胴部中～下位横・斜方向のミガキ、「×」の線刻か。底部一方向のミガキ。	北東部下層／外面にスス、内面にコゲ付着。
8	弥生土器 台付鉢	口径: ― 底径: (6.6) 器高: [5.6]	①良好　②外: にぶい褐、内: にぶい黄褐　③石英、角閃石、白色粒 ④台部 1/4	外面: 台部ハケメ→縦方向のミガキ。 内面: 台部斜方向のナデ→下半横方向のケズリ。	南西部覆土中
9	弥生土器 壺	口径: ― 底径: ― 器高: ―	①普通　②内外: 橙　③石英、角閃石、チャート、白色粒　④口縁部破片	外面: 折り返し口縁 2段。7条 1単位の櫛歯状工具による連続刺突文。 内面: 横方向のミガキ。	貯蔵穴下層
10	弥生土器 鉢	口径: ― 底径: ― 器高: ―	①良好　②内外: 明赤褐　③チャート、黒色粒　④口縁部破片	外面: 横方向のミガキ。棒状貼付文。赤彩。 内面: 横方向のミガキ。赤彩。	北東部覆土中
11	弥生土器 壺・甕	口径: ― 底径: ― 器高: ―	①良好　②内外: 橙　③角閃石、チャート、白色粒、褐色粒 ④胴部破片	外面: 頸部 5条 1単位の 2連止め櫛描簾状文を 2段以上。胴部ハケメ→ 4～ 5条 1単位の櫛描波状文→横方向のミガキ。 内面: ハケメ→横方向のミガキ→部分的に縦方向のミガキ。	南西部覆土中
12	弥生土器 壺・甕	口径: ― 底径: ― 器高: ―	①良好　②外: 橙、内: 灰黄褐 ③チャート、白色粒、黒色粒 ④胴部破片	外面: 頸部 8条 1単位の 2連止め櫛描簾状文→口縁部櫛描波状文。胴部 8条 1単位の櫛描波状文を 2段以上。 内面: 横方向のミガキ。	貯蔵穴下層

６号竪穴建物跡（第20・21図、第７・８表／ＰＬ．４・11）

位置：X=40811 ～ 40807、Y=-82174 ～ -82171。重複関係：南西角を現代の攪乱に壊される。北東側は調査区外となる。平面形態：北東－南西方向に長い隅丸長方形を呈すと推測される。規模：調査区内では長軸3.16m、短軸4.02m、確認面からの深さ43㎝。主軸方位：Ｎ－50°－Ｅ。埋没状況：覆土は黒色土を主体とし、下層には炭化物粒が少量含まれる。自然埋没と想定される。床面の状態：平坦である。床面は全面的に非常に良く硬化している。炉：調査区内では認められない。柱穴：調査区内で４本検出された。Ｐ１は円形で規模27㎝×26㎝、深さ10㎝。Ｐ２はほぼ円形で規模24㎝×21㎝、深さ36㎝。Ｐ３はほぼ円形で規模50㎝×45㎝、深さ４㎝。Ｐ４は円形と推測され、規模44㎝×23㎝以上、深さ16㎝。Ｐ１・２は出入り口ピットの可能性がある。貯蔵穴：南東壁際の南寄りに位置する。平面形は円形を呈すと推測され、断面形態は深い筒形を呈する。規模45㎝×25㎝以上、深さ68㎝を測る。周囲にローム土を主体とした盛り土が土手状にめぐる。盛り土は上幅８～19㎝、下幅20～40㎝、高さ６～10㎝を測る。壁周溝：認めら



ＳＩ－６Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′土層説明

Ⅰa．基本層序Ⅰa層。
Ⅰb．基本層序Ⅰb層。
Ⅰc．褐灰色土10YR4/1：しまりやや弱い。しまり硬い。As-Aを多量、小石を所々に含む。現代の整地土層。
Ⅶ．基本層序Ⅶ層。
１．黒褐色土10YR3/1：しまり・粘性ややあり。As-C・ローム粒を少量含む。
２．黒色土10YR2/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒を中量、白色粒子φ１～２㎜を少量含む。
３．黒色土10YR1.7/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒・白色粒子φ１～２㎜を中量、炭化物粒φ１～５㎜を少量含む。
４．黒褐色土10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ロームブロックφ５～６㎝を多量含む。
５．黒褐色土10YR3/2：しまり強い。粘性ややあり。ローム粒・ロームブロックφ１～10㎝・白色粒子φ１～２㎜を多量含む。掘り方。

ＳＩ－６Ｃ－Ｃ′土層説明

１．黒褐色土10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒を少量含む。
２．黒色土10YR1.7/1：しまりやや弱い。粘性ややあり。ローム粒を少量含む。
３．明黄褐色土10YR6/6：しまり硬い。粘性ややあり。黒褐色土を少量含む。

ＳＩ－６Ｄ－Ｄ′土層説明

１．黒色土10YR1.7/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒を少量含む。

ＳＩ－６Ｅ－Ｅ′土層説明

１．黒褐色土10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を少量含む。
２．黒色土10YR2/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を少量含む。

ＳＩ－６Ｆ－Ｆ′土層説明

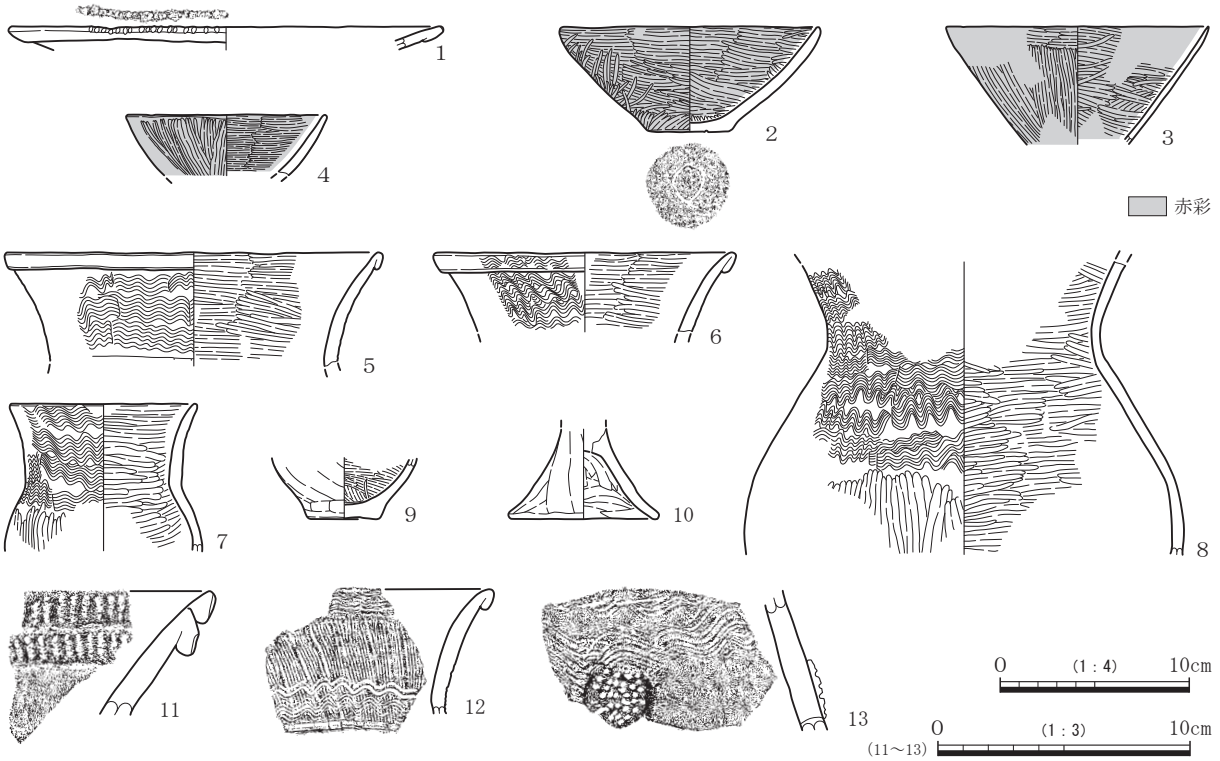
１．黒色土10YR1.7/1：しまり・粘性ややあり。ロームブロックφ３～４㎝を多量含む。

ＳＩ－６Ｇ－Ｇ′土層説明

１．黒褐色土10YR3/1：しまり・粘性ややあり。ローム粒を少量含む。

第20図　６号竪穴建物跡

れない。**掘り方**：貼床が認められる。貼床はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土で、厚さは３～７㎝である。掘り方の底面はやや凹凸がみられる。**遺物出土状況**：覆土中から弥生土器の壺・甕・鉢・台付鉢の破片が多量に出土している。床面直上の遺物はみられない。**時期**：弥生時代後期後半。



第 21 図　６号竪穴建物跡出土遺物

第７表　６号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	弥生土器 壺	口径：(23.0) 底径：－ 器高：[1.2]	①普通　②内外：橙　③チャート、白色粒、黒色粒、褐色粒　④口縁部 1/8	外面：折り返し口縁。口唇部にキザミ。口縁部横ナデ。 内面：器面摩耗により調整不明。	北西部上層
2	弥生土器 鉢	口径：(13.7) 底径：4.4 器高：5.6	①良好　②内外：赤褐　③チャート、白色粒、黒色粒　④口縁部～体部 1/3、底部完形	外面：口縁部横方向のミガキ。体部横・斜方向のミガキ。底部ナデ、「○」の線刻。口縁部～体部に赤彩。 内面：口縁部～体部横・斜方向のミガキ。底部ミガキ。口縁部～底部に赤彩。	北東部上層＋南東部覆土中
3	弥生土器 鉢	口径：(13.9) 底径：－ 器高：[6.2]	①良好　②内外：赤褐　③白色粒、黒色粒　④口縁部～体部 1/5	外面：口縁部横方向のミガキ。体部縦方向のミガキ。赤彩。 内面：口縁部～体部横・斜方向のミガキ。赤彩。	北西部上層
4	弥生土器 鉢	口径：(10.6) 底径：－ 器高：[3.2]	①良好　②内外：赤褐　③チャート、白色粒、黒色粒、赤色粒 ④口縁部～体部 1/6	外面：口縁部～体部縦方向のミガキ。赤彩。 内面：口縁部～体部横方向のミガキ。赤彩。	北東部覆土中
5	弥生土器 甕	口径：(20.0) 底径：－ 器高：[6.0]	①良好　②内外：にぶい褐 ③チャート、白色粒、黒色粒 ④口縁部 1/8	外面：折り返し口縁。口縁部横ナデ→５～７条 1単位の櫛描波状文を 3段。頸部 2連止め櫛描簾状文。 内面：口縁部横方向のミガキ。	北西部覆土中
6	弥生土器 甕	口径：(16.0) 底径：－ 器高：[4.2]	①良好　②外：にぶい橙、内：にぶい褐　③チャート、黒色粒 ④口縁部 1/8	外面：折り返し口縁。折り返し部横ナデ→５条 1単位の櫛描波状文。口縁部横ナデ→同単位の櫛描波状文を４段以上。 内面：口縁部横方向のミガキ。	南西部上層／外面にスス付着。
7	弥生土器 小形甕	口径：(9.9) 底径：－ 器高：[7.8]	①良好　②内外：にぶい橙 ③チャート、黒色粒　④口縁部～胴部上位 1/5	外面：口縁部横方向のハケメ→７～８条 1単位の櫛描波状文を 4段。胴部上位横方向のハケメ→縦方向のミガキ。 内面：口縁部～胴部上位横方向のミガキ。	下層／外面にスス付着。
8	弥生土器 甕・壺	口径：－ 底径：－ 器高：[15.5]	①良好　②外：明黄褐、内：にぶい橙　③角閃石、チャート、白色粒 ④頸部～胴部上半 1/3	外面：頸部～胴部上位横・斜方向のハケメ→６～８条 1単位の櫛描波状文を上から下へ 9段以上施文。胴部中位ハケメ→縦方向のミガキ。 内面：頸部～胴部上半横方向のミガキ。	北西部上層＋ＳＩ－６内攪乱／二次被熱痕あり。

第８表　６号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
9	弥生土器 壺・甕	口径：－ 底径：3.9 器高：[3.2]	①良好　②外：にぶい褐、内：灰黄褐　③石英、チャート、白色粒　④胴部下位 1/2、底部完形	外面：胴部下位斜→横方向のナデ。ミガキは剥落か。底部ナデ。 内面：胴部下位～底部横・斜方向のミガキ。	北西部覆土中
10	弥生土器 台付鉢	口径：－ 底径：(8.0) 器高：[4.7]	①良好　②内外：明赤褐　③石英、チャート、白色粒　④台部 1/2	外面：台部縦方向のナデ。 内面：台部横方向のナデ→上半は縦方向のナデ。	北東部覆土中
11	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②内外：橙　③角閃石、チャート、白色粒　④口縁部破片	外面：折り返し口縁 2段。折り返し部に 7条 1単位の櫛歯状工具による連続刺突文。 内面：ミガキ。	北東部覆土中／内外面ともに摩耗。
12	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②内外：明赤褐　③石英、角閃石、チャート、白色粒　④口縁部破片	外面：折り返し口縁。折り返し部ハケメ→ 4条 1単位の櫛描波状文。口縁部縦方向のハケメ→ 2条および 5条 1単位の櫛描波状文を 2段。頸部 2連止めの櫛描簾状文。 内面：口縁部ハケメ→横方向のミガキ。	北東部覆土中
13	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②内外：橙　③石英、チャート、小礫　④胴部破片	外面：ハケメ→ 7条 1単位の櫛描波状文を 2段以上。波状文の下はミガキ。円形浮文を貼付。円形浮文に刺突が施される。 内面：横方向のミガキ。	北東部覆土中／内外面ともに摩耗。

２　溝跡

１号溝跡（第 22 図／ＰＬ．４）

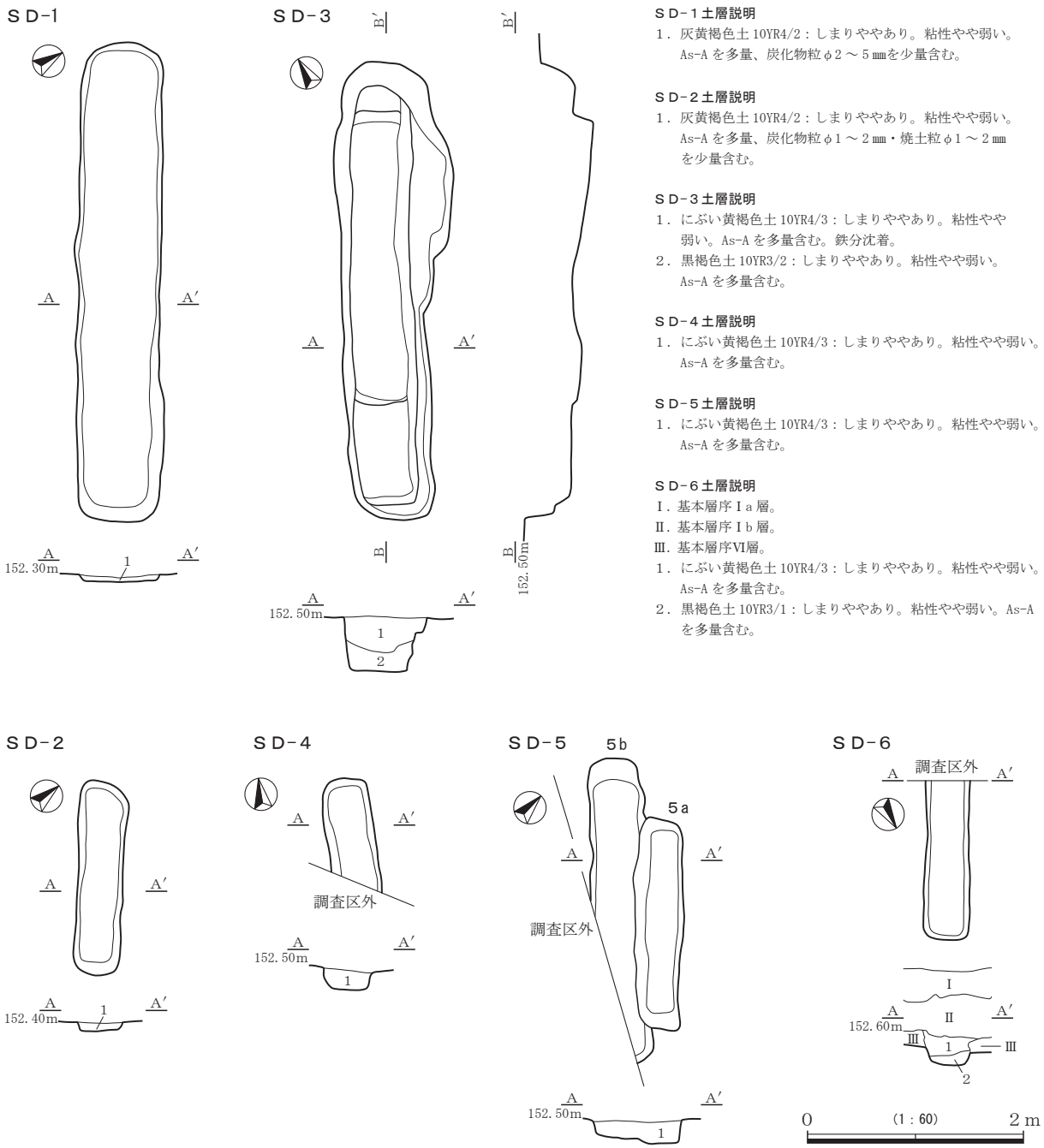
位置：X=40816 ～ 40813、Y=-82183 ～ -82179。重複関係：なし。走行方位：北西－南東方向へ直線的に走行する。Ｎ－ 57°－Ｗを指す。規模：長さ 4.43 m、上端幅 75 ～ 82㎝、下端幅 62 ～ 67㎝、確認面からの深さ７～９㎝。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を多量に含む灰黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から縄文土器、土師器坏、近世陶磁器碗の破片が数点出土している。縄文土器・土師器は紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-A の復旧溝と想定される。

２号溝跡（第 22 図／ＰＬ．５）

位置：X=40822 ～ 40820、Y=-82197 ～ -82195。重複関係：なし。走行方位：北西－南東方向へ直線的に走行する。Ｎ－ 48°－Ｗを指す。規模：長さ 1.81 m、上端幅 41 ～ 46㎝、下端幅 30 ～ 35㎝、確認面からの深さ７～９㎝。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を多量に含む灰黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から弥生土器の破片が数点出土しているが、紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-A の復旧溝と想定される。

３号溝跡（第 22 図／ＰＬ．５）

位置：X=40816 ～ 40813、Y=-82200 ～ -82198。重複関係：なし。走行方位：北東－南西方向へ直線的に走行する。Ｎ－ 30°－Ｅを指す。規模：長さ 4.26 m、上端幅 75 ～ 111㎝、下端幅 40 ～ 52㎝、確認面からの深さ 36 ～ 50㎝。底面の状態：緩やかな起伏をもつ。断面形態：段を有し、深い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を多量に含み、上層はにぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。上層には鉄分が沈着する。人為埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から弥生土器の破片が数点出土しているが、紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-A の復旧溝と想定される。



ＳＤ-１土層説明

１．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒φ２～５㎜を少量含む。

ＳＤ-２土層説明

１．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒φ１～２㎜・焼土粒φ１～２㎜を少量含む。

ＳＤ-３土層説明

１．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。鉄分沈着。
２．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。

ＳＤ-４土層説明

１．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。

ＳＤ-５土層説明

１．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。

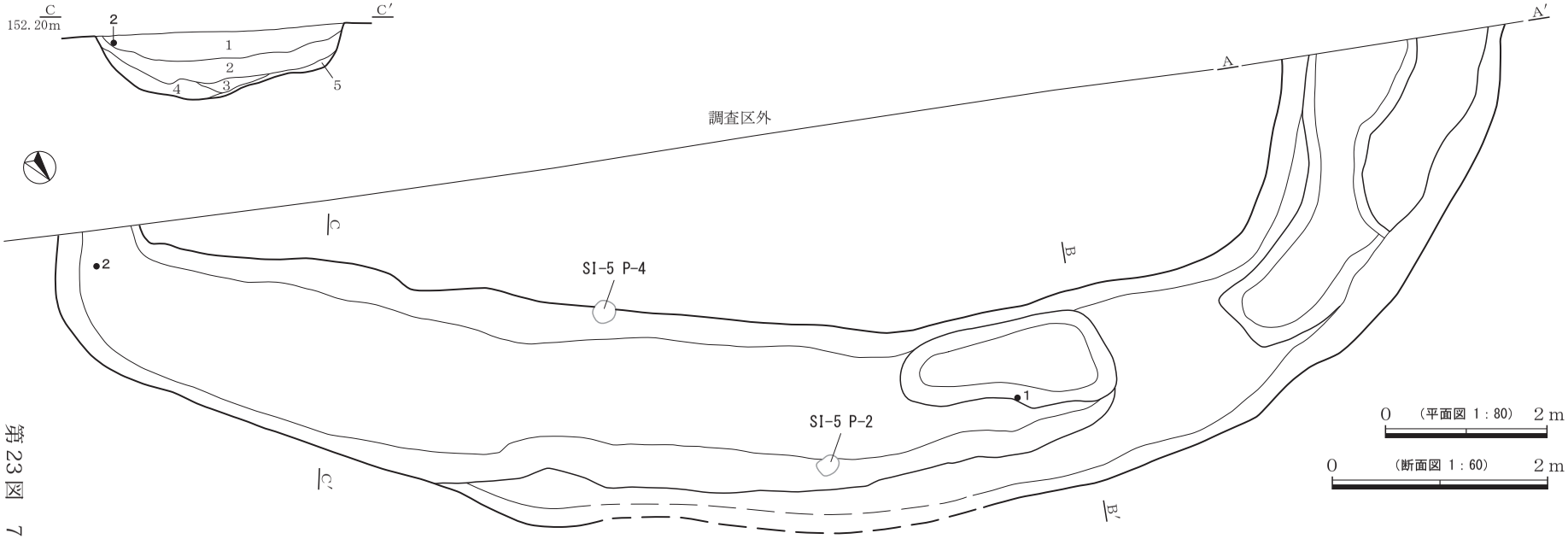
ＳＤ-６土層説明

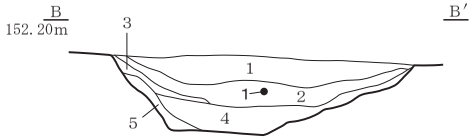
Ⅰ．基本層序Ⅰa 層。
Ⅱ．基本層序Ⅰb 層。
Ⅲ．基本層序Ⅵ層。
１．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。
２．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。

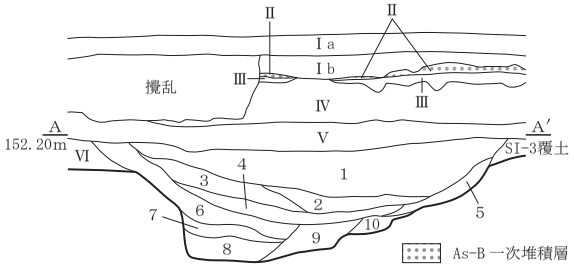
第 22 図　１～６号溝跡

４号溝跡（第 22 図／ＰＬ．５）

位置：X=40801 ～ 40800、Y=-82182。重複関係：８号溝跡と重複し、本遺構が新しい。南側は調査区外となる。走行方位：北南方向へ直線的に走行する。Ｎ－２°－Ｅを指す。規模：調査区内での長さ 0.99 m、上端幅 43 ～ 46㎝、下端幅 30 ～ 32㎝、確認面からの深さ 18 ～ 22㎝。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を多量に含むにぶい黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-A の復旧溝と想定される。







ＳＤ－７Ｂ－Ｂ′ 土層説明

1．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を大量、ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量、ローム粒を少量含む。
3．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量、As-C- を少量含む。
4．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒・ロームブロック φ1～10 cmを多量、As-C を少量含む。
5．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりあり。粘性やや弱い。ロームブロック φ1～5 cm・As-C を少量含む。

ＳＤ－７Ｃ－Ｃ′ 土層説明

1．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を大量、ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を大量、ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土 10YR3/3：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量、As-C を少量含む。
4．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ロームブロック φ1～6 cmを多量、As-C を少量含む。
5．暗褐色土 10YR3/3：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒・As-C を多量含む。

ＳＤ－７Ａ－Ａ′ 土層説明

Ⅰa～Ⅵ. 基本層序を参照。
1．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量、ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量、ローム粒を少量含む。
3．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量、ローム粒を少量含む。
4．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を中量、ローム粒を少量含む。
5．暗褐色土 10YR3/3：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を中量、As-C を少量含む。
6．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を中量、ローム粒を少量含む。
7．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量、As-C を少量含む。
8．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量、黒色土を少量含む。
9．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量含む。
10．にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまりややあり。粘性やや弱い。ロームブロック φ3～5 cmを多量含む。

第23図　7号溝跡

５号溝跡（第22図／ＰＬ．５）

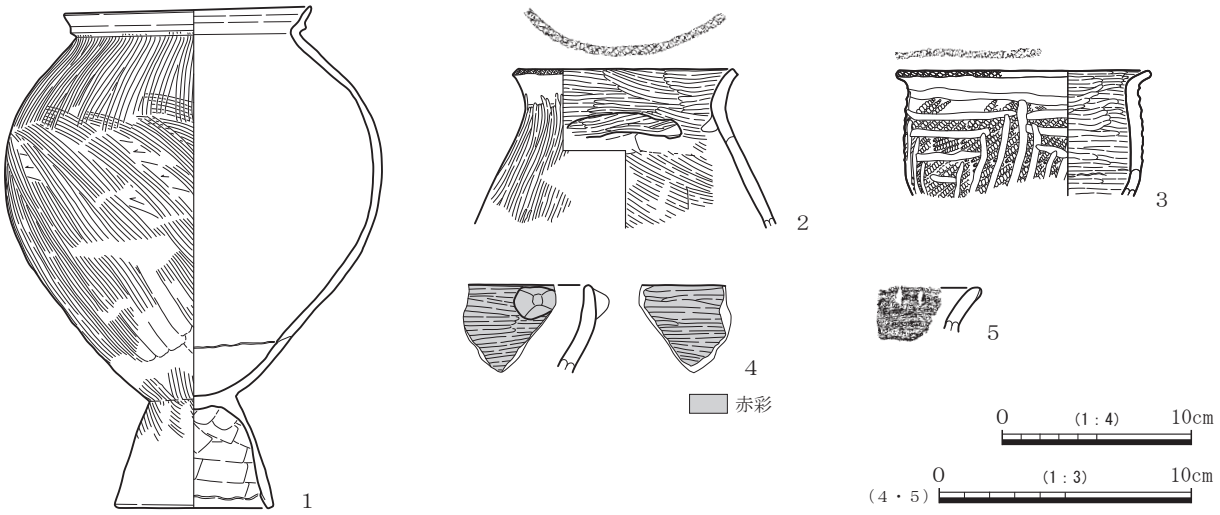
位置:X=40803～40801、Y=-82186～-82183。重複関係:７号溝跡と重複し、本遺構が新しい。北側を５a、南側を５bとする。５bの南側は調査区外となる。走行方位：北西－南東方向へ直線的に走行する。５aはＮ－42°－W、５bはＮ－43°－Wを指す。規模:５aは長さ1.98ｍ、上端幅40～46㎝、下端幅24～31㎝、確認面からの深さ21～25㎝。５bは長さ2.82ｍ、上端幅50～52㎝、下端幅40～42㎝、確認面からの深さ１5～１9㎝。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Aを多量に含むにぶい黄褐色土で、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-Aの復旧溝と想定される。

６号溝跡（第22図／ＰＬ．５）

位置:X=40816～40814、Y=-82206～-82205。重複関係:なし。南側は調査区外となる。走行方位:北東ー南西方向へ直線的に走行する。Ｎ－33°－Ｅを指す。規模：調査区内での長さ1.48ｍ、上端幅38～43㎝、下端幅30～33㎝、確認面からの深さ12～17㎝。底面の状態:概ね平坦である。断面形態:箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-Aを多量に含み、上層はにぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。人為埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から土師器甕、近世陶器碗の破片が数点出土している。土師器は紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。備考：As-Aの復旧溝と想定される。

７号溝跡（第23・24図、第９表／ＰＬ．５・６・12）

位置:X=40811～40801、Y=-82198～-82182。重複関係:１・３・５号竪穴建物跡、５号溝跡、６号土坑、２・15・16号ピットと重複する。新旧関係は、３・５号竪穴建物跡より新しく、１号竪穴建物跡、５号溝跡、６号土坑、２・15・16号ピットより古い。南側は調査区外となる。走行方位：北西ー南東方向へやや弧を描いて走行し、両端は南西方向へ屈曲する。北西－南東方向はＮ－50°－Wを指す。規模：北西－南東方向の長さ18.1ｍ、上端幅1.83～2.76ｍ、下端幅1.22～2.10ｍ、確認面からの深さ45～68㎝。底面の状態：段差を有し一定の深さではない。北西部（Ｂセクションの西側）は他に比べて掘り込みが浅い。断



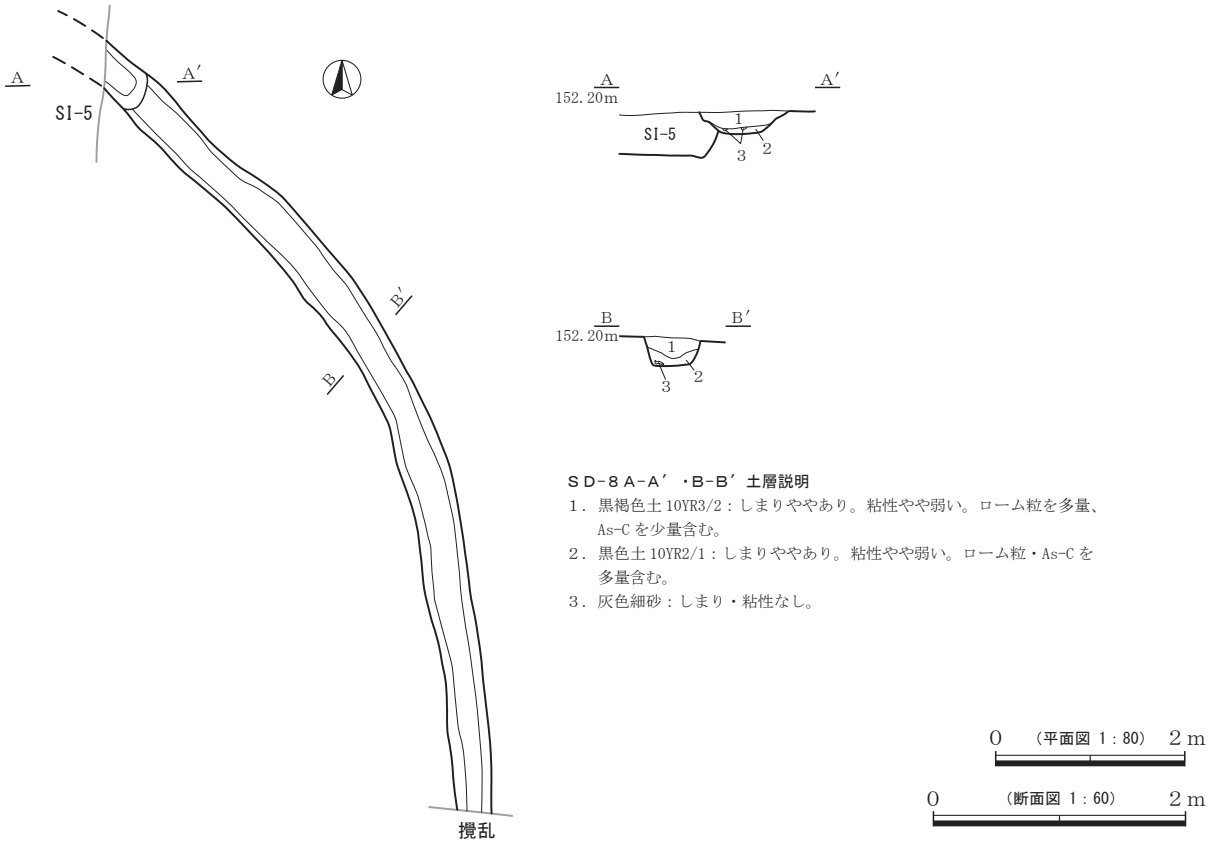
第24図　７号溝跡出土遺物

第９表　７号溝跡出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	土師器 Ｓ字状口縁台付甕	口径: 13.1 底径: (8.3) 器高: 26.6	①良好　②内外: にぶい橙 ③石英、チャート、白色粒、黒色粒　④口縁部完形、胴部ほぼ完形、台部 3/4	外面: 口縁部横ナデ。胴部横・斜方向のケズリ→中～下位斜方向のハケメ→上位縦方向のハケメ。台部横ナデ→上位に斜方向のハケメ。 内面: 口縁部横ナデ。胴部横方向のヘラナデ。台部横・斜方向のヘラナデ。	中層／煮炊きをした使用痕跡なし。
2	弥生土器 壺	口径: (11.8) 底径: － 器高: [8.4]	①良好　②外: 明赤褐、内: にぶい赤褐　③石英、白色粒、小礫 ④口縁部 1/3、胴部上位 1/5	外面: 口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部横ナデ。胴部上位縦方向のミガキ。 内面:口縁部横方向のミガキ。胴部上位斜方向のハケメ。頸部に横長の突起を貼付。突起の上面はミガキ、下面はナデ。	上層／焼成は非常に良好で、ミガキも丁寧。
3	弥生土器 鉢	口径: (13.5) 底径: － 器高: [6.6]	①良好　②外: にぶい褐、内: にぶい橙　③海綿滑針、白色粒、黒色粒　④口縁部～胴部上半 1/4	外面: 口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部横ナデ。胴部上半ハケメ→単節ＬＲ縄文を横位施文→沈線によるコの字重ね文。 内面: 口縁部～胴部上半横方向のミガキ。	下層
4	弥生土器 鉢	口径: － 底径: － 器高: －	①良好　②外: 明赤褐、内: 赤褐 ③白色粒、黒色粒　④口縁部破片	外面: 口縁部横方向のミガキ。円形貼付文。赤彩。 内面: 口縁部横方向のミガキ。赤彩。	上層
5	弥生土器 甕	口径: － 底径: － 器高: －	①普通　②外: にぶい黄褐、内: にぶい黄橙　③角閃石、白色粒 ④口縁部破片	外面: 口唇部キザミ。口縁部横方向のハケメ。 内面: 口縁部ハケメ→横方向のミガキ。	上層／内面摩耗。

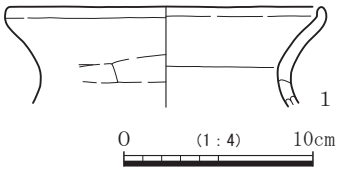
面形態：逆台形を呈する。埋没状況：覆土は As-C を多量に含み、上層は黒褐色土、下層は灰黄褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中層から、土師器Ｓ字状口縁台付甕（１）が溝の外側から内側へ落ち込むような状態で出土している。そのほか、弥生土器の破片が多量に出土するが、紛れ込みで遺構には伴わない。時期：遺物から古墳時代前期の帰属と想定される。備考：平面形態から方形周溝墓の可能性が考えられる。



第 25 図　８号溝跡

８号溝跡（第 25・26 図、第 10 表／ＰＬ．６・12）

位置：X=40809 ～ 40801、Y=-82185 ～ -82181。重複関係：５号竪穴建物跡、４号溝跡と重複する。新旧関係は５号竪穴建物跡より新しく、４号溝跡より古い。南側は攪乱に壊されるが、調査区外へ続くと推測される。走行方位：北西ー南東方向へ弧を描いて走行する。概ねＮ－ 27°－Ｗを指す。５号竪穴建物跡の土層断面観察から、竪穴建物跡を切る形で北西方向へ続くことが確認されているが、平面で捉えることはできなかった。規模：調査区内での長さ 9.20ｍ、上端幅 37 ～ 53㎝、下端幅 21 ～ 37㎝、確認面からの深さ 18 ～ 23㎝。底面の状態：概ね平坦である。断面形態：逆台形を呈する。埋没状況：覆土は As-C を含む黒褐色土を主体とし、間に細砂が確認される。自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から土師器の内斜口縁坏および甕の破片が少量出土している。時期：遺物から古墳時代の帰属と想定される。



第 26 図　８号溝跡出土遺物

第 10 表　８号溝跡出土遺物観察表

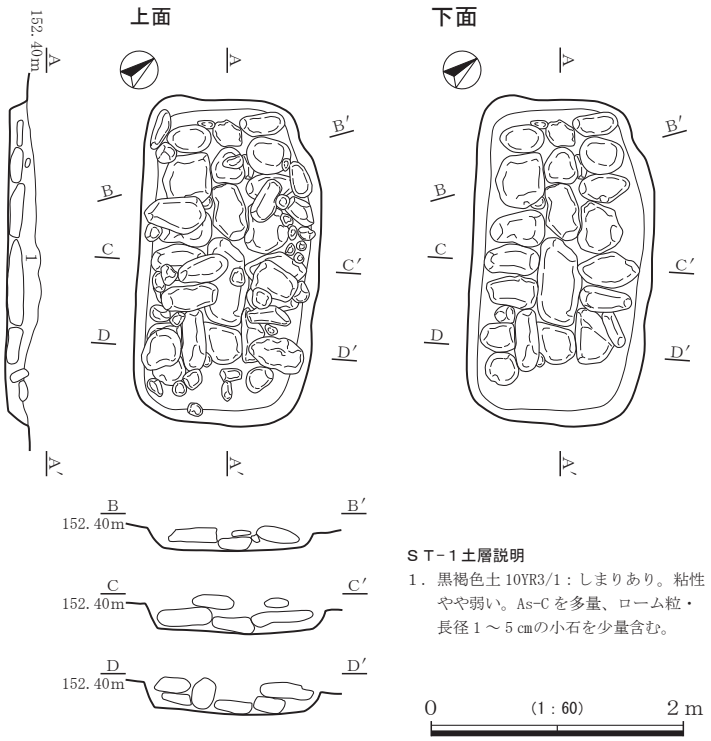
（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	土師器 甕	口径：(17.0) 底径：－ 器高：[5.3]	①良好　②内外：にぶい橙 ③石英、角閃石、白色粒　④口縁部～頸部 1/10	外面：口縁部横ナデ。頸部横方向のヘラナデ。 内面：口縁部横ナデ。頸部横方向のヘラナデ。	覆土一括

３　配石遺構

１号配石遺構（第 27 図／ＰＬ．７）

位置：X=40819 ～ 40817、Y=-82190 ～ -82187。重複関係：４号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。平面形態：土坑は隅丸長方形を呈する。配石は長方形を呈し、大振りの安山岩を３列に配している。中央の列は土坑の長軸方向と石の長辺が平行する。外側の２列は概ね長辺が直交するように置かれる。上面から出土する石は原位置を保っていないものが多いと考えられる。長軸方位：Ｎ－ 50°－Ｗ。規模：土坑は長径 2.59ｍ、短径 1.43 ｍ、確認面からの深さ 20㎝。配石は長径 2.07 ｍ、短径 1.24 ｍ、石の厚さ 10 ～ 15㎝。断面形態：土坑は浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-C・小石を含む黒褐色土で、自然埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土から As-C 降下（３世紀末）以降、As-B 降下（1108 年）以前の帰属と想定される。

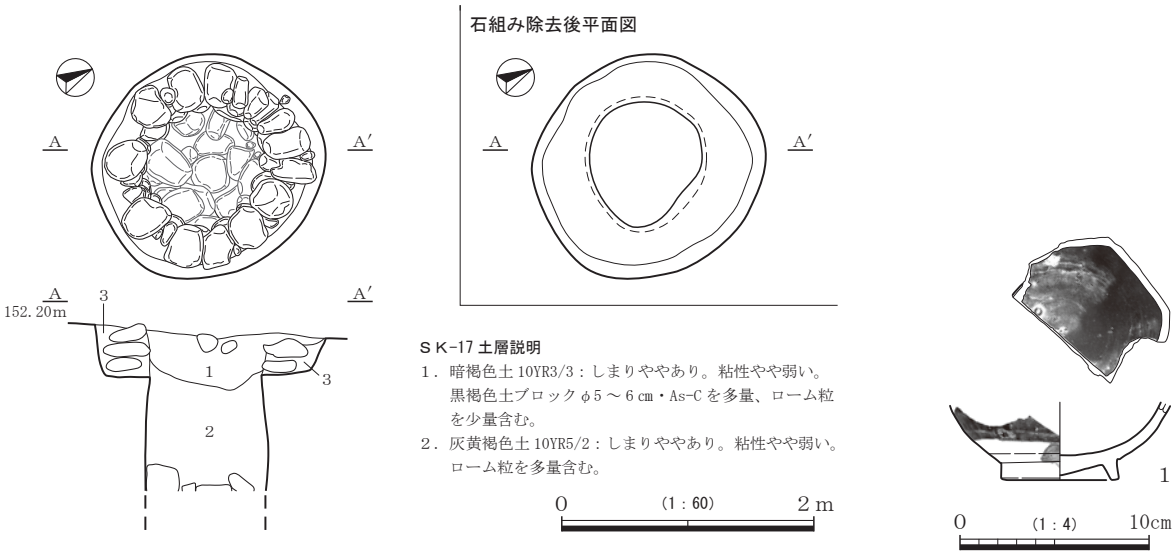


第 27 図　１号配石遺構

4　井戸跡

1号井戸跡（第 28 図、第 11 表／ＰＬ．７・12）

位置：X=40805 ～ 40803、Y=−82176 ～ −82175。重複関係：なし。平面形態：ほぼ円形を呈する。上層は安山岩の石組みで、2 ～ 3 段に積み上げられている。中層以下は素掘りである。長軸方位：Ｎ－０°。規模：石組み部分の掘り方は長径 1.82 m、短径 1.72 m、確認面からの深さ 32 ～ 40㎝を測る。井戸本体は長径 0.98 m、短径 0.89 m、確認面からの深さ 1.3 m以上を測る。断面形態：筒形を呈する。埋没状況：覆土は As-C を含み、上層は黒褐色土、下層は灰黄褐色土を主体とする。下層からは石が大量に出土しており、人為的に投棄されたものと推測される。遺物出土状況：覆土上層から近世陶器碗・擂鉢、在地系土器鍋、土師器坏・甕、須恵器碗の破片が数点出土している。１は瀬戸・美濃系の碗である。時期：遺物および覆土に As-A が含まれないことから、17 世紀以降、As-A 降下（1783 年）以前の帰属と想定される。



第 28 図　１号井戸跡および出土遺物

第 11 表　１号井戸跡出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	陶器 碗	口径：－ 底径：6.2 器高：[4.1]	①－　②釉：暗褐、胎土：淡黄 ③白色粒　④体部～高台部 1/2	丸形。ロクロ成形。高台周辺を除き全面に鉄釉。	覆土上層／瀬戸・美濃系。

5　土坑

1号土坑（第 29 図／ＰＬ．７）

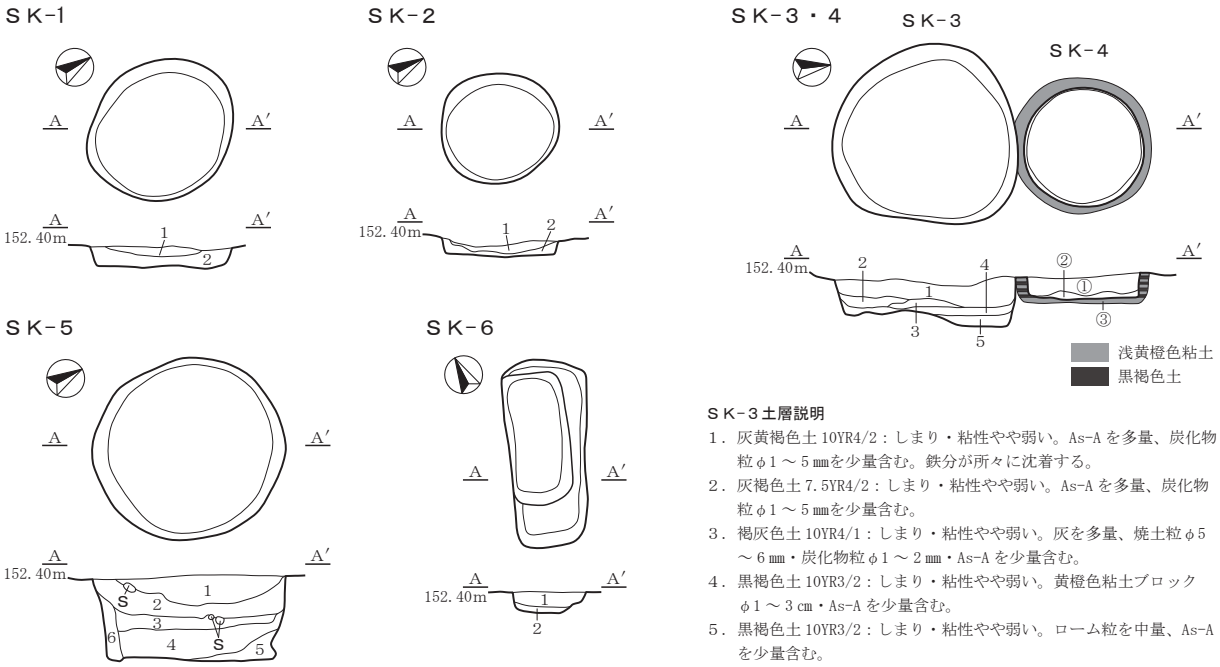
位置：X=40801 ～ 40800、Y=−82180 ～ −82179。重複関係：なし。平面形態：ほぼ円形を呈する。長軸方位：Ｎ－０°。規模：長径 1.24 m、短径 1.08 m、確認面からの深さ 17㎝。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含む黒褐色土を主体とし、下層には灰が多量に含まれる。人為埋没の可能性が想定される。遺物出土状況：覆土中から近世在地系土器鍋の破片が 1 点出土している。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

２号土坑（第 29 図／ＰＬ．７）

位置：X=40800 ～ 40799、Y=−82179 ～ −82178。重複関係：なし。平面形態：ほぼ円形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 22°－Ｅ。規模：長径 0.94ｍ、短径 0.87 ｍ、確認面からの深さ 17㎝。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含み、上層は褐灰色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況:出土していない。時期:覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

３号土坑（第 29 図／ＰＬ．７）

位置:X=40802 ～ 40800、Y=−82181 ～ −82180。重複関係: 4 号土坑と重複し、本遺構が新しい。。平面形態:ほぼ円形を呈する。長軸方位：Ｎ－８°－Ｅ。規模：長径 1.47 ｍ、短径 1.42 ｍ、確認面からの深さ 40㎝。断面形態:底面は凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況:覆土は As-A を含み、上層は灰黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。上層に炭化物粒・焼土が少量、３層に灰が多量に含まれることから、人為埋



ＳＫ-３土層説明

1．灰黄褐色土 10YR4/2：しまり・粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒φ1 ～ 5 ㎜を少量含む。鉄分が所々に沈着する。
2．灰褐色土 7.5YR4/2：しまり・粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒φ1 ～ 5 ㎜を少量含む。
3．褐灰色土 10YR4/1：しまり・粘性やや弱い。灰を多量、焼土粒φ5 ～ 6 ㎜・炭化物粒φ1 ～ 2 ㎜・As-A を少量含む。
4．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性やや弱い。黄橙色粘土ブロックφ1 ～ 3 ㎝・As-A を少量含む。
5．黒褐色土 10YR3/2：しまり・粘性やや弱い。ローム粒を中量、As-A を少量含む。

ＳＫ-1 土層説明

1．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・ロームブロックφ1 ～ 5 ㎝を多量、炭化物粒φ2 ～ 5 ㎜を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/1：しまりあり。粘性やや弱い。灰を多量、As-A を中量、ローム粒を少量含む。

ＳＫ-２土層説明

1．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒φ2 ～ 5 ㎜を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/1：しまりあり。粘性やや弱い。As-A を中量、ローム粒を少量含む。

ＳＫ-４土層説明

①．褐灰色土 10YR4/1：しまり・粘性やや弱い。As-A・ロームブロックφ1 ～ 5 ㎝を多量、炭化物粒φ1 ～ 5 ㎜を少量含む。
②．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・ロームブロックφ1 ～ 2 ㎝を少量含む。
③．浅黄橙色 10YR8/4 粘土と黒褐色土 10YR3/1 の互層：しまり・粘性あり。浅黄橙色粘土はローム粒を多量含む。

ＳＫ-５土層説明

1．灰黄褐色土 10YR5/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒φ1 ～ 5 ㎜を少量含む。
2．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒φ1 ～ 5 ㎜・小礫φ5 ～ 6 ㎝を少量含む。
3．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・炭化物粒φ2 ～ 3 ㎜を多量含む。
4．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒φ2 ～ 5 ㎜を多量、焼土粒・炭化物粒φ2 ～ 5 ㎜・ロームブロックφ1 ～ 3 ㎝を少量含む。
5．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒φ1 ～ 3 ㎜・ロームブロックφ1 ～ 5 ㎝を多量、炭化物粒φ2 ～ 3 ㎜を少量含む。
6．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒φ2 ～ 5 ㎜を少量含む。

ＳＫ-６土層説明

1．灰黄褐色土 10YR5/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。
2．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。

0　(1：60)　2 m

第 29 図　1 ～ 6 号土坑

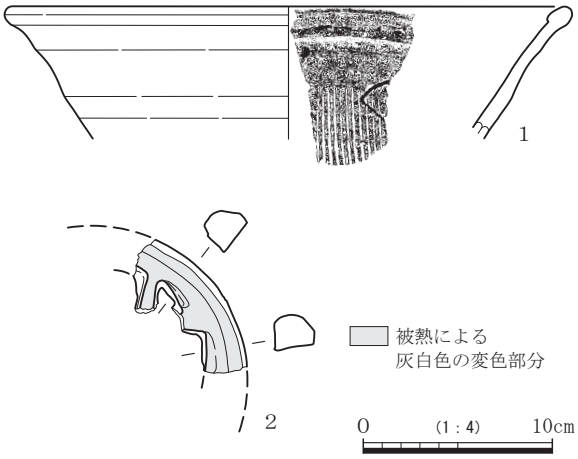
没の可能性が想定される。遺物出土状況：覆土中から近世陶磁器碗、在地系土器鍋の破片が数点出土している。時期：遺物および覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定されるる。

４号土坑（第 29 図／ＰＬ．７）

位置:X=40803 ～ 40802、Y=-82181 ～ -82180。重複関係：３号土坑と重複し、本遺構が古い。平面形態：円形を呈する。長軸方位：Ｎ－８°－Ｅ。規模：長径 0.95 m、短径 0.94 m、確認面からの深さ 24㎝。掘り方は長径 111㎝、短径 106㎝、確認面からの深さ 28㎝。断面形態：浅い箱形を呈する。構築状態：掘り方の内側に粘土と黒褐色土を貼り付けて成形している。底面は浅黄橙色粘土（厚さ２～４㎝）、壁面は浅黄橙色粘土（厚さ３㎝）と黒褐色土（厚さ１～２㎝）の互層である。埋没状況：覆土は As-A・炭化物粒を含む褐灰色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から近世陶磁器碗、在地系土器鍋の破片が数点出土している。時期：遺物および覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

５号土坑（第 29・30 図、第 12 表／ＰＬ．８・12）

位置：X=40807 ～ 40805、Y=-82182 ～ -82181。重複関係：なし。平面形態：ほぼ円形を呈する。長軸方位：Ｎ－29°－Ｅ。規模：長径 1.54 m、短径 1.45 m、確認面からの深さ 68㎝。断面形態:箱形を呈する。埋没状況：上層は As-A・炭化物粒を含む灰黄褐色土を主体とする。下層はロームブロック・炭化物粒を含む黒褐色土を主体とし、４層には少量の焼土が含まれる。下層は人為埋没の可能性が想定される。遺物出土状況：覆土中から近世陶器擂鉢、在地系土器鍋、土師質土器さなの破片が数点出土している。１の擂鉢は瀬戸・美濃系で、口縁部が玉縁状を呈する。時期：遺物から 18 世紀代の帰属と想定される。



第 30 図　５号土坑出土遺物

第 12 表　５号土坑出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

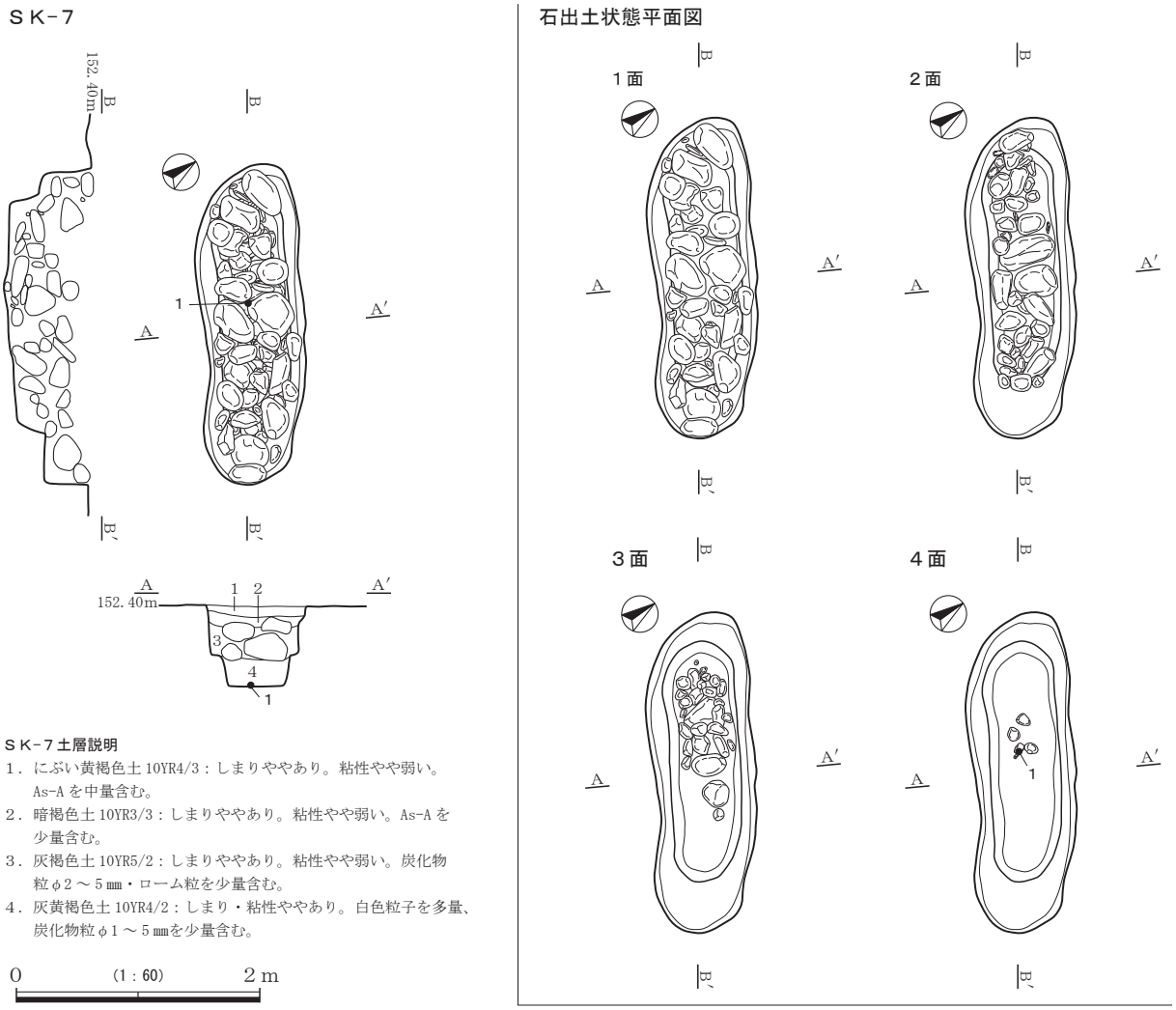
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	陶器 擂鉢	口径: (30.0) 底径: ― 器高: [7.0]	①―　②釉: 暗褐、胎土: 浅黄橙 ③チャート、黒色粒　④口縁部～胴部破片	ロクロ成形。口縁部は玉縁形。櫛目 11本以上。内外全面に鉄釉。	覆土一括／瀬戸・美濃系。
番号	器種		①法量 (cm . g) ②焼成　③色調　④胎土　⑤残存　⑥成・整形技法の特徴		出土位置／備考
2	土師質土器 さな	①上面径(11.0)、下面径: (12.3)、器高: 1.3、重さ: 20.4　②普通　③にぶい橙　④白色粒、黒色粒、褐色粒　⑤破片　⑥ナデ調整。上面は被熱により還元し灰白色化する。			覆土一括

６号土坑（第 29 図／ＰＬ．８）

位置:X=40804 ～ 40803、Y=-82184 ～ -82183。重複関係：７号溝跡と重複し、本遺構が新しい。平面形態：隅丸長方形を呈する。長軸方位：Ｎ－25°－Ｅ。規模：長径 1.49 m、短径 0.66 m、確認面からの深さ 18㎝。断面形態：底面は段差を有し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況：覆土は As-A を含む灰黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況:出土していない。時期:覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

７号土坑（第 31・32 図、第 13 表／ＰＬ．８・12）

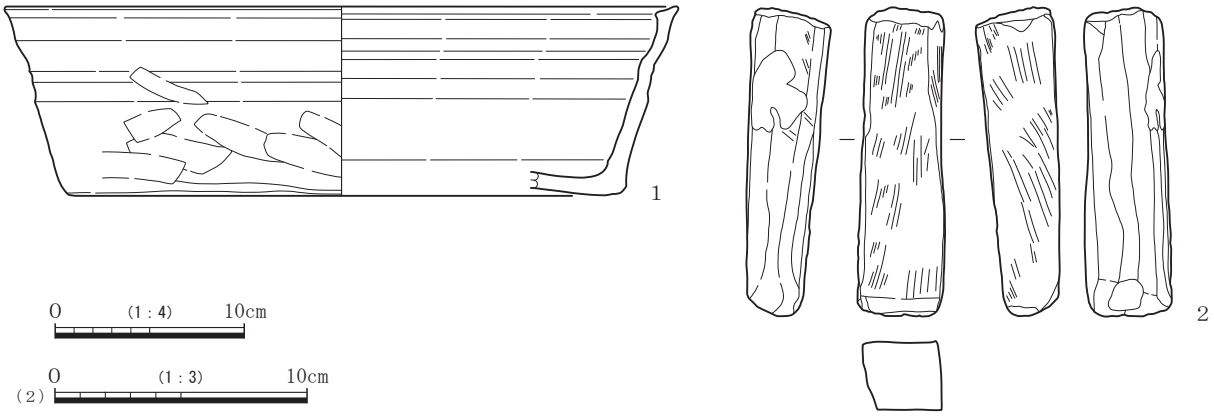
位置：X=40815 ～ 40813、Y=-82188 ～ -82186。重複関係：４号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。平面形態：東西に長い楕円形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 53°－Ｗを指す。規模：長径 2.64 m、短径 0.86 m、確認面からの深さ 65 ～ 71㎝。断面形態：底面は概ね平坦である。中央部は一段低くなって段を有し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況：上層は As-A を含むにぶい黄褐色土、下層は炭化物粒を含む灰褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。石出土状態：覆土上層から下層にかけて計 109 点の石が出土している。石は概ね４面に分けられるが、石の上面や下面が水平に揃うような状態ではなかった。石は安山岩が主体で、長さ 40㎝前後の大形の石から、長さ 10㎝前後の小形の石まで入り混じった状態であった。遺物出土状況：覆土中から内耳鍋の破片が数点、砥石が１点出土している。２の砥石は底面直上からの出土である。時期：遺物から 16 世紀代に比定される。



第 31 図　７号土坑

８号土坑（第 34 図／ＰＬ．８）

位置：X=40816 ～ 40815、Y=-82202 ～ -82201。重複関係：なし。平面形態：北西－南東方向に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 53°－Ｗ。規模：長径 1.13 m、短径 0.37 m、確認面からの深さ 20㎝。断面形態：箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含むにぶい黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。



第 32 図　7 号土坑出土遺物

第 13 表　7 号土坑出土遺物観察表

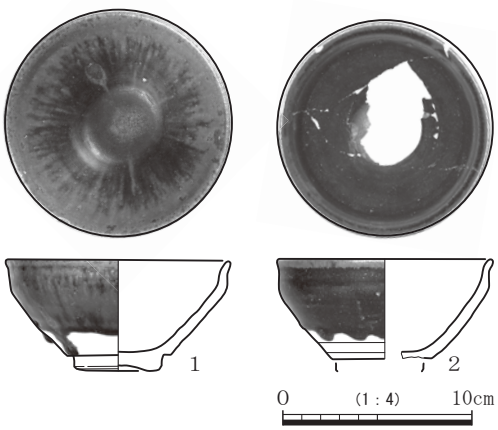
（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	中世土器 内耳鍋	口径：(35.6) 底径：(29.4) 器高：10.0	①酸化焔　②内外：にぶい褐　③雲母、チャート、白色粒、黒色粒 ④ 1/8	外面：ロクロナデ。胴部は一部ヘラナデ。底部ナデ。 口唇部は外側端部が外に突出し、中央がわずかに凹む。 内面：ロクロナデ。頸部に段をもつ。	覆土一括
番号	器種		①法量 (cm . g)　②材質　③残存　④成・整形技法の特徴		出土位置／備考
2	砥石	①長さ：12.2、最大幅：3.4、最大厚：2.7、重さ：192.05　②流紋岩　③ほぼ完形　④ 4面を砥石面として使用し、1面は非常に平滑。			底面直上

遺物出土状況：出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

９号土坑（第 33・34 図、第 14 表／ＰＬ．９・12）

位置：X=40826 ～ 40823、Y=−82198 ～ −82196。重複関係：なし。北側は調査区外となる。平面形態：北東－南西方向に長い隅丸長方形を呈すと推測され、西側に同形態の浅い掘り込みが付随する。長軸方位：Ｎ－ 36°－Ｅ。規模：調査区内での長径 2.53 m、短径 1.12 ～ 1.72 m、確認面からの深さ 13 ～ 18㎝。断面形態：底面はやや凹凸をもち、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況：覆土は As-A・黒褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中層から天目茶碗（１・２）が並べて伏せられた状態で出土している。時期：遺物は 16 世紀代に比定されると考えられるが、覆土に As-A が混入することから As-A 降下（1783 年）以降の帰属と想定される。



第 33 図　９号土坑出土遺物

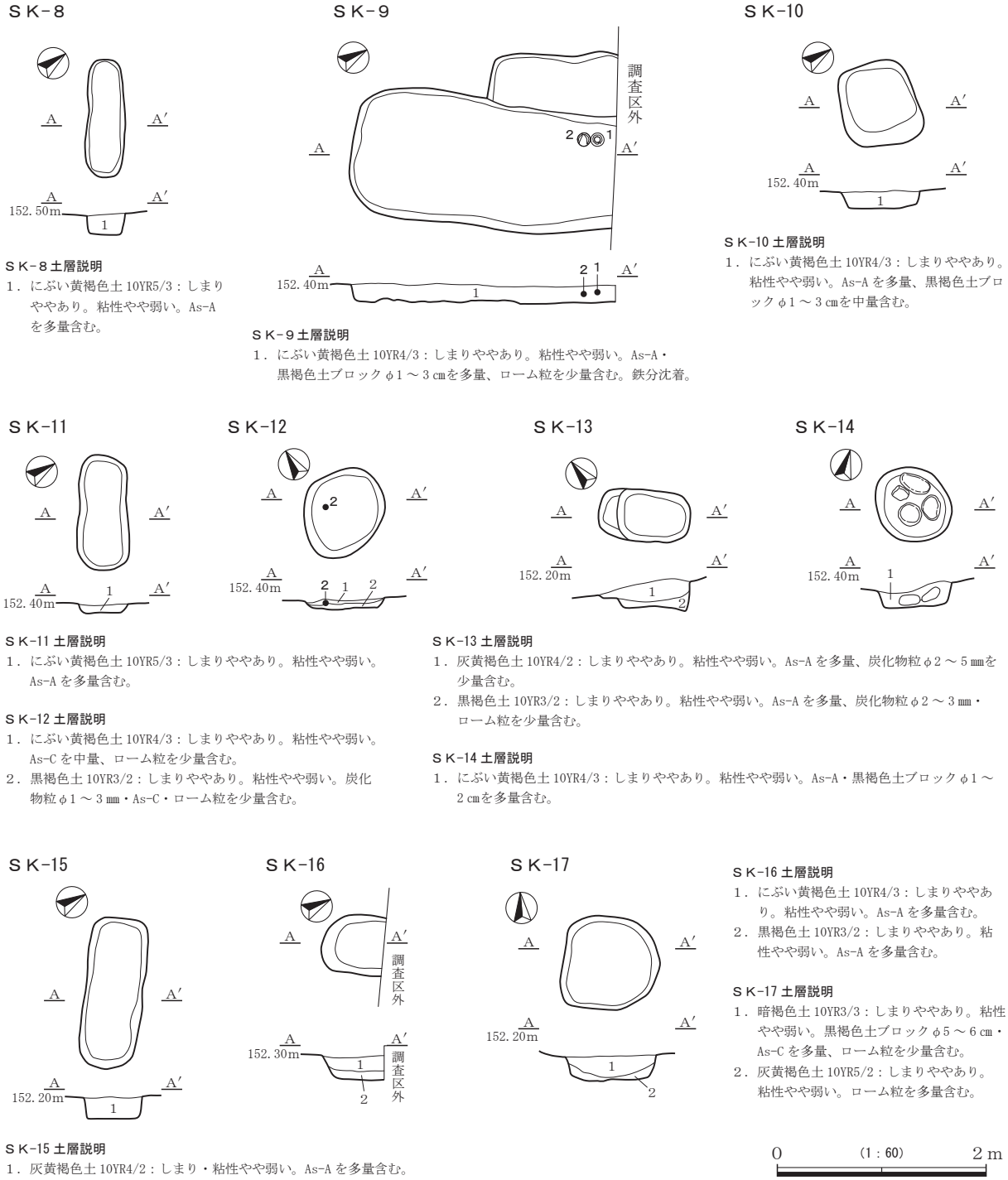
第 14 表　９号土坑出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	陶器 碗	口径：11.9 底径：4.6 器高：5.9	①－　②釉：暗赤褐、胎土：浅黄橙 ③白色粒　④ほぼ完形	中碗。天目形。ロクロ成形。体部下方から底部にヘラ削り調整。削り出し輪高台。高台周辺を除き全面に鉄釉。釉は厚い。	中層／瀬戸・美濃系。
2	陶器 碗	口径：11.4 底径：－ 器高：[5.3]	①－　②釉：極暗赤褐、胎土：浅黄橙　③白色粒　④高台部欠損	中碗。天目形。ロクロ成形。体部下方から底部にヘラ削り調整。高台周辺を除き全面に鉄釉。釉は厚い。	中層／瀬戸・美濃系。

10号土坑（第34図／ＰＬ．８）

位置:X=40821 ～ 40820、Y=-82193 ～ -82192。重複関係:なし。平面形態:隅丸方形を呈する。長軸方位:Ｎ－77°－Ｗ。規模：長径0.83ｍ、短径0.72ｍ、確認面からの深さ17㎝。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土はAs-A・黒褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土中から弥生土器の破片が数点出土しているが、紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土にAs-Aが混入することから、近世の帰属と想定される。



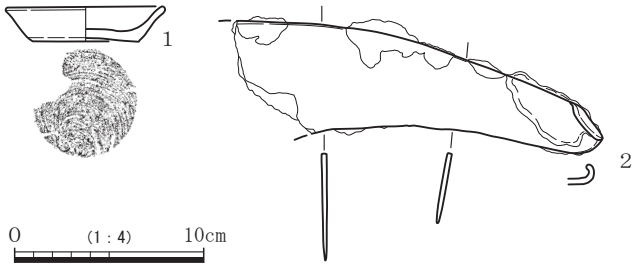
第34図　8～17号土坑

11 号土坑（第 34 図／ＰＬ．９）

位置：X=40822 ～ 40821、Y=−82199 ～ −82198。重複関係：なし。平面形態：北西－南東方向に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 57°－Ｗ。規模：長径 1.10 m、短径 0.51 m、確認面からの深さ 8 ㎝。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含むにぶい黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況:出土していない。時期:覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

12 土坑（第 34・35 図、第 15 表／ＰＬ．９・12）

位置：X=40825 ～ 40824、Y=−82202 ～ −82201。重複関係：なし。平面形態：楕円形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 54°－Ｅ。規模：長径 0.91 m、短径 0.75 m、確認面からの深さ 11㎝。断面形態：浅い箱形を呈する。埋没状況：覆土は As-C を含み、上層はにぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況：覆土上層から完形のかわらけ（１）および鉄製鎌（２）が出土している。時期：遺物から 16 世紀代の帰属と想定される。



第 35 図　12 号土坑出土遺物

第 15 表　12 号土坑出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	かわらけ	口径: 8.4 底径: 5.6 器高: 1.8	①酸化焔　②内外: 橙　③チャート、白色粒、黒色粒、褐色粒 ④ 2/3	外面: ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面: ロクロナデ。	上層
番号	器種		①法量 (㎝ . g) ②材質 ③残存 ④成・整形技法の特徴		出土位置／備考
2	鎌	①残存長: 19.5、最大幅: 5.9、最大厚: 0.3、重さ: 113.23　②鉄製　③刃部欠損　④破片			上層

13 号土坑（第 34 図／ＰＬ．９）

位置：X=40824、Y=−82203 ～ −82202。重複関係：なし。平面形態：北西－南東方向に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 43°－Ｗ。規模：長径 0.87 m、短径 0.50 m、確認面からの深さ 28㎝。断面形態:底面はほぼ平坦で長軸方向に段を有する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没状況:覆土は As-A を含み、上層は灰黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況:出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

14 土坑（第 34 図／ＰＬ．９）

位置：X=40826 ～ 40825、Y=−82201。重複関係：なし。平面形態：楕円形を呈する。長軸方位：Ｎ－⑥°－Ｗ。規模:長径 0.79 m、短径 0.70 m、確認面からの深さ 21㎝。断面形態:箱状を呈する。埋没状況:覆土は As-A・黒褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況：底面付近から安山岩が 4 点まとまって出土している。土器類は出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

15 土坑（第 34 図／ＰＬ．９）

位置：X=40822 ～ 40821、Y=-82201 ～ -82200。重複関係：なし。平面形態：北西－南東方向に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 53°－Ｗ。規模：長径 1.46 m、短径 0.56 m、確認面からの深さ 24㎝。断面形態：箱状を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含む灰黄褐色土を主体とし、人為埋没と想定される。遺物出土状況：出土していない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

16 土坑（第 34 図／ＰＬ．９）

位置：X=40829、Y=-82204 ～ -82203。重複関係：なし。北側は調査区外となる。平面形態：楕円形を呈すと推測される。長軸方位：Ｎ－ 30°－Ｅ。規模：調査区内での長径 0.60 m、短径 0.58 m、確認面からの深さ 25㎝。断面形態：浅い箱状を呈する。埋没状況：覆土は As-A を含み、上層はにぶい黄褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。自然埋没と想定される。遺物出土状況:弥生土器の破片が数点出土しているが、紛れ込みで遺構には伴わない。時期：覆土に As-A が混入することから、近世の帰属と想定される。

17 土坑（第 34 図／ＰＬ．10）

位置：X=40808 ～ 40807、Y=-82191 ～ -82190。重複関係：１号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。平面形態：隅丸方形を呈する。長軸方位：Ｎ－ 85°－Ｗ。規模：長径 0.94 m、短径 0.89 m、確認面からの深さ 24㎝。断面形態:箱状を呈する。埋没状況:覆土は As-C・黒褐色土ブロックを含む暗褐色土を主体とし、自然埋没と想定される。遺物出土状況:出土していない。時期:覆土と重複関係から、As-C 降下（３世紀末）以降、10 世紀後半以前の帰属と考えられる。

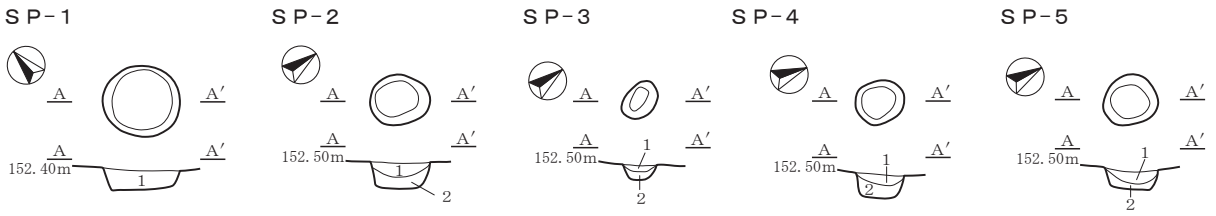
6　ピット　（第３6図、第１6表）

ピットは 20 基を検出した。ピットの帰属時期は、覆土の含有テフラから① As-A 降下（1783 年）以降、② As-B 降下（1108 年）以降、③ As-C 降下（３世紀末）以降に大別される。これらの内、③の 9・17 号ピットでは柱痕が認められたが、掘立柱建物跡や柵列を構成する状況は確認されなかった。また①の 11 号ピットでは、底面直上から石が２点出土している。長さ 25㎝前後の安山岩で、上面が平らになるような状態であった。遺物は 14・19 号ピットから弥生土器の破片が出土するが、紛れ込みで遺構に伴うものではない。計測値は以下に示す。

第 16 表　ピット一覧表

［　］は残存値を表す

遺構名	位置	規模(㎝) 長径×短径、深さ	含有テフラ	遺物
SP-1	X=40806、Y=-82182	62 × 57、18	As-C	－
SP-2	X=40806、Y=-82188	48 × 41、22	As-B	－
SP-3	X=40807、Y=-82189	33× 24、13	As-B	－
SP-4	X=40807、Y=-82192	39× 34、20	As-B	－
SP-5	X=40809、Y=-82192	44× 40、16	As-B	－
SP-6	X=40819、Y=-82188	［48］× 38、25	As-A	－
SP-7	X=40813、Y=-82186	33× 27、5	As-A	－
SP-8	X=40820、Y=-82189	48× 44、23	As-C	－
SP-9	X=40819、Y=-82187	38 × 32、27	As-C	－
SP-10	X=40822、Y=-82200	64× 61、14	As-A	－
SP-11	X=40824、Y=-82199	58 × 52、18	As-A	－
SP-12	X=40824、Y=-82199	36 × 31、16	As-A	－
SP-13	X=40825、Y=-82200	39× 31、8	As-A	－
SP-14	X=40828、Y=-82203	34× 30、7	As-B	弥生土器片
SP-15	X=40802、Y=-82183	33× 23、25	As-A	－
SP-16	X=40803、Y=-82182	24× 20、17	As-A	－
SP-17	X=40809、Y=-82194	34× 32、35	As-C	－
SP-18	X=40815、Y=-82181	55×［19］、53	As-C	－
SP-19	X=40820、Y=-82197	34 × 32、41	As-C	弥生土器片
SP-20	X=40807、Y=-82190	58× 47、57	As-C	－

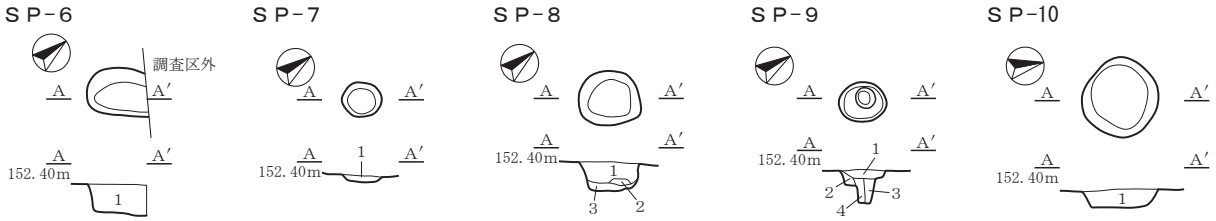


ＳＰ－１土層説明

1．暗褐色土 10YR3/3：しまりややあり。粘性やや弱い。黒色土ブロック φ1 ～ 3 ㎝を多量、As-C・炭化物粒 φ1 ～ 2 ㎜を少量含む。

ＳＰ－２・３・４・５土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまりややあり。粘性弱い。As-B を多量含む。
2．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性弱い。As-B を多量含む。



ＳＰ－６・７土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。

ＳＰ－８土層説明

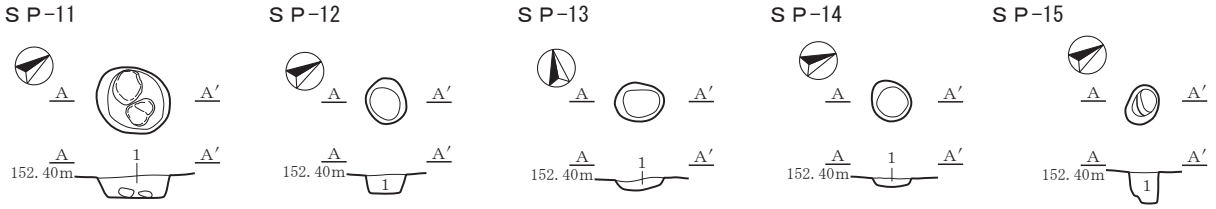
1．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。焼土粒 φ1 ～ 3 ㎜・炭化物粒 φ2 ～ 5 ㎜・As-C を多量含む。
2．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を中量含む。
3．褐灰色土 10YR4/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を中量、焼土粒 φ1 ～ 2 ㎜・炭化物粒・ローム粒を少量含む。

ＳＰ－９土層説明

1．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。焼土粒 φ1 ～ 3 ㎜・炭化物粒 φ2 ～ 5 ㎜・As-C を多量含む。
2．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量、黒褐色土を少量含む。
3．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。焼土粒 φ1 ～ 2 ㎜・炭化物粒 φ1 ～ 5 ㎜を多量、As-C を少量含む。
4．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C・ローム粒を少量含む。

ＳＰ－10 土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒 φ1 ～ 5 ㎜を少量含む。



ＳＰ－11 土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A・黒褐色土ブロック φ1 ～ 2 ㎝を多量含む。

ＳＰ－12・13 土層説明

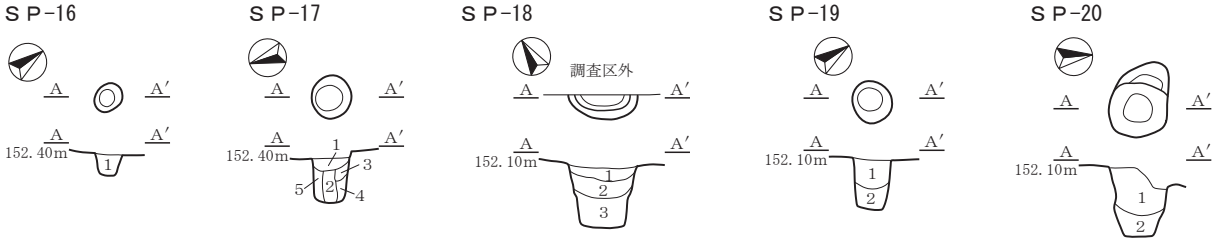
1．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量、炭化物粒 φ1 ～ 2 ㎜を少量含む。

ＳＰ－14 土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR5/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-B を多量含む。

ＳＰ－15 土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。



ＳＰ－16 土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-A を多量含む。

ＳＰ－17 土層説明

1．灰黄褐色土 10YR5/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量、As-C を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/1：しまり・粘性やや弱い。As-C を少量含む。
3．黒色土 10YR2/1：しまりあり。粘性やや弱い。
4．黒色土 10YR2/2：しまりあり。粘性やや弱い。As-C を少量含む。
5．褐灰色土 10YR4/1：しまりあり。粘性やや弱い。As-C・ローム粒を少量含む。

ＳＰ－18 土層説明

1．にぶい黄褐色土 10YR4/3：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を少量含む。
2．黒褐色土 10YR3/2：しまりややあり。粘性やや弱い。にぶい黄橙色土ブロック φ5 ～ 6 ㎝を多量、白色粒子を少量含む。
3．黒色土 10YR2/1：しまりあり。粘性やや弱い。ローム粒を少量含む。

ＳＰ－19 土層説明

1．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を中量、ローム粒を少量含む。
2．黒色土 10YR2/1：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を少量含む。

ＳＰ－20 土層説明

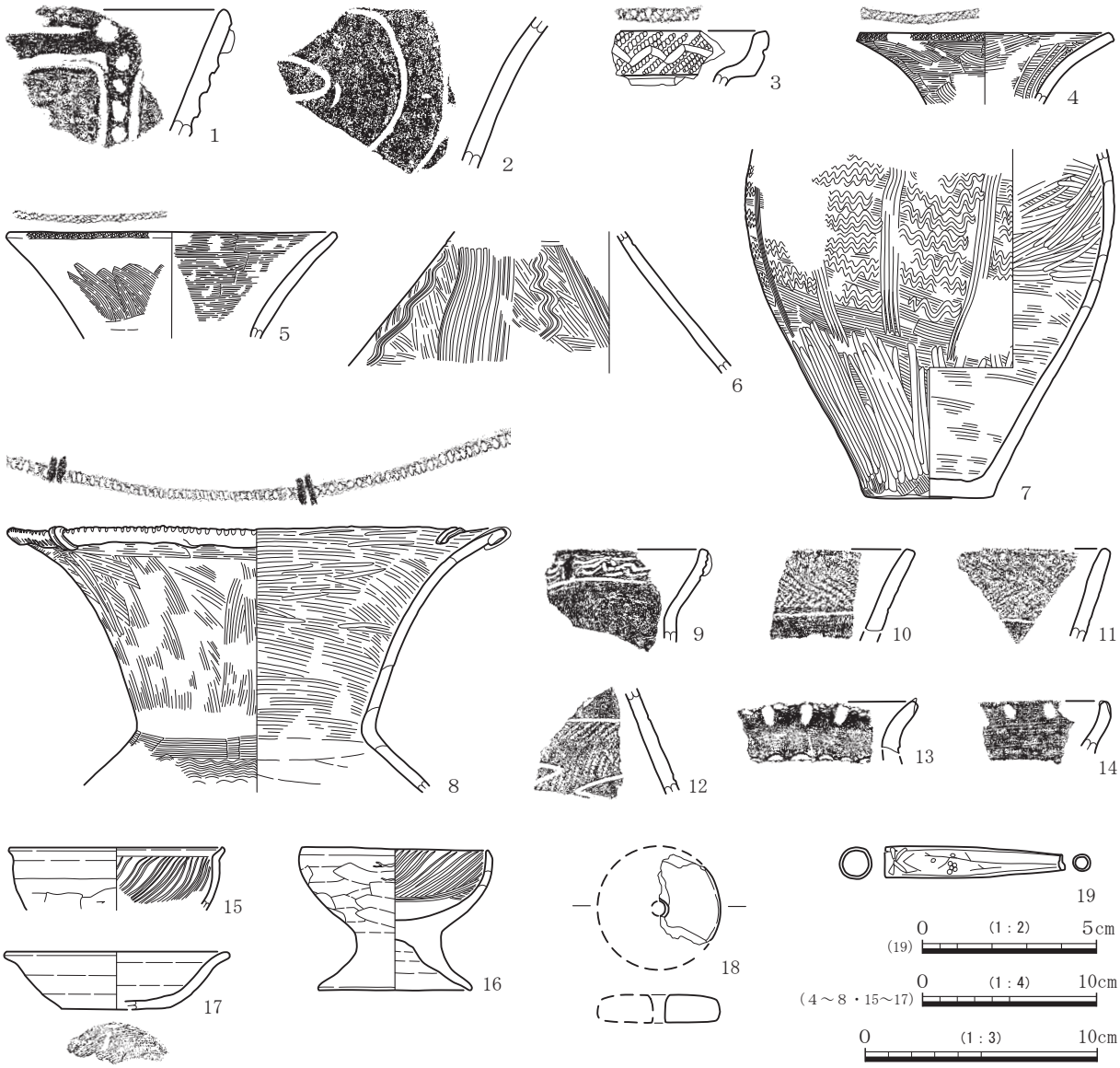
1．黒褐色土 10YR3/1：しまりややあり。粘性やや弱い。As-C を多量、ローム粒を少量含む。
2．灰黄褐色土 10YR4/2：しまりややあり。粘性やや弱い。ローム粒を多量含む。

0　(1：60)　2 m

第 36 図　1 ～ 20 号ピット

7　遺構外出土遺物　（第 37 図、第 17 表／ＰＬ．12）

遺構外より出土した遺物の中から、19 点を掲載する。１・２は縄文土器の深鉢破片である。１は後期前半の堀之内１式、２は堀之内２式に比定される。３～ 14 は弥生土器の壺・甕である。３～７は中期後半の栗林２式期に、８は後期後半の樽式期に比定され、竪穴建物跡の出土遺物と同じ様相を示している。13・14 の甕は口唇部に指頭による押捺が施されている。15 は土師器の内斜口縁坏、16 は土師器の高坏で、ともに５世紀後半に比定される。17 は還元不良の須恵器坏である。底面は糸切り無調整で、９世紀後半に比定される。18 は土製紡錘車の破片である。19 の煙管は、吸い口の形態から小泉編年のⅥ期、1900 年代に比定される（古泉弘 1987『江戸の考古学』）。



第 37 図　遺構外出土遺物

第 17 表　遺構外出土遺物観察表

（　）は推定値、[　]は残存値を表す

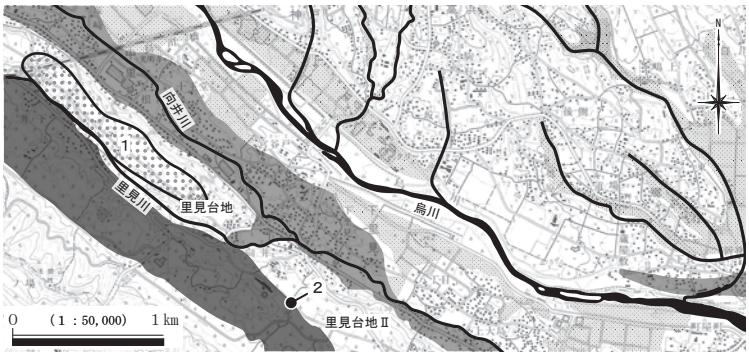
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置／備考
1	縄文土器 深鉢	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②内外：にぶい橙 ③石英、チャート、褐色粒 ④口縁部破片	外面：横位隆帯の上下に平行する沈線文。隆帯上に円形刺突文。２条の縦位沈線文による区画内に刺突文を連続して施す。 内面：横方向のナデ。	７号土坑覆土中／堀之内 1式。
2	縄文土器 深鉢	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②外：にぶい橙、内：にぶい黄橙　③石英、チャート、黒色粒　④胴部破片	外面：沈線文。 内面：横・斜方向のナデ。	表土／堀之内２式。
3	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②外：にぶい橙、内：にぶい黄橙　③石英(夾雑物少ない) ④口縁部破片	外面：受け口状口縁。口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部単節ＬＲ縄文を横位施文→波状沈線文。頸部横方向のハケメ。 内面：器面摩耗により調整不明。	調査区中央部、基本層序Ⅶ層中
4	弥生土器 壺	口径：(14.8) 底径：－ 器高：[4.1]	①普通　②外：にぶい黄橙、内：にぶい橙　③石英、黒色粒　④口縁部 1/3	外面：口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部横・斜方向のハケメ。 内面：口縁部横方向のハケメ→横・縦方向のミガキ。	調査区中央部、基本層序Ⅶ層中
5	弥生土器 壺	口径：(19.0) 底径：－ 器高：[6.1]	①普通　②内外：にぶい橙 ③石英、角閃石　④口縁部 1/6	外面：口唇部に単節ＬＲ縄文。口縁部横ナデ→斜縦方向のハケメ→下位に横方向のナデ。 内面：口縁部横方向のハケメ。	調査区中央部、基本層序Ⅶ層中
6	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：[8.1]	①良好　②内外：にぶい黄橙 ③チャート、黒色粒　④胴部上位 1/4	外面：縦・斜方向のハケメ→縦方向のミガキ→頸部との境に横位沈線文→ 3条 1単位の櫛描垂下文(左から右へ4回施文）と縦波状文を交互に施文。 内面：器面剥落により調整不明。	攪乱
7	弥生土器 壺	口径：－ 底径：7.4 器高：[20.2]	①良好　②外：灰黄褐、内：にぶい橙　③角閃石、チャート、白色粒 ④胴部下半 2/3、底部完形	外面：胴部中位横方向のハケメ→ 4条 1単位の櫛描垂下文→同単位の櫛描波状文を上から下へ 7段以上施文。胴部下位斜方向のハケメ→縦方向のミガキ。底部ヘラケズリ→ナデ。 内面：胴部中位斜方向のハケメ→横・斜方向のミガキ。胴部下位横方向のハケメ。底部ナデ。	調査区中央部、基本層序Ⅶ層中／内面胴部下位は摩耗。
8	弥生土器 壺	口径：(28.6) 底径：－ 器高：[15.2]	①普通　②内外：橙　③チャート、白色粒、黒色粒　④口縁部 1/2、胴部上位 1/3	外面：折り返し口縁。口唇部にキザミ、一部折り返しの下端部にもキザミ。2本一対の棒状貼付文。口縁部縦・斜方向のハケメ→縦方向のミガキ。頸部 10条 1単位の2連止め櫛描簾状文→ 8条 1単位の櫛描波状文。 内面：口縁部横・斜方向のハケメ→横方向のミガキ。頸部横方向のナデ。	調査区中央部、基本層序Ⅶ層中＋トレンチＡ／内外面ともに摩耗。
9	弥生土器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②内外：明赤褐　③石英、チャート　④口縁部破片	外面：細い横位沈線文により口縁部文様帯を区画。区画内に 3条 1単位の櫛描波状文→縦長の貼付文。沈線文の下はハケメ→横方向のミガキ。 内面：ハケメ→横方向のミガキ。	調査区中央部、基本層序Ⅶ層中
10	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②外：明赤褐、内：橙 ③石英、角閃石、チャート、白色粒　④口縁部破片	外面：細い横位沈線文により口縁部文様帯を区画。区画内に単節ＲＬ縄文を横位施文。沈線文の下はハケメ→ミガキ。 内面：ハケメ→横・斜方向のミガキ。	調査区中央部、基本層序Ⅶ層中
11	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②内外：明赤褐　③石英、角閃石、チャート　④口縁部破片	外面：細い横位沈線文により口縁部文様帯を区画。区画内に単節ＬＲ縄文を横位施文→斜方向の疎らなミガキ。沈線文の下はミガキ。 内面：ハケメ→横・斜方向のミガキ。	14号ピット覆土中
12	弥生土器 壺	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②外：にぶい赤褐、内：黒褐　③石英、白色粒　④胴部破片	外面：ハケメ→横・斜方向のミガキ。細い横位沈線文→単節ＬＲ縄文を横位施文→沈線文。 内面：ハケメ→横・斜方向のミガキ。	３号溝跡覆土中
13	弥生土器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①普通　②内外：にぶい黄橙 ③石英、角閃石、チャート ④口縁部破片	外面：口唇部に指頭による押捺。口縁部横ナデ。下に波状沈線文か。 内面：口縁部横方向のナデ。	６号竪穴建物跡上層
14	弥生土器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：－	①良好　②外：にぶい赤褐、内：褐 ③石英、チャート、白色粒 ④口縁部破片	外面：口唇部に指頭による押捺。口縁部横方向のハケメ→横方向のミガキ。 内面：口縁部横方向のハケメ→横・斜方向のミガキ。	調査区南東部、基本層序Ⅶ層中
15	土師器 坏	口径：(12.4) 底径：－ 器高：[3.6]	①良好　②内外：明赤褐　③石英、白色粒、褐色粒　④口縁部～体部 1/6	外面：口縁部横ナデ。体部ナデ→下位ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ。体部放射状暗文。	調査区南東部、基本層序Ⅶ層中
16	土師器 高坏	口径：(10.7) 底径：(8.8) 器高：8.2	①良好　②内外：明赤褐　③石英、チャート、白色粒、黒色粒、褐色粒　④坏部 2/3、脚部 3/4	外面：口縁部横ナデ。坏部横方向のヘラナデ。脚部横ナデ。 内面：口縁部～坏部横ナデ→放射状暗文。坏底部ヘラナデ。脚部横ナデ。	６号竪穴建物跡内攪乱
17	須恵器 坏	口径：(13.0) 底径：(6.0) 器高：3.3	①還元焔(還元不良)　②外：灰黄褐、内：黄灰　③白色粒、黒色粒 ④ 1/4	外面：ロクロナデ。底面回転糸切り。 内面：ロクロナデ。	表土
番号	器種		①法量 (cm . g) ②胎土・材質 ③残存 ④成・整形技法の特徴		出土位置／備考
18	土製紡錘車	①直径：(5.2)、孔径：(0.5)、厚さ：1.2、重さ：14.12　②チャート・白色粒・黒色粒・褐色粒　③ 1/3 ④ナデ調整。			攪乱
19	煙管	①長さ：5.1、小口径：0.8、吸口径：0.45、重さ：6.32　②真鍮製　③吸口部欠損　④吸口。上側に溶接痕。銀象嵌により文様が施される(草花文か)。羅宇が一部残存する。			表土

Ⅵ　まとめ

今回の調査では、弥生時代の竪穴建物跡４棟、古墳時代の溝跡２条、古墳時代～平安時代の配石遺構１基・土坑１基・ピット７基、平安時代の竪穴建物跡２棟、中世の土坑２基・ピット５基、近世の溝跡（As-A 復旧溝）６条・井戸跡１基・土坑 14 基・ピット８基が検出された。過年度の調査成果を踏まえて概観したい。

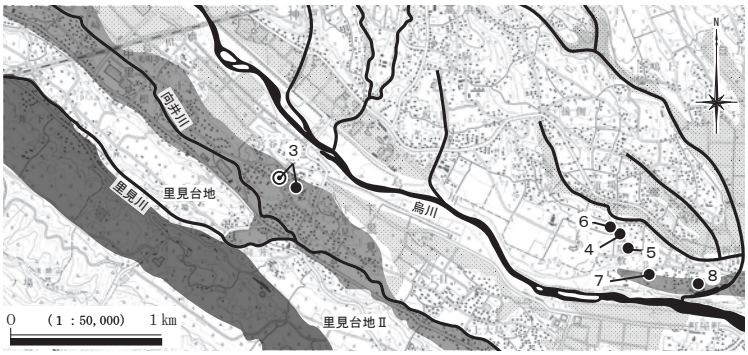
弥生時代　中期後半の栗林２式期に比定される竪穴建物跡２棟（3・4 号竪穴建物跡）、後期の樽３式期に比定される竪穴建物跡２棟（5・6 号竪穴建物跡）が検出された。竪穴の全容が把握できたのは５号竪穴建物跡のみだが、その中でも中期後半と後期ではいくつかの差異が認められた。各時期の特徴を挙げると、中期後半は竪穴の深さが浅く、床面の状態は３号竪穴建物跡では貼床と硬化面を確認できるが部分的であり、4 号竪穴建物跡では貼床は認められず明確な硬化面も捉えられない。4 号竪穴建物跡では柱穴が確認され、竪穴短辺（約 4.4 m）の柱穴間の距離は 2.2 mを測る。後期は竪穴の深さが深く、床面にはロームブロックを多量に含む貼床が認められ、全面的に非常に固く締まり顕著な硬化面を捉えることができる。5 号竪穴建物跡では柱穴と炉跡が確認され、竪穴短辺（約 4.1 m）の柱穴間の距離は 1.2 ～ 1.3 mで、中期後半に比べて近く設定されている。炉跡は竪穴の北側で検出され、竪穴短辺の柱穴間を結ぶ線の外側に位置している。このように中期後半と後期を比較すると、竪穴の深さ、床面の状態、柱穴間の距離に違いがみられた。竪穴の深さや柱穴配置の違いは上屋構造の変化によるものと想定される。また、上記のような竪穴構造の特徴は、中期後半では富岡市上高田社宮子原遺跡Ⅰ（水田 2014）の事例と、後期では本郷台地の道場Ⅱ遺跡や稲荷森遺跡（榛名町誌編さん委員会 2010）の事例と共通するものがみられ、西毛地域において通有の概念があったことが示唆される。

群馬県の弥生文化は、大きく２つの文化期に分割される（若狭 2003）。第１文化期は弥生時代前期～中期中葉まで、第２文化期は同中期後半～後期にかけてである。本遺跡周辺の弥生時代の遺跡をみると、第１文化期は烏川右岸の里見台地上に点在している。しかし、下里見上ノ原・中原遺跡で中期中葉の住居跡が１棟、中里見原遺跡で中期中葉の再葬墓が１基検出されたのみで、その様相は不明瞭である。第２文化期の遺跡は、烏川右岸の下位河岸段丘面と左岸の本郷台地上および下位河岸段丘面に分布している。集落については中期後半が本遺跡で確認される。後期は本遺跡および蔵屋敷遺跡、蔵屋敷Ⅱ遺跡、道場Ⅱ遺跡、寺内遺跡、稲荷森遺跡で確認されており、烏川左岸の本郷地区に集落が集中



1．中里見原遺跡　2．下里見上ノ原・中原遺跡

弥生時代前期～中期中葉の遺跡



3．下里見宮谷戸遺跡　4．蔵屋敷遺跡　5．蔵屋敷Ⅱ遺跡　6．道場Ⅱ遺跡
7．寺内遺跡　8．稲荷森遺跡

弥生時代中期後半～後期の遺跡

第 38 図　周辺の弥生時代の遺跡

し展開する様子が窺える。この時期の水田遺構は調査されていないが、地形をみると、右岸は里見川が台地を分断し下位河岸段丘を貫流・開析して複雑な低地を形成しており、左岸は本郷台地の中を小さな谷津が細かく開析している。こうした低地や谷津を利用して、小規模な水田が営まれていたと考えられている。

墓制については、第３次調査区で中期後半の再葬墓の可能性がある土坑が１基、後期と想定される礫床墓が４基検出されている。第３次調査区と集落が確認された今回の調査区とは東西に約 80 m離れており、墓域と集落域が分かれて形成されていたことが看取される。礫床墓は中部高地系の葬法であり、中部高地と榛名地域の関係の強さを窺うことができよう。

古墳時代　前期と想定される溝跡１条（7 号溝跡）、中期～後期と想定される溝跡１条（8 号溝跡）が検出された。7 号溝跡は調査区外へ向かってコの字形に曲がる平面形態や、完形のＳ字状口縁台付甕が出土することから方形周溝墓の可能性が指摘される。集落は第１～３次調査区で確認されている。前期の住居跡が２棟、中期の住居跡が 30 棟が検出され、特に５世紀後半の住居数が多い。榛名地域では５世紀後半に集落が増加する現象がみられ、本遺跡も同様の傾向を示している。中期に集落の盛行がみられるものの、後期の住居跡は現段階では検出されておらず、集落の中心は本遺跡から離れるものと推測される。

平安時代　再び住居跡が確認されるのは 10 世紀後半に入ってからである。10 世紀後半の住居跡が本調査区（1・2 号竪穴建物跡）と第２次調査区で３棟、11 世紀代～ 12 世紀初頭の住居跡が第１～３次調査区で３棟検出され、平安時代中期～後期に小規模な集落が営まれていたと推測される。また、集落内に耕作された畠跡も検出されており、集落内の様相を復元する上で貴重な事例となっている。

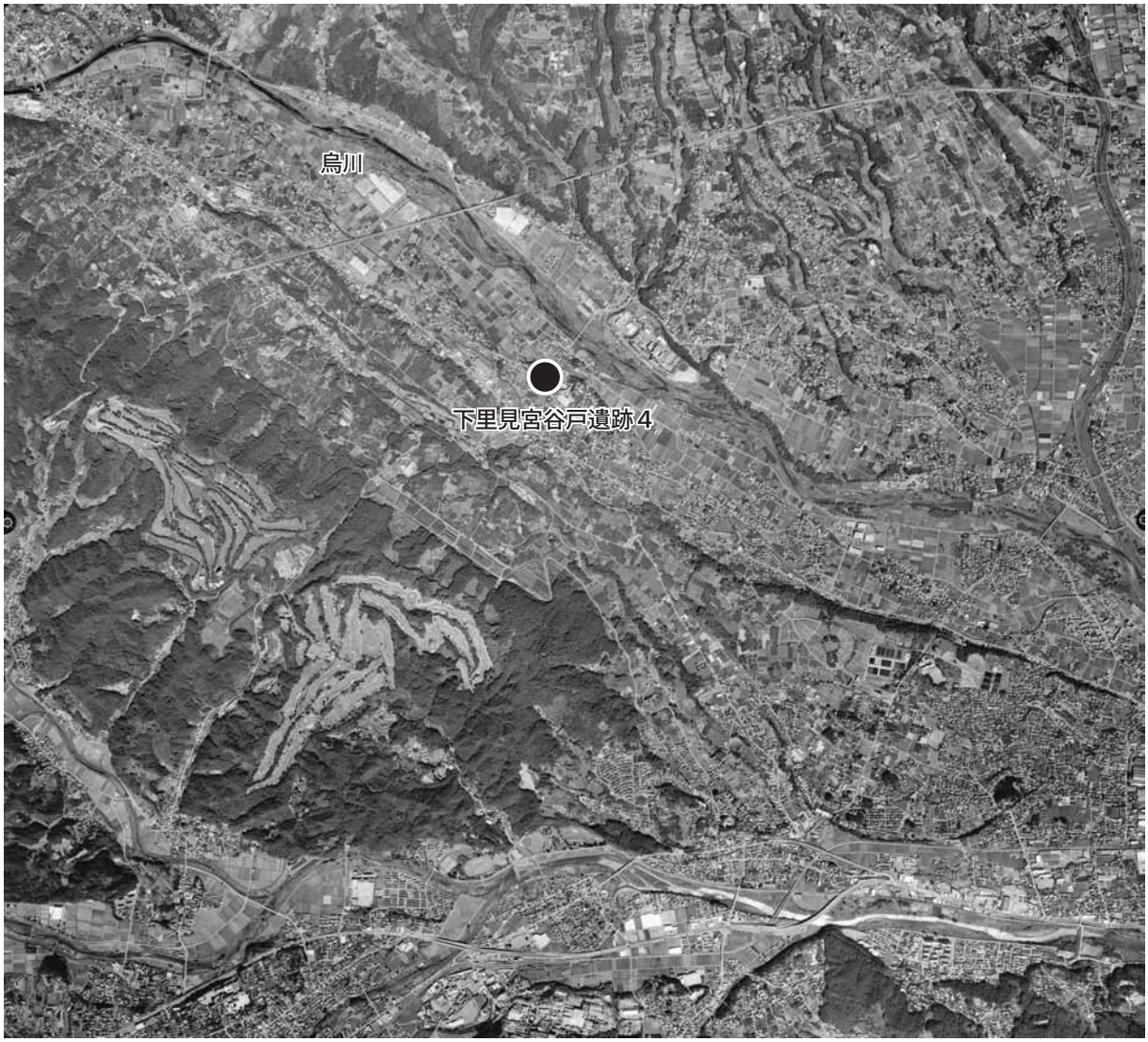
中近世　中世においても人々の活動の痕跡が捉えられ、本調査区では 16 世紀代と想定される土坑が２基（7･12 号土坑）検出された。第１～３次調査区でも中世の溝跡や土坑･ピット、14 世紀代の貿易陶磁器（青磁碗）が確認されている。

本調査区の北西約 50 mに位置するさわらび幼稚園は、かつてこの地にあった天台宗万福寺を母体として昭和 32 年（1957）に開設された。万福寺は中里見にある光明寺の末寺であり、『里見村誌』によれば開基は寛永 11 年（1634）祐慶法印となっている。近世における寺院は信仰上の拠り所であっただけでなく、住職は様々な問題を調停・解決し、決まり事の証人になるなど、地域社会で名主などの村役人に劣らない力をもつ存在でもあった。また、寺子屋を開いて村人へ教育を施したことなども知られている。本調査区では 17 ～ 18 世紀と想定される井戸跡や、As-A 降下（1783 年）以降の土坑・ピットなどが検出されており、寺院とその周辺村落での生活の一端を垣間見ることができる。

【主要引用・参考文献】

石川日出志　2002「栗林式土器の成立過程」『長野県考古学会誌』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000『中里見遺跡群　中里見中川遺跡・中里見根岸遺跡・中里見原遺跡・上里見井ノ下遺跡』
里見村誌編纂委員会　1960『里見村誌』
鈴木正貴　2001「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第２号
高崎市教育委員会　2013『下里見宮谷戸遺跡第１次・下室田街遺跡・上中居荒神遺跡第３次』
高崎市教育委員会　2014『下里見宮谷戸遺跡２・足門東屋敷間遺跡・五霊神社古墳』
高崎市教育委員会　2014『下里見宮谷戸遺跡３・権田関谷遺跡・金古町裏遺跡・小八木宅地添遺跡２・飯玉遺跡３・南大類村南遺跡２』
馬場伸一郎　2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 145 集
榛名町誌編さん委員会　2010『榛名町誌　資料編１　原始古代』
榛名町誌編さん委員会　2011『榛名町誌　通史編　上巻　原始古代・中世』
榛名町誌編さん委員会　2012『榛名町誌　通史編　下巻　近世・近代現代』
藤澤良祐　1987『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1988『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』瀬戸市歴史民俗資料館
水田雅美　2014『上高田社宮子原遺跡Ⅰ』富岡市教育委員会
若狭徹　2003「群馬県における弥生社会の成長と安中地域」『安中市史』第二巻通史編

写真図版



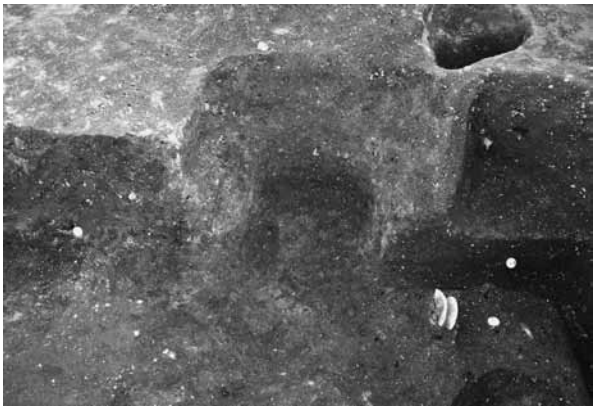
遺跡の位置と周辺の地形（2006 年国土地理院撮影 KT20061X － C5 － 9）

調査区遠景（南東から）

調査区全景　第１面（上が北東）

調査区全景　第２面（上が北東）

１号竪穴建物跡　全景（北西から）



１号竪穴建物跡　カマド全景（北西から）

２号竪穴建物跡　全景（北西から）

２号竪穴建物跡　炭化材出土状態（北西から）

３号竪穴建物跡　全景（北東から）

４号竪穴建物跡　全景（南西から）

４号竪穴建物跡　Ｐ２遺物出土状態（南西から）

４号竪穴建物跡　Ｐ２遺物近景（南西から）

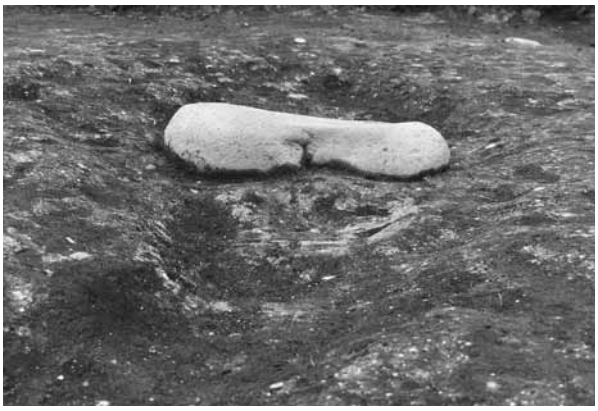
４号竪穴建物跡　Ｐ２石出土状態（南西から）

４号竪穴建物跡　Ｐ２石近景（南西から）

５号竪穴建物跡　全景（南から）

５号竪穴建物跡　全景（北から）

５号竪穴建物跡　炉全景（南から）



５号竪穴建物跡　炉近景（南から）

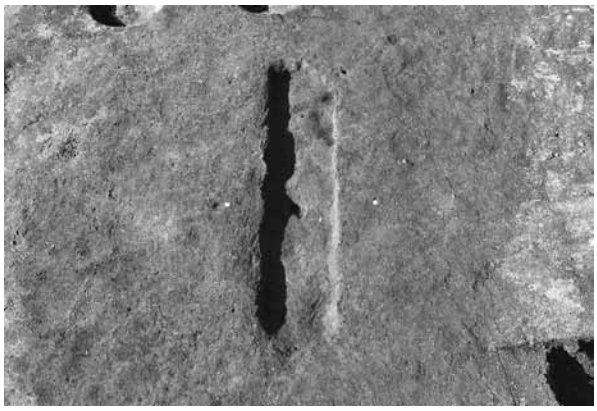
５号竪穴建物跡　貯蔵穴全景（南から）

６号竪穴建物跡　全景（南西から）

６号竪穴建物跡　貯蔵穴全景（北西から）

６号竪穴建物跡　貯蔵穴近景（南西から）

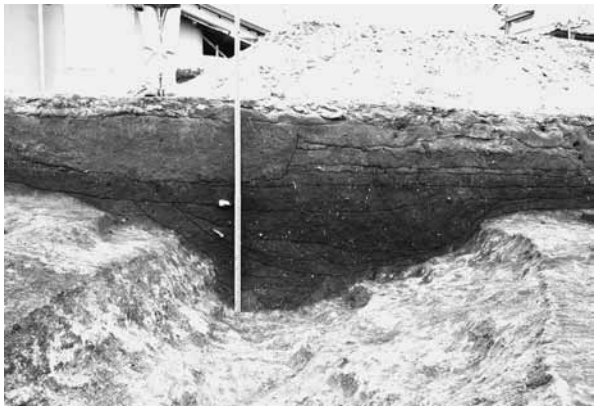
１号溝跡　全景（南東から）



２号溝跡　全景（南東から）

４号溝跡　全景（北から）

５号溝跡　全景（南東から）



７号溝跡　土層断面（北東から）

３号溝跡　全景（北東から）

６号溝跡　全景（北東から）

７号溝跡　全景（南東から）

７号溝跡　遺物出土状態（東から）

７・８号溝跡　全景（東から）

８号溝跡　全景（南東から）

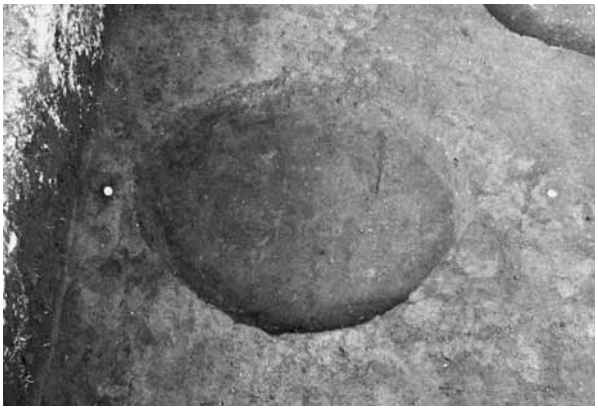
１号配石遺構　上面全景（北西から）

１号配石遺構　下面全景（北西から）

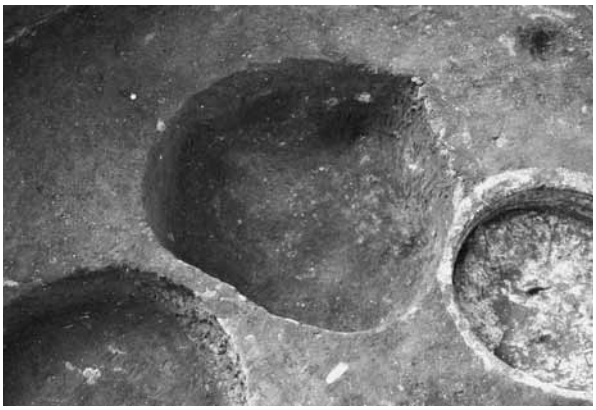
１号井戸跡　全景（北西から）

１号井戸跡　石出土状態（北西から）

１号土坑　全景（南東から）



２号土坑　全景（南東から）



３号土坑　全景（南東から）

４号土坑　全景（東から）

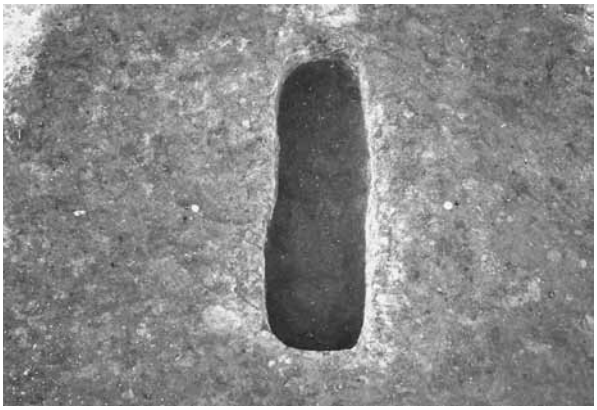
５号土坑　全景（南東から）

６号土坑　全景（南東から）

７号土坑　上面石出土状態（北西から）

７号土坑　下面石出土状態（北西から）

７号土坑　最下面石出土状態（北西から）



８号土坑　全景（南東から）

10 号土坑　全景（南東から）

９号土坑　全景（北西から）

９号土坑　遺物近景（北西から）

11 号土坑　全景（南東から）

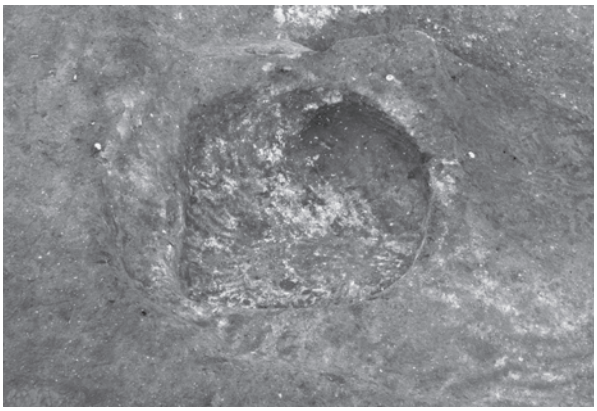
12 号土坑　全景（北西から）

13 号土坑　全景（南東から）

14 号土坑　全景（南東から）

15 号土坑　全景（南東から）

16 号土坑　全景（南東から）



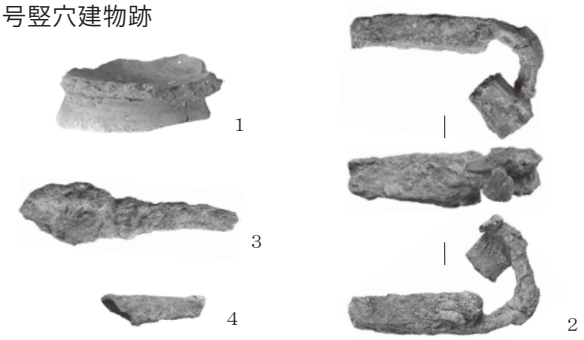
17号土坑　全景（南西から）

基本層序Ａ　南西壁（北東から）

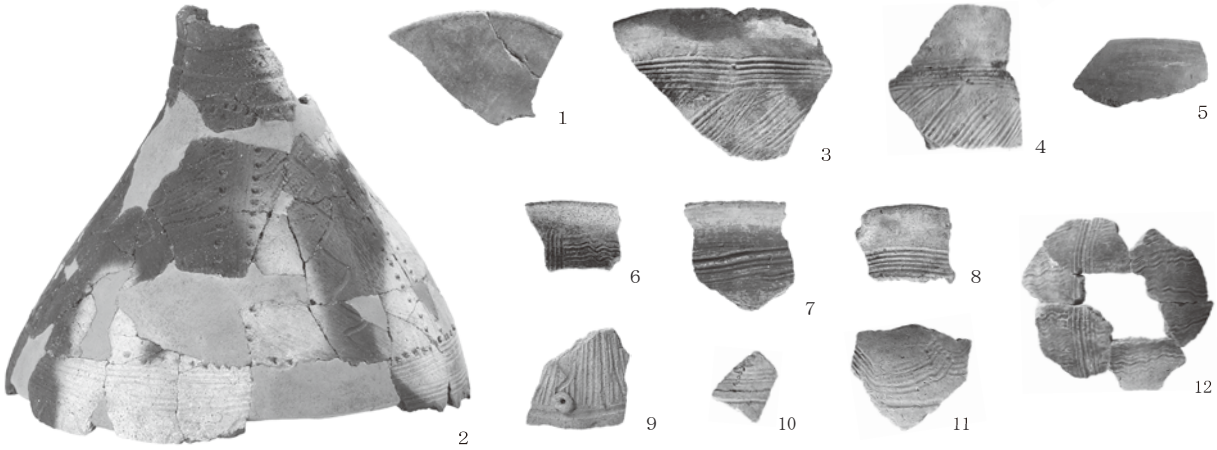
基本層序Ａ　北西壁（南東から）

1号竪穴建物跡

2号竪穴建物跡

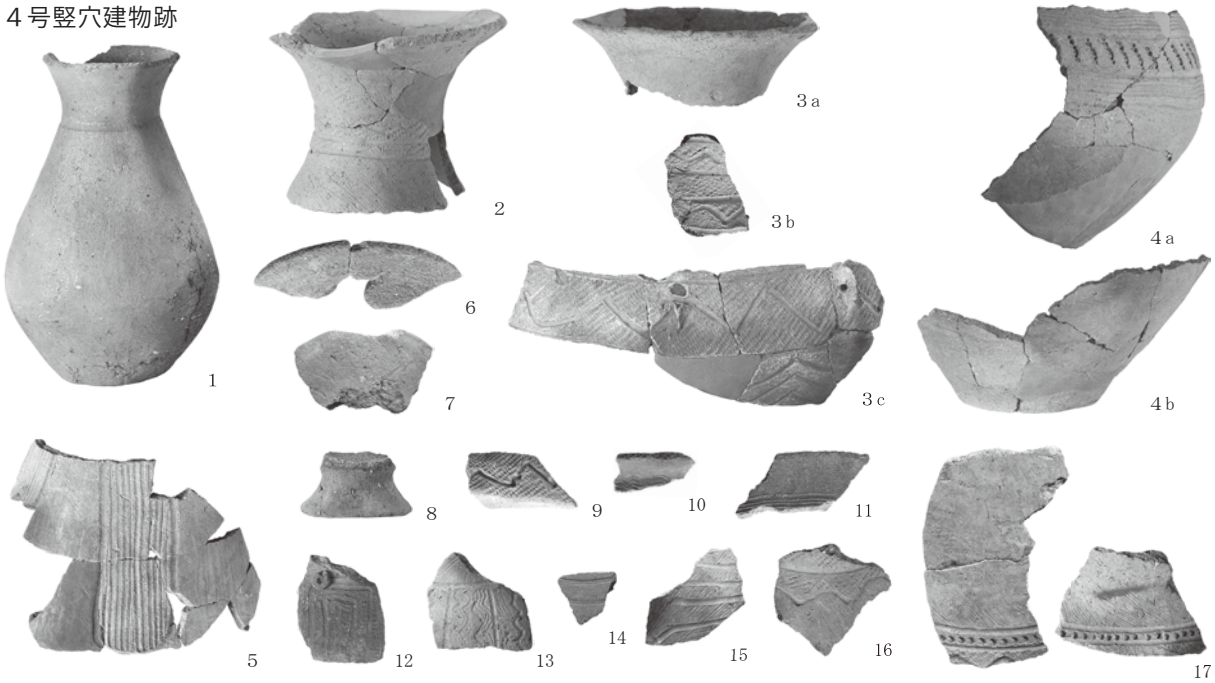


3号竪穴建物跡



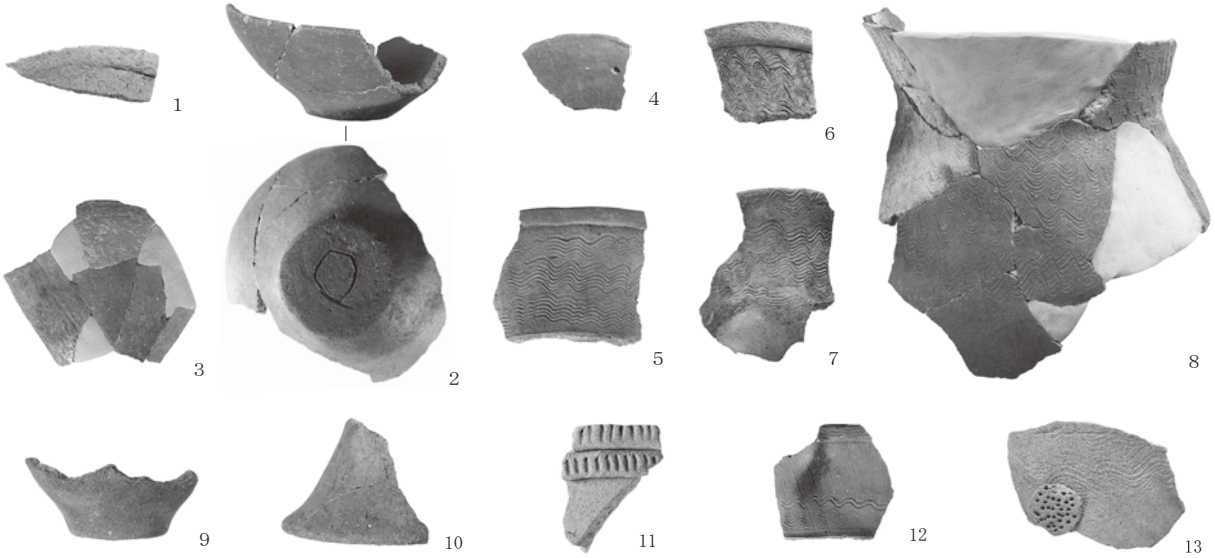
出土遺物（１）

４号竪穴建物跡



５号竪穴建物跡

６号竪穴建物跡



出土遺物（２）

7号溝跡

1

2

3

4

5

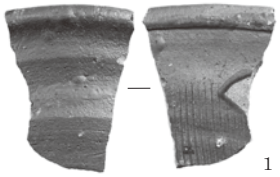
8号溝跡

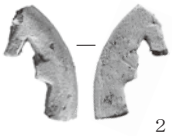
1

1号井戸跡

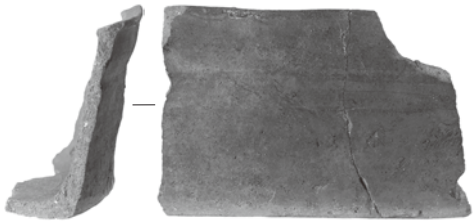
1

5号土坑


1


2

7号土坑


1

2

9号土坑

1

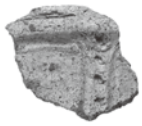
2

12号土坑

1

2

遺構外


1

2

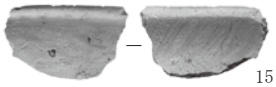
3

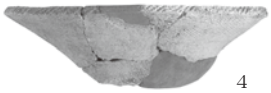
5

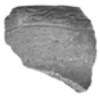
6

13

14


15

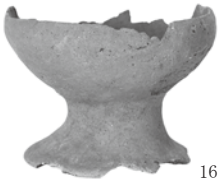

4

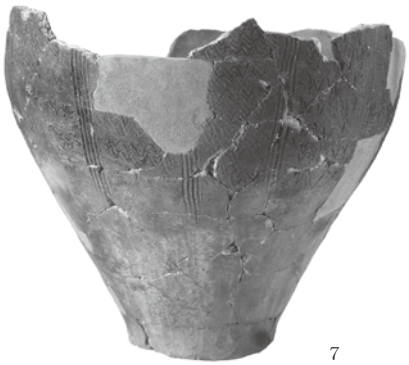

9

10

11

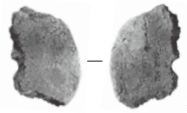
12


16


7

8

17


18

19

出土遺物（3）

報告書抄録

フリガナ	シモサトミミヤガイトイセキ４
書名	下里見宮谷戸遺跡４
副書名	幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第438集
編著者名	有山径世
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146　群馬県前橋市公田町1002番地１　℡ 027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	令和元年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
下里見宮谷戸遺跡４	群馬県高崎市 下里見町字 宮谷戸451、 452-1、453、 454、455、457番	102020	754	36°36′42″	138°91′73″	20190107 ～ 20190222	579.59㎡	幼稚園の新園舎建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下里見宮谷戸遺跡４	集落	弥生時代 古墳時代 古　代 中世・近世	竪穴建物跡　６棟 溝跡　８条 配石遺構　１基 井戸跡　１基 土　坑　17基 ピット　20基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、かわらけ、内耳鍋、陶器、土師質土器（さな）、土製品（紡錘車）、鉄製品（刀子・鎌・不明品）、石製品（砥石）、煙管	弥生時代中期後半および後期、平安時代の集落。古墳時代前期の方形周溝墓の可能性がある溝跡。古墳時代～平安時代に帰属する配石遺構。

高崎市文化財調査報告書第438集

下里見宮谷戸遺跡４

―幼稚園の新園舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査―

令和元年９月20日印刷

令和元年９月30日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社